OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代日本語における動詞の中止形の記述的研究
Author(s)	森田, 耕平
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67098
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

博士学位申請論文

現代日本語における動詞の中止形の記述的研究

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程
文化表現論専攻　日本語学専門分野
学籍番号　20B11821

森田　耕平

【目次】

第１部　序

第１章　本研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　1.1.　本研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　1.2.　本研究の立場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
　　1.2.1.　動詞の中止形の定義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
　　1.2.2.　分析の基本概念：アスペクトと動詞のタイプ・・・・・・・・・・・・・・ 4
　　1.2.3.　「出来事間の関係」の二つの側面、および機能・・・・・・・・・・・・・ 5
　1.3.　問題となる現象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　　1.3.1.　アスペクトが出来事間の時間的関係に関与する・・・・・・・・・・・・・ 7
　　1.3.2.　動詞のタイプが中止形の意味の分化に関与する・・・・・・・・・・・・・10

第２部　先行研究と本研究の方法

第２章　先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　2.1.　現代の研究概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　2.2.　記述的研究：奥田（1989）と仁田（1995）　・・・・・・・・・・・・・・・・14
　　2.2.1.　奥田靖雄（1989）「なかどめ―動詞の第二なかどめのばあい」・・・・・・15
　　2.2.2.　仁田義雄（1995）「シテ形接続をめぐって」・・・・・・・・・・・・・・16
　2.3.　「中止形」という概念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　　2.3.1.「中止形」という用語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　　2.3.2.　活用表の中での位置づけ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

第３章　本研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　3.1.　用例の収集方法と量的分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　　3.1.1.　用例の収集方法と範囲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　　3.1.2.　量的分布の確認・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
　　3.1.3.　分析対象の確認・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
　3.2.　本研究の用語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

第３部　分析各論

第４章　シテが主体動作客体変化動詞の場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
　4.1.　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

4.2.　定形動詞が継続相の場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
4.2.1.　客体が同一の場合：共通の客体の結果状態・・・・・・・・・・・・・・・・34
4.2.2.　客体が同一でない場合：補助的な客体の結果状態・・・・・・・・・・・・35
4.3.　定形動詞が完成相の場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
4.3.1.　客体が同一の場合：共通の客体に対する先行動作とその結果状態・・・・40
4.3.2.　客体が同一でない場合：補助的な客体に対する先行動作とその結果状態・41
4.4.　本章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42

第5章　シテが主体変化動詞の場合：姿勢変化動詞の分析・・・・・・・・・・・・・45
5.1.　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
5.2.　分析対象と先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
5.2.1.　本章の分析対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
5.2.2.　先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
5.3.　用例の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
5.3.1.　分類の基準の確認・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
5.3.2.　シテが意図的に準備された主体の結果状態を表す場合・・・・・・・・・・50
5.3.3.　シテが付随的な主体の結果状態を表す場合・・・・・・・・・・・・・・・58
5.4.　本章のまとめと考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
5.4.1.　分析の整理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
5.4.2.　シテの動詞述語としての機能・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

第6章　シテが主体変化動詞の場合：装着動詞と所持動詞の分析・・・・・・・・・・66
6.1.　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
6.2.　先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
6.2.1.　シテの意味記述に関して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
6.2.2.　動詞分類上の位置づけ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
6.3.　用例の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
6.3.1.　装着動詞の場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
6.3.2.　所持動詞の場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
6.4.　本章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85

第7章　シテが主体動作動詞の場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
7.1.　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
7.2.　先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
7.3.　用例の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
7.3.1.　定形動詞が継続相の場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91

7.3.2.　定形動詞が継続相の場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94
7.3.3.　その他注意すべき場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
7.4.　本章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109

第8章　シテイテ（シテオリ）の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
8.1.　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
8.2.　先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
8.3.　量的分布と分析対象の確認・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
8.4.　シテイテとシテオリの共通の意味・機能：同時的時間的関係の構成・・・・115
8.5.　シテイテとシテオリの比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
8.5.1.　シテイテのみが用いられる場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
8.5.2.　シテイテとシテオリの両形式が用いられる場合・・・・・・・・・・・・120
8.6.　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・121
8.6.1.　並列性と従属性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
8.6.2.　シテイテの状況語的意味・機能・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
8.6.3.　シテイテの第二中止形としてのあり方・・・・・・・・・・・・・・・・123
8.6.4.　シテ（シ）との総合的な比較に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・124

第4部　結論

第9章　分析のまとめと今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
9.1.　総合的な考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
9.1.1.　時間的関係について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
9.1.2.　役割的関係について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
9.1.3.　動詞の中止形の機能について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・129
9.2.　今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131
9.2.1.　時間的関係について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131
9.2.2.　役割的関係について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・132
9.2.3.　動詞の中止形の機能について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・133

【用例出典】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
【参考文献】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140
【謝辞】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146

第１部　序

第１章　本研究の概要

1.1.　本研究の目的

現代日本語の動詞には、次の二重下線部のような形式がある。

(1) 僕はなんとなく不安になって、洗面所まで行った。洗面所のドアは開けはなしになっていた。僕は戸口に立って、妻のうしろ姿を眺めた。彼女は青い無地のパジャマに着替え、鏡の前に立ってタオルで髪を拭いていた。（『ねじまき鳥クロニクル』）

二重下線部の「なって」「立って」のような、学校文法で言う動詞の連用形に、助辞「て」がついた形式を、本研究では動詞の一つの形式と考える。以下、各動詞の形式をまとめて「シテ」と一般的なかたちで表す。一重下線部の「着替え」のような学校文法で言う動詞の連用形も、シテと類似した意味・機能で用いられることがある。これをシテと同様に「シ」と表す。本研究はこれらを動詞の＜中止形＞と呼ぶ。

本研究の目的は、動詞の中止形が表す出来事[1]とそれがかかる動詞述語が表す出来事の間の関係、そして、その関係の中で動詞の中止形が表す意味を、文法的・意味的特徴から分類して記述することである。出来事間の関係のあり方のさまざまなバリエーションを取り出すとともに、バリエーション相互の関係を体系的に整理する。そのような整理を通じて、中止形の機能的側面も考察する。

中止形に関する従来の研究でも、意味・用法の分類的記述は行なわれてきた。また、分類を総合して、多様な用法に共通する、形式の基本的な特性に迫ろうとするものもある。しかし、先行研究では、素朴な言語事実の観察の段階で、分類のための文法的基準が十分に取り出されておらず、また、検討しきれていないバリエーションがあったことから、いまだその基本的な文法的・意味的性質をとらえたかたちでの記述は行なわれていない。動詞の中止形、さらには動詞述語の抽象的な性質をとらえるためにも、本研究は、すでに取り出された分類を前提に精密化するのではなく、分析の一般的観点を示しながら、言語事実としての多様な意味関係を展開的に記述するものである。

本研究では、上記のような目的のために、「動詞の中止形は述語の一形式である」という前提に立ち、動詞の中止形が、例（1）のように文の中で中止的な述語として用いられる場合に注目する。中止的な述語としてではなく、一つの動詞述語の一部となっている場合（いわゆる補助動詞や複合動詞の前要素としての用法）は扱わない。そのために、中止形とそれがかかる主要な動詞述語、それらに対して共通の一つの主語を主要な要素とする文を主な対象とする。そして、動詞の中止形のなかでは、用法が広く基本的な形式であるシテを主な対象として分析を進める。

[1] 本研究では動作や変化、状態といった動詞述語が表す事象を指すのに「出来事」という用語を用いる。

本博士論文の構成は以下の通りである。第 1 部「序」では、本研究の概要を述べる（第 1 章)。第 2 部「先行研究と本研究の方法」では、先行研究（第 2 章)、研究の方法（第 3 章）の順で、具体的記述のための枠組みや、分析に用いる用例について述べる。第 3 部「分析各論」では動詞の中止形の用例の分析・記述を行ない（第 4〜8 章)、第 4 部「結論」では分析のまとめと今後の課題を述べる（第 9 章)。

1.2. 本研究の立場

本研究の基本的な言語分析の理論と方法は、鈴木（1972)、奥田（1975、1984、1992)、工藤（1995、2014）といった言語学研究会の立場に拠っている。言語学研究会の動詞研究においては、動詞の構文的機能に基づいたパラダイム観（活用）に従って、「文末に位置し文を言い切る（終止)」という最も典型的な述語機能を果たし、テンス・ムード・アスペクトといった形態論的カテゴリーの文法的意味が十全に展開する「終止形」の研究が進められた。それとともに、「文中にあって、文を言い切らない（非終止)」諸形式について、規定語（いわゆる連体修飾語）になる場合や、条件関係や時間関係を表す連用的な従属複文形式の記述が進展した。さらに、奥田（1989）[2]を始めとする動詞の中止形（「なかどめの形」）についても、一連の記述が行なわれた。本研究は、基本的にこの奥田（1989）の分析が示したアプローチに従うものである。

1.2.1. 動詞の中止形の定義

本研究は動詞の中止形を、意味・機能的に共通した動詞の諸形式と考える。

奥田（1992）によれば、日本語の動詞は以下のような性質を持つ品詞である。

①語彙的な意味として、主に、動作、変化、状態といった限られた時間帯のなかに成立して、存在し、消えていく、具体的で動的な現象をとらえている。
②構文論的な機能として、述語の位置におかれ、主語によって表現される物の動作、変化、状態をさししめしながら、その主語とともに具体的な現象としての出来事を表す。
③形態論的な形式として、テンス、アスペクト、ムードの体系を持つ。

奥田（1992）では、「動詞は物の動的な特徴をさししめしながら、述語としてはたらくがゆえに、テンス・アスペクト・ムードの形態論的な体系をもたされる（同：7)」として、動詞が述語になることを主要な機能とする品詞であることが述べられている。工藤（1995：46）も、

[2] 言語学研究会編（1989)『ことばの科学 2』では、「なかどめ―動詞の第二なかどめのばあい」の執筆者名は「言語学研究会・構文論グループ（新川忠・樋口文彦・比毛博・山内和夫・湯本昭南)」となっている。しかし言語学研究会編（1990)『ことばの科学 4』所収の「なかどめ―動詞の第一なかどめと第二なかどめとの共存の場合」では、執筆者の新川忠氏により、「なかどめ―動詞の第二なかどめのばあい」の執筆者が奥田靖雄氏であること、また引用の際は奥田靖雄氏の名前で引用すべき旨が書かれている（新川 1990：171)。本研究ではこれに従い、以下、奥田（1989）と表記する。

動詞は「時間的展開性のある動態的事象をとらえ、述語になって文の陳述性を担うという構文的機能を果すことを基本的使命とする品詞」であり、「終止」という構文的機能（接続関係）のもとで、アスペクト・テンス・ムードといった文法的カテゴリーの体系を全面的に備えていると述べている。これらの把握においては、「終止」という一つの構文的機能のもとに複数の文法的形式が統一的にとらえられ、かつ、各文法的形式に、複数の文法的意味が統一的に表現されるものと考えられる。

例えば「食べていた」は、「継続相・過去・叙述法断定」というアスペクト・テンス・ムード的な意味を持つ。「食べ-て-い-た」に分析し「食べ」のみを動詞とみなす、いわゆる学校文法的な把握とは異なる。また「食べていた」という同じ形式でも、「弁当を食べていた男」のように名詞を修飾する成分となる場合は、「連体」という構文論的機能と、命令や意志のムードを表し分けないという形態論的特性を示すものとして、「男は弁当を食べていた」のような「終止」の場合とは区別される。

このような枠組みによって、本研究では、シテとシを「中止」という共通の機能のもとでとらえるのみならず、例えば次の例（2）の下線部の、「住んでいて（シテイテ）」のようなアスペクトについて有標の形式も一つの中止形とする。形式的には「住んで-いて」のように二つの中止形に分けることもできるが、それぞれを独立したものと考えるわけではない。

（2）シカゴはその洗練された料理によって世に知られている都市ではないが、そこにたまたま親戚が住んでいて、彼女の身元引受人になってくれた。（「ハナレイ・ベイ」）

さらに、アスペクトのみならず、以下のような文法的に有標な諸形式もすべて動詞の中止形となる。表中には示していないが、「食べさせられておりまして」のような複数の文法的意味を表現する形式や、「食べてもらって」のようにいわゆる補助動詞が結合している場合も中止形の一形式と考える[3]。

【動詞の中止形の諸形式】

		使役	受動	アスペクト	否定	丁寧
第一中止形	シ	サセ	サレ	シテオリ（シテイ）	シナク・セズ（ニ）	—
第二中止形	シテ	サセテ	サレテ	シテイテ（シテオッテ）	シナクテ・シナイデ	シマシテ

本研究は、奥田（1989）の「第二なかどめ」「第一なかどめ」を言い換えるかたちで、助辞テのつく形式を＜第二中止形＞、そうでないものを＜第一中止形＞と呼ぶ。これらの形式は、基本的に、「文中にあって文を言い切らずに続ける」という構文論的機能と、「テンス・ムード

[3] さらに、「食べたかもしれなくて」「食べたはずで」のように動詞にモダリティ形式がついた形式は、動詞の形態論的な形式とは言えないが、文の中止的な述語としての機能を果たすという意味では広く中止形と考えられる。

を表し分けない」という形態論的特徴を共通して持つ。この点で、文末に位置して文を言い切って終え、テンス（スル・シタ）・ムード（スル・シロ・シヨウ）を形態論的に表し分ける諸形式とは区別される。また本研究は、文を言い切って終える機能・意味・形式を持ち、中止形がかかっていく動詞を奥田（1989）に従って、＜定形動詞＞と呼ぶ。中止形は非定形動詞と考える。このほか、シナガラ、シテカラ、シタリといった従属的な動詞形式は、連用的な位置で用いられる点では中止形と共通しているが、これらは形式に応じた特定の意味・機能を持つ点で中止形とは異なっている。このような動詞形式の把握（活用観）についての、先行研究上の位置づけについては 2.3.2 節で、定形動詞の定義については 3.2 節で再度述べる。

1.2.2. 分析の基本概念：アスペクトと動詞のタイプ

本研究の分析のための基本概念となるのは、＜アスペクト＞および＜動詞のタイプ＞である。

まず、アスペクトについて述べる。アスペクトは、動詞の形態論的カテゴリーであり、工藤（1995：47）によれば、「完成相と継続相の対立によって示される、同一の動態的事象に対する〈時間的展開（内的時間）の側面からの捉え方の相違〉」である。完成相（スル・シタ）と継続相（シテイル・シテイタ）は、「時間のなかに現象する運動を〈継続性を無視して時間的に限界づけてとらえる〉か、〈時間的限界を無視して継続的にとらえるか〉で対立している（同:66）」。

アスペクトは、動詞述語における時間の表現のうえでテンスと不可分の体系をなし、さらにムードとともに、文における陳述性を支えている。そして重要なことに、アスペクトは、テクストにおいて、物語を構成する複数の出来事間の時間的関係（タクシス）を表し分ける機能を持つ。「来た。見た。勝った。」のように完成相のスル・シタは＜継起性＞の中に、「来ていた。見ていた。勝っていた。」のように継続相のシテイル・シテイタは＜同時性＞の中に出来事を配置するために用いられる。このことを、工藤（1995）は次のように述べている。

> 運動のとらえかたの相違と運動間の時間関係の相違は、基本的には相互規定的である。時間的な継起（連鎖）のなかに出来事を配置するとすれば、その出来事＝運動はどんなに長く続くものであっても、継続性を無視し、時間的に限界づけられてとらえられなければ、次の運動への展開性がない。一方、時間的な同時＝共存のなかに出来事を配置するとすれば、どんなに短時間のものであっても、時間的限界が無視されて、出来事＝運動はおしひろげられ、継続的にとらえられることになる。テクスト上の機能と実質的なアスペクト的意味とはきりはなすことはできない。それゆえ、シテイルは単なる〈継続性〉ではなく、〈同時=継続性〉を表すと考えなければならない。アスペクトはまさにこのような機能をはたすために成立してきたカテゴリーである。（同：64）

上記のように、アスペクトは、まずは文を言い切る形式としての動詞述語において、複数の文が表現する複数の出来事間の時間的関係を表すテクスト的機能を持つ。すなわち、一つの文の述語内部で完結する文法的意味ではなく、本来的に、複数の文の相互関係の表現に用いられ

る文法的カテゴリーである。本研究は、アスペクトが複数の出来事間の時間的関係を構成するという事実に基づいて、一文中において、動詞の中止形と定形動詞が表す複数の出来事間の時間的関係をとらえようとするものである。そこには当然、独立した文の連鎖との異なりがあるが、その特徴にも目を配りながら、分析を進める。

次に、動詞のタイプについて述べる。動詞の分類には、記述の立場・目的によってさまざまなものがあるが、本研究では、工藤（1995）の動詞分類に沿って分析する。これは、次のように、動詞を（A）典型的アスペクト対立がある外的運動動詞、（C）アスペクト対立がない静態動詞、および（B）アスペクト対立はあるが人称等によって意味・機能が変容する内的情態動詞に区別するものである。以下は、工藤（1995：69-70）を参考に筆者がまとめたものである。

［工藤（1995）の動詞分類］

（A）**外的運動動詞**：アスペクト対立あり

開ける、切る、殺す、食べる、見る、読む、たたく、歩く、遊ぶ、動く、座る、行く、死ぬ、枯れる、曇る、結婚する　など

（B）**内的情態動詞**：アスペクト対立あるが人称性による変容あり

思う、考える、信じる、望む、心配する、感動する、苦しむ、驚く、あきれる、感じる、見える、痛む、疲れる　など

（C）**静態動詞**：アスペクト対立なし

ある、いる、値する、甘すぎる／存在する、異なる、意味する／優れている、精通している、そびえている、面している　など

工藤（1995：70）によれば、（A）外的運動動詞は、時間のなかに成立（開始）・展開・消滅（終了）し、場合によっては結果を残す、ものの動態的な運動をとらえている動詞らしい動詞である。現代日本語の動詞の圧倒的多数がここに属しており、この動詞グループにおいて、スル対シテイルのアスペクト対立が、典型的なかたちで成立する。これに対して（C）静態動詞は、時間のなかへの現象を問題にしえない関係・特性をとらえているか、時間のなかに現象したとしても時間的展開性のない、存在・空間的配置をとらえている静的なものである。このような動詞らしくない動詞においては、スル対シテイルのアスペクト対立が存在しない。本研究は、動詞の中止形について、動詞のアスペクト的な意味と、そのテクスト的な機能に注目した分析を行なうため、外的運動動詞を主要な対象とする。外的運動動詞には動作や変化のタイプによって 3 種（主体動作客体変化動詞、主体変化動詞、主体動作動詞）に分けられる。第 3 部「分析各論」では、基本的に外的運動動詞の下位タイプごとの記述を行なう。詳しい分類については 1.3.2 節で紹介する。

1.2.3.　「出来事間の関係」の二つの側面、および機能

本研究では、動詞の中止形は、基本的に、文中の他の主要な成分（典型的には述語）にかかっていく従属的な形式であると考える。従って、本研究の記述の目的とする、二つの動詞述語が表す出来事間の関係は、動詞の中止形の側だけを観察しても正確にとらえることができない。また、動詞の中止形の基本的な意味特徴は、奥田（1989）が指摘するように、主要な述語が表す主たる出来事に対して、副次的な出来事としての動作や状態を表すことである。つまり「動詞の中止形の意味」と言う場合は、「主たる出来事に対する、副次的で関係的な意味」であることを含意しており、必然的に、主たる述語とそれが表す出来事のあり方との相関を観察することが必要である。

そして次のように、分析に際しては出来事間の関係の、＜時間的関係＞と＜役割的関係＞の二つの側面を分けて取り出し、「出来事間の関係」と言う際にはその総体を指すものとする。

出来事間の関係―時間的関係
　　動詞の中止形の意味：主たる動作に先行する動作
　　主たる動作と同時に存在する状態　など
　―役割的関係（狭義の意味関係）
　　動詞の中止形の意味：主たる出来事の際の姿勢
　　主たる出来事の生じる原因　など

（例）私は庭に出て、妻に手を**振った**。
　［時間的関係：二つの動作の継起＋シテが表す結果状態と主たる動作の同時存在］
　［役割的関係：主たる出来事を行なう際の場所＋主たる出来事］

中止形の実際の使用には、二つの独立した出来事の間の時間的関係あるいは役割的関係がとらえにくい場合もある。例えば、「彼は笑って**ごまかした**」のような場合には、「笑って」と「ごまかす」が二つの別々の出来事を表しているのではなく、「ごまかす」という一つの主たる出来事を詳しくするのに「笑って」が用いられているとも考えられる。従って、このような場合、二つの出来事の時間的関係を問うことは難しいだろう。また、「彼はたばこをふかして、コーヒーを**飲んだ**」のような場合は、二つの出来事は互いに独立していて時間的関係をとらえることは可能であるが、中止形が定形動詞に対して表す役割的意味の側面は相対的に明確ではない（いわゆる「並列」という分類も可能であろう）。いずれも、中止形の特性をとらえるにあたって見落とすことのできない場合である。

しかし、こうした場合をとらえるためにも、典型的なかたちで二つの出来事の間に認められる時間的関係と役割的関係のあり方を整理する必要があると考える。従って、分析した動詞の中止形の文は、これらの両面の観点から規定する。先行研究では、本来異なった関係性に基づいた特徴が、「継起（時間的関係）」「付帯状態（役割的関係）」といったラベルにおいて並置されることも多いが、本研究はこのようなアプローチは採らない（この点については 2.2 節参

照)。

このような意味的側面の考察を通じて、動詞の中止形の構文的機能をもとらえることが可能になる。本研究で「機能」と言うとき、二つの意味合いがある。第一に、活用形式としての中止形が、文中にあって文を言い切らず続ける、すなわち「中止する」という構文的な働きを指す場合である。これは文末にあって文を言い切って終える、すなわち「終止する」という働きに対するものであり、工藤（1995）の「接続関係」と重なる。第二に、中止形の、述語、あるいは修飾語・状況語といった文の成分としての働きを論じる際にも「機能」という語を用いる（個々の成分の定義については 3.2 節を参照)。これは、奥田（1975）や工藤（2002）が示す、「機能構造（主語・述語・補語・修飾語・状況語など)」と「意味構造（主体・動作・客体・様態・原因など)」の区別に基づいたものである。この意味で、「動詞の中止形の意味」と言った際は、第二の意味での「機能」に対置されることを確認しておく。

1.3. 問題となる現象

本研究では、動詞の中止形と定形動詞を中心とした文の実例を観察することで浮かび上がる具体的な問題を手がかりに、二つの出来事間の関係の分析を試みる。文全体を観察するのは、従来の研究において、中止形がかかる定形動詞の側の特徴、さらに中止形と定形動詞の相関が十分に検討されてこなかったことをふまえたものである。1.2.2 節で述べたアスペクトと動詞のタイプという二つの基本概念は、文を分析し、出来事間の関係を記述するための道具立てとなるものである。ここではその二つの観点に沿って分析の内容を先取りしながら、問題となる現象を取り上げる。

1.3.1. アスペクトが出来事間の時間的関係に関与する

前節で述べたように、出来事間の時間的関係は本研究の記述にとって重要な一側面である。先行研究の意味記述においても、継起や同時といった時間的関係は主要な観点の一つとなっている。遠藤（1982)、井上（1983)、(1995)、仁田（1995)、内丸（2006)、吉永（2008)、三原（2011）などでは意味関係そのものとして「継起」というラベルを採用している。しかし、概して時間的関係の異なりとして「継起」「同時」が単純に区別されることはあっても、その違いがどう生じるのかは、十分に明らかにされてこなかった。

そこで本研究は、「定形動詞のアスペクトによって出来事の時間的関係が異なる場合がある」という事実に注目する。例（1）を見られたい。

(1) 僕はなんとなく不安になって、洗面所まで**行った**①。洗面所のドアは開けはなしに**なっていた**②。僕は戸口に立って(ア)、妻のうしろ姿を③**眺めた**。彼女は青い無地のパジャマに着替え、鏡の前に立って(イ)タオルで髪を**拭いていた**④。

まず①～④の文末の動詞述語（定形動詞）に注目すると、アスペクト対立によって、複数の

出来事の時間的関係が構成されていることがわかる。すなわち、完成相の①「行った」と③「眺めた」によって出来事間の継起性が、継続相の②「なっていた」と④「拭いていた」によって出来事間の同時性が表現されている。これを図示すると以下のようになる。

述語	アスペクト	時間の流れ
① **行った**	完成相	◆
② **なっていた**	継続相	————
③ **眺めた**	完成相	◆
④ **拭いていた**	継続相	————

次に、動詞の中止形「立って」を含む文に注目する。（ア）の「立って」を含む「僕は戸口に立って、妻のうしろ姿を**眺めた**。」という文では、単純に言って、二つの出来事が点的な連鎖として継起性の中に配置されている。「立って」は、「眺めた」に対して先行する動作を表している。この場合、「僕は戸口に**立った**。妻のうしろ姿を**眺めた**。」と二文で表現しても、時間的関係には基本的に変わりがない。

これに対して、（イ）の「立って」を含む「鏡の前に立ってタオルで髪を**拭いていた**。」は、二つの出来事の継起的関係を表現しているのではない。このことは、「（彼女は）鏡の前に**立った**。タオルで髪を**拭いていた**。」と二文で表現すると、テクストの流れにおいて不自然な、あるいは異なった関係を表す配置になることからもわかる。

確かに、現実においては「立つ」ことが「拭く」ことに先行している（鏡の前に立ってから、拭いた）ことが想定できるだろう。しかし文においては、出来事の単純な継起性・先行性が表現されているのではない。（イ）において「立つ」という動作の先行性が想定されるとしても、（ア）に比して背景的である。（イ）の「立って」が表しているのは、動作そのものではなく、すでに行なわれた動作の結果としての「立った状態」である。その状態は、「拭いていた」という動作が継続する間も同時的に存在している。しかしまた、「同時的」といっても、「立ちながら」あるいは「立ちつつ」で表されるような二つの出来事の同時進行の関係でもない。

記述においては、まず、（ア）（イ）に見られるような意味のあり方の違いを言語事実として確認し、そのうえで、その違いがどのように生じるのかを明らかにする。

結論を先取りして言えば、その要因は定形動詞のアスペクトであると考える。すなわち、「立って」が関係するのが完成相の「眺めた」であるか、継続相の「拭いていた」であるかによって、「立つ動作」の先行性を前面化して表すか、動作の先行性は背面化してもっぱら「立った状態」の同時性を表すかという違いが生じているのである。

しかし重要なことに、（ア）（イ）には共通点もある。（ア）「僕は戸口に立って、妻のうしろ姿を**眺めた**。」では、シテが先行する動作の結果としての「立った状態」が主たる出来事と同時的に存在しているが、そのことは（イ）「鏡の前に立ってタオルで髪を**拭いていた**。」でも変わらない。（ア）では「立つ動作」の先行性が認められるとともに、「立った状態」が、定形動

詞が表す出来事と同時的に存在している。つまり両者には、定形動詞のアスペクトが完成相か継続相かに関わらず、「シテが表す変化結果としての状態が、定形動詞が表す主たる出来事と同時的に存在している」という共通点がある。これは、両者の違いと同時に把握すべき重要な事実である。（ア）（イ）の出来事の時間的関係を図示すると次のようになる。

述語	時間の流れ
（ア）立って **眺めた**	◇＝＝＝＝＝ ◆
（イ）立って **拭いていた**	（◇）＝＝＝＝＝ ————

◇は動作の側面を、＝は動作の結果としての状態の側面を示す。（イ）の「立って」では、「拭いていた」に対して、動作の側面が背景化していることを（◇）で表している。

もし単純に「継起」と「同時」を区別するのみであれば、両者が本来は共通点を有するにも関わらず、（ア）は「継起」、（イ）は「同時」といったように切断的に分類せざるを得なくなる。また、すでに述べたように、（ア）は単に継起性の中に配置されているのではなく、結果状態の同時性をも含んだ複合的な時間的関係の中にある。分析では、このような（ア）と（イ）の相違点と共通点の両方をとらえ、動詞の中止形が表す動作と結果状態の複合的なあり方をより詳しく記述する。

また、1.2.1 節で述べたように、シテに対してはシテイテ（シに対してはシテオリ）というアスペクト形式がある。分析では、アスペクト的な意味・機能に注目して、シテイテ（シテオリ）が、基本的に、文末述語であるシテイル（シテイタ）と同様、継続相相当の形式として、定形動詞との相関において、複数の出来事間の同時的な時間的関係を構成するという機能を持つことを明らかにする。

以上のように、アスペクトによって二つの出来事の時間的関係の異なりが（解釈や読みではなく）文法的に表し分けられる場合があるという事実は、先行研究では指摘されていない[4]。

このような現象をより詳しくとらえるためには、アスペクトのみならず、動詞の中止形が表

[4] 井上（1983：133）は、意味分類として「継起」を取り出したうえで、継起性のない「道具（または付帯状況）」が「一時的なものか、継続的なものかは、S2 の述語が継続を表すかどうかによって決まる」と述べるが、それによって二つの出来事の時間的関係が決まるということではなく、あくまで「道具（付帯状況）」の一時性と継続性を［±継続］という意味素性によって区別するのみである。加藤（2003）は、並列構造では「連用形（連用テ形、連用非テ形）」の動作が後続の動詞の動作よりも先に生じている点から継起的用法を基本におき、様態や付帯状況などの意味は語用論的に解釈されるものとする。また非並列（修飾）構造では二つの独立した動作と見なせないため、非継起的になるとする（加藤 2003：41-46）。また「動詞の連用形がどのような場合に後続要素の支配を受けるのか」という観点から、後続する動詞のアスペクト的意味が先行する「連用形」に及ぶかどうかをその他の文法的意味とともに検証している（加藤 2003：29-41）が、定形動詞のアスペクトによる時間的関係の構成という観点では言及していない。このほか、遠藤（1982：53-54）、坂井（2000）のように二つの動詞の関係に注目して時間的関係の区別を行なうものにおいても、吉永（2008：31-45）、吉田（2012：50-53）のようにシテのアスペクト的側面に注目して分析するものにおいても、定形動詞のアスペクトの関与には言及がない。

す出来事の内的な構造の複合的把握、すなわち一つの出来事における動作の側面と変化結果としての状態の側面を区別すること、ひいてはシテの動詞のタイプ化が重要な手がかりになる。この点については次節で述べる。

1.3.2. 動詞のタイプが中止形の意味の分化に関与する

前節では、定形動詞のアスペクトが完成相か継続相かで、二つの出来事の時間的関係が異なる場合があるという事実に注目した。しかし一方で、実例には、定形動詞のアスペクトの違いによる時間的関係の異なりが認めにくい場合もある。

次の例（3）（4）でこのことを確認する。いずれも定形動詞は継続相の「見ていた」である。

（3）太郎は出窓を開けて、空を**見ていた**。
（4）太郎は肩を震わせて、空を**見ていた**。

例（3）では、シテが出来事に対して同時的に存在する状態を表している。正確に言えば、客体（出窓）における、変化（開ける）の結果としての状態が表現されている。一方、例（4）では、シテは主たる出来事と同時的に進行する動作を表している。いずれにおいても、二つの出来事間の時間的関係に継起性は認めにくく、同時的であると言ってよいだろう。

しかし、次のようなふるまいの違いもある。すなわち、定形動詞のアスペクトを継続相の「見ていた」から完成相の「見た」にした際、二つの出来事間の時間的関係は同様ではない。例（3’）ではシテが表す動作の先行性があり、二つの出来事は継起的である（まず出窓を開けて、その状態で空を見た)。一方、例（4’）ではシテが表す動作が、主たる出来事に先行しているとも、同時的に行われるとも考えられる。例えば「肩を一度ぶるっと震わせてから、空を見た」のような現実を想定するなら継起性が出てくるであろうし、「肩を震わせながら空を見た」のような現実を想定するなら同時的になるだろう。

（3’）太郎は出窓を開けて、空を**見た**。
（4’）太郎は肩を震わせて、空を**見た**。

重要であるのは、例（3）（3’）においては定形動詞のアスペクトによる違いが明確であるのに対し、例（4）（4’）ではそうでないということである。さらに、例（3）（3’）では「出窓を開けた状態」が主たる出来事と同時的に存在しているという、例（4）（4’）にはない特徴がある。

従って、記述においては、まず、例（3）（3’）のペアのように定形動詞のアスペクトが時間的関係の異なりに関与する場合と、例（4）（4’）のペアのように関与しているとは言えな

い場合があるということを事実として確認する。そのうえで、その違いがどのような条件で生じるのか、また役割的関係のバリエーションとの関係を明らかにする。

そのためには、シテの動詞のタイプを検討することが有効である。先に示した工藤（1995）において、外的運動動詞は以下のように三分類されている。

［工藤（1995）の外的運動動詞の三分類（筆者によるまとめ］

（A）**外的運動動詞**：

（A・1）**主体動作客体変化動詞**

例：開ける、折る、消す、倒す、曲げる、入れる、並べる、抜く、出す、運ぶ、作る　など

（A・2）**主体変化動詞**

例：着る、脱ぐ、持つ、抱く、行く、来る、帰る、立つ、並ぶ、開く、折れる、消える、曲がる、入る、出る、太る、就職する　など

（A・3）**主体動作動詞**

例：動かす、回す、打つ、蹴る、押す、食べる、見る、言う、歩く、泳ぐ、走る、泣く、飛ぶ、揺れる　など

＜主体動作客体変化動詞＞は、主体の観点からは動作を、客体の観点からは変化をとらえている両面的な動詞であり、すべて他動詞である。＜主体変化動詞＞は、主体の変化をとらえた動詞であり基本的に自動詞であるが、「着る、持つ、行く、立つ」のような＜自らに変化をもたらすヒトの意志的な動作＞と、「開く、消える、曲がる」のような＜モノの無意志的な変化＞を表す動詞とがある[5]。＜主体動作動詞＞には、「回す、打つ、見る」のような他動詞と、「歩く、泣く、揺れる」のような自動詞の両方があるが、いずれも変化の側面はなく、動作のみをとらえた動詞である。基本的に、主体動作変化動詞と主体動作動詞は、継続相（シテイル・シテイタ）において＜動作継続＞を、主体変化動詞は＜結果継続＞を表す。しかし、主体動作客体変化動詞は、客体の観点からは変化をもとらえているので、主体変化動詞と同様に「そこに至れば運動が必然的に尽きるべき目標としての内的時間的限界（工藤 1995：72)」を持つ（内的限界動詞)。従って、「窓が開けられている」のような受動構造や「口を開けている」のような再帰構造においては結果継続を表す。

上記の例（3）（3’）と例（4）（4’）に見られるふるまいの違い、すなわち定形動詞のアスペクトによって二つの出来事間の時間的関係が異なるか否かを記述するには、動詞の中止形が、動作のみならず客体や主体の変化の側面をも表すのか（主体動作客体変化動詞、主体変化動詞)、動作の側面のみを表すのか（主体動作動詞）を区別することが第一に重要である。また、前者においては、変化が客体に及ぶのか（主体動作客体変化動詞)、主体に及ぶのか（主体変化動詞)、さらには意志的な動作によってもたらされるのか非意志的に実現するのかといった点をも考慮する必要がある。

[5] 工藤（2014）では前者を「主体動作主体変化動詞」としている。

第 3 部「分析各論」各章の記述は、定形動詞のアスペクトに注目しつつ、基本的には上記の外的運動動詞の三分類に沿って、主体動作客体変化動詞（第 4 章）、主体変化動詞（第 5、6 章）、主体動作動詞（第 7 章）の順に記述する。アスペクト形式であるシテイテ（シテオリ）については、動詞のタイプを前面に出して記述するわけではなく、やや個別的ではあるが、第 8 章で記述する。

第 2 部　先行研究と本研究の方法

第 2 章　先行研究

本研究が動詞の中止形として論じる「読み」や「読んで」のような形式[6]については、動詞のいわゆる「連用形」や助辞（助詞）の「て」という単位での研究も含めると、伝統的な活用論や「てにをは」研究と連続して、多くの蓄積がある。戦後の研究に限っても、三上（1953）、久野（1973）、南（1974、1993）、寺村（1981、1991）、高橋（1983）、大鹿（1989）、森田（1989）、加藤（2002）などによってその特性が指摘されてきている。実例に基づいた記述的研究としては奥田（1989）、仁田（1995）があり、多様な意味関係の全体を分析している。近年では展開した分類を総合化し、形式の一般的性質に迫ろうとするものも多い。益岡（2014）のように、“converb”（副詞的な機能を果す従属的な動詞形式）や“finiteness”といった一般言語学的・言語類型論的視点からをとらえようとする方向性も打ち出されている。また、中止的な述語の場合ではないが、いわゆる補助動詞によるシテヤル、シテミル、シテイク、シテクルといった複合的な述語形式についても多くの研究がある。

本章では、「読み」や「読んで」のような形式が中止的な述語として用いられる場合に絞って、現代の記述的研究を中心に概観するが、それとともに、本研究が用いる動詞の「中止形」という用語の位置づけについても述べる。

2.1.　現代の研究概観

以下、動詞の中止形の基本的な用法とその性質をとらえた研究について概観する。形式の認定や名称は、各研究者が依拠する文法理論や分析手法によって異なる。しかしどの立場においても、「形式に固有の文法・意味的特性を明らかにする」という目的は共通しているだろう。「読み」や「読んで」のような形式は、文法・意味的特徴が明確に反映されておらず、文末にあってさまざまな文法的意味を表し分ける述語形式に比べると、単純な形式である。また条件関係や時間関係を表す従属複文形式に比べ、その意味・機能の抽象度は高い。

従って、分類的な記述では、詳細で正確な分類とその体系化を経て、形式のより抽象的で総合的な文法・意味的特性に迫ることが最終的な目標になるだろう。以下の先行研究は、いずれも「読んで」のような形式による関係の具体的な分類を提示し、それをまとめあげ説明する、より抽象的な特性をとらえようとするものである。大鹿（1989）は「て」による接続を、「一体的な事態のその分節（同：221）」という働きによって説明しながら連続的に分類している。森田（1989）は接続助詞「て」の項目で、「「て」は、「て」に先行する部分（前件）においてまず場面的状況を作り、後続する部分（後件）は、その状況下において生ずる事態・事柄である（同：752）」とし、8 種の意味分類を提示する。奥田（1989）は、「第二なかどめ」について「主要な動作・状態と副次的な動作・状態との、従属的な関係（同：14）」という関係を中心

[6] 本研究が「動詞の中止形」と認めるものは研究の立場によって名称が様々であるので、以下ではひとまず「「読み」のような形式」「「読んで」のような形式」とする。

に据えて意味関係を記述している。仁田（1995）は、「シテ形接続」による意味関係を単一の概念で説明しているわけではないが、そこで取り出された 3 類 4 種の分類は「シテ節の主節への従属度（同:91）」「節的度合い（同:92）」という基準で序列化される。この整理は内丸（2006）、三原（2011、2013）、吉永（2008、2012）、吉田（2012）などによってさらに精密化・総合化される傾向にある。上記のうち、奥田（1989）と仁田（1995）の記述については、次節でより詳しく取り上げる。

他方、「読み」と「読んで」のような形式、またはそれらに関連する複数の形式の間に、何らかの類似性を見出し、それらを比較して論じるものも多くある。このような分析手法は、形式的な特徴に乏しい「読み」や「読んで」のような形式の特性を明らかにするために必要になるだろう。また、比較によって、文法面だけでなく文体的差違も視野に入ってくる。

久野（1973）は、まず「「シ」形接続」と「「シテ」形接続」について文法的テストによって意味の違いを分析し（第 15 章）、さらに「ト」による接続を加えて三つの形式の「従属節の従属度」を論じる（第 16 章）。寺村（1981）は、「並列的接続」の基本的特徴について論じたのち、「連用形接続」と「テ形接続」の違いについて、(1) 文体差、(2) 出来事の順序（継起）性、(3) 並列性、(4) あとの述語へのかかわり（条件関係）、(5) 丁寧体の有無といった観点で基本的特徴を取り出している（同：34-39）。生越（1983）は時間的関係（同時・継起）を主要な観点に、前件と後件の一体性のあり方を考慮しながら、「連用形」と「テ形」の使用の異なりを論じている。奥田（1989）、言語学研究会・構文論グループ（1990）、新川忠（1990）の一連の研究は、非従属的（並列的）な関係を表現する「第一なかどめ」と従属的な関係を表現する「第二なかどめ」との対立を軸に意味の分類的記述を行なっている。加藤（2002）は「連用非テ形」「連用テ形」について、機能的修飾・構造的修飾（並列・非並列）、意味的修飾（継起・非継起）の三つの観点から分析を加えている。このほか益岡（2014）は「中立形」と「テ形」の「連用中止構文」における競合と共存関係を分析し、副詞的な動詞形式である“converb”という類型論的な枠組みによって、「非定形節性」から考察を加えている。

他方、南（1974、1993）は、連用的な複文形式（従属句）全体を対象に、他の従属句への包摂関係や、含まれうる文法的要素などの特徴によって比較するなかで、「連用形」「～テ」にあって他の形式にはない幅広い文法・意味的特徴を浮き彫りにしている。松田（1984）は「ト」「テ」「タラ」を、同（1985）は「て」「連用形」「と」をそれぞれ比較している。「理由」の「シテ」と「カラ」を比較した望月（1990）、「付帯状態」について「～ナガラ」「～タママ」「～テ」を比較した三宅（1995）、原因・理由関係について「して」と「ので」を比較した張（1998）、並列を表す「ば」「し」「たり」といった接続助詞の系列で「て」「連用形」を論じた中俣（2015）などは、意味関係の領域を絞ったかたちでの考察である。

2.2. 記述的研究：奥田（1989）と仁田（1995）

「読んで」のような形式を主な対象として、奥田（1989）と仁田（1995）を取り上げる。これらは、動詞の中止形の分類記述の中でも、豊富な実例に基づいてその多様な意味関係を体系

的に記述している点で、特筆すべきものであると思われる。特に、本研究における、定形動詞のアスペクトと動詞のタイプに注目した分析は、これらに多大な示唆を受けている。遠藤(1982)や森田（1989）などは、助辞（助詞）の「て」あるいは「テ形」といった形式の用法に、動詞以外の品詞の場合も含め、その意味をできるだけ詳しく分類しているが、奥田（1989）および仁田（1995）は動詞の場合に絞る一方、意味用法の列挙に留まらず、分類全体を方向付ける特性と文法的基準を示している点で、これらとは性格を異にするものである。

2.2.1. 奥田靖雄（1989）「なかどめ—動詞の第二なかどめのばあい」

奥田（1989）は主語が一つで動詞が二つの「ふたまた述語文」における、副次的な動作と主要な動作の「複合」を中心に、「第二なかどめ」の意味関係を体系的に記述する。「複合」という従属的関係は、「第二なかどめ」が表す動作が動作性を失って主要な動作の特徴づけに移行する場合と、二つの動作の並列の場合の二方向に展開する。奥田（1989）は「第二なかどめ」による「従属的な関係」と動作の「複合性」について次のように述べる。

> すでにのべてあるように、第二なかどめは、ふたつの動詞によってさしだされる動作・状態の、従属的な関係を表現している。述語の位置にあらわれてくる定形動詞が主要な動作をさしだしているのにたいして、第二なかどめの動詞は副次的な動作をさしだしていて、それらのあいだには従属的な関係がみられるのである。従属的な関係は、第二なかどめを使用するばあいでは、ふたつの動作がひとつにまとまって、ひとつの複合動作をかたちづくっているということで、「しながら」などで表現される、ほかの従属の関係とはことなっている。この複合性こそ、第二なかどめによって成立する、意味的な関係の、もっとも基本的な特徴である。（同：15）

「従属的な関係」は、のちに紹介するように、「第一なかどめ」との相違をとらえることを見すえた規定である。重要であるのは、次に引用するように、この「動作の複合性」という概念が、継起や同時といった時間的関係の異なりを包含した意味特徴であることである。

> 定形動作によってさしだされる、主要な動作は、第二なかどめによってさしだされる、副次的な動作をその成立のための必要条件としてもとめているのであって、副次的な動作が、あるばあいには先行していなければ、あるばあいには同伴していなければ、主要な動作は成立しない。したがって、この複合的な動作は、時間的な関係のあり方という観点からみれば、先行・後続の関係のなかにある、ふたつの動作の複合でもあるし、同時的に進行する、ふたつの動作の複合でもある。（同：16）

> 継起性、同時性という時間的な関係は、ふたつの動作が相互作用しているところにはかならずつきまとっている属性であるが、ふたつの動作のあいだの相互作用の具体的な内容をとらえているわけではない。動詞によってさしだされる、ふたつの動作のあいだには、第二なかどめでむすばれているばあい、現実のふたつの動作を反映してはおらず、時間的な関係がみとめられないばあいさえある。このようなばあい、時間的

な関係としてはとらえようがない。したがって、第二なかどめが表現している意味的な関係を、たんに継起と共起との時間的な関係のなかにとらえるだけではなく、ふたつの動作・状態のあいだの時間的な関係をもふくみこんでいる、構造的なむすびつきとしてとらえなおしてみる必要がおこってくるのである。

（同：19-20）

本研究でも、奥田（1989）に示されているように、時間的関係を含んだかたちで、二つの出来事間の関係を総合的に考察することが重要であると考える。ただし、奥田（1989）の「動作の複合」という意味特徴は、奥田（1989）以降、十分に具体化されているわけではない。また、「読んで」のような形式に「従属」的な特徴があるということは、奥田（1989）以外にもさまざまな形で指摘されているが、その具体的なあり様を記述する必要があるだろう。

また、奥田（1989）は「第二なかどめ」が表現する意味関係について、文法的基準を必ずしも明示しながら下位分類をしているわけではないように思われる。従って、時間的関係をも含みこんだ出来事間の関係を想定したうえで、そのパターンを文法的・意味的基準を明らかにしながら分析することが、奥田（1989）をふまえた意味記述のアプローチとして重要である。例えば、奥田（1989）では、「第二なかどめ」が表す出来事が動作の局面もとらえているか否かで意味関係が異なることを指摘しているが（同：27-28）、本研究では、その事実を動詞のタイプ[7]や定形動詞のアスペクトの観点から検討する。

また、引用中にもあるように、奥田（1989）は「第二なかどめ」が表す出来事に時間的関係が認められず、一つの主要な動作の側面の特徴づけとして機能する場合があることを指摘している（同 18、29-32）。この点については、本研究では正面切って分析できるわけではないのだが、二つの出来事の間に時間的関係が認められなくなることが動詞の中止形が述語らしさを失うことと連動しているとすれば、翻って、動詞の中止形が述語らしさと時間的関係の表現機能を保っている典型的な場合を精密に記述しておくことが、脱述語化・修飾語化（あるいは副詞化）といった意味・機能の変容を記述するために必要であると思われる。

2.2.2. 仁田義雄（1995）「シテ形接続をめぐって」

仁田（1995）は「シテ形」による意味関係を「付帯状態」「継起（時間的・起因的）」「並列」に整理する。これは性質の異なる「～テ」を A～C 類に振り分けた南（1993）の従属句分類とも対応しており、「付帯状態」は主節への従属度が最も高く「並列」は最も低い。

「付帯状態」は二つの事象の主体が同一で、「主節として表される事象の実現のされ方を限定・修飾する、といったあり方で、主節と結び付いている」とされ、主たる事象との同時性によって「継起」と区別される。「継起」においては、先に挙げた奥田（1989）とは違って、時

[7] 本研究が中止形の動詞のタイプによる意味の分化に注目することも、奥田（1989）の分析に示唆されている。例えば、奥田（1989:20）は「ふたつの動作が第二なかどめでむすばれて、ひとつの複合動作をかたちづくっているとき、おおくのばあい、ふたつの動作のあいだに先行・後続の時間的な関係がみられる」と述べるが、そこで典型例として挙げられている例文中の「第二なかどめ」はすべて主体動作客体変化動詞である（奥田 1989：20-21 の 11 例）

間的関係そのものが分類のラベルとなっていると同時に、「付帯状態」「並列」といった異なる観点での分類ラベルと並置されている。少数のカテゴリーに多様な用例を振り分けることができる点で仁田（1995）の分類は把握しやすく、前述のように、この分類を出発点としてさらなる精密化や総合化も行われている[8]。

本研究が仁田（1995）の分析において特に注意したいのは、「付帯状態」と「継起」の二分である。これらのカテゴリーは、同時か継起かという時間的関係において鋭く対立するものである。特に「継起」の側が時間的関係を本質的な特徴とすることは、二つの出来事の主体が異なる場合や、いわゆる「原因」の場合（仁田 1995 の「起因的継起」）をも包括することから明らかである。

ところで、仁田（1995）の分類では、時間的関係の異なりに従って、以下のペアでは一つ目の例が「付帯状態」、二つ目の例が「継起」に分類されるはずである[9]。いずれも「開けて」「見る」という動詞の語彙の組み合わせは同じで、異なるのは定形動詞のアスペクトのみである。

・太郎は出窓を開けて、空を**見ていた**。　［付帯状態］
・太郎は出窓を開けて、空を**見た**。　［継起］

しかし、本研究の分析ではこうした二分はしない。時間的関係に異なりがある一方で、出来事間の関係には本質的な共通性があるからである。確かに、実際に用例を分類してみても「継起」または「付帯状態」いずれかににあてはまりそうなものも多い。しかし、一つ目のような例は明らかに「継起」ではなく、また例外として軽視できるものでもない。また、そしてより重要なことに、二つ目の例に「継起」性があるとしても、出来事の単純な前後関係ではなく、「出窓を開けた状態」の同時性をも含むものである。これは一つ目の例と共通である。このような事実は、「付帯状態」と「継起」を二分する枠組みを採用した場合には記述しにくい。本研究では、定形動詞のアスペクトを考慮して、このような例の共通点と相違点をとらえる。

仁田（1995）はまた、「付帯状態」を「し手容態」「し手動作」などに下位分類し、本研究で言う主体変化動詞や主体動作動詞といった動詞のタイプに沿った記述を行なっている。例えば「し手容態」については、成田（1983）の記述、および奥田（1989）の「ふるまい状態」に対

[8] 例えば吉永（2012：95-98）では、「付帯」と「並列」を「並立タイプ」に、「継起」と「因果」を「先後タイプ」に収束させるモデルを提示している。

[9] このペアを「付帯状態」「継起」のいずれかにまとめて分析することも不可能ではないかもしれないが、いずれも十分ではない。まず、現実においてシテの表す出来事が主たる出来事に先行するのはどちらも同じであると考えるならば、どちらも「継起」になる。しかしシテが「主節の出来事の実現のされ方（仁田 1995：93 の定義）」を表すという「付帯状態」的な側面は焦点にならず、時間的なものに留まらない意味関係は取り出しにくい。逆に、「付帯状態」の特徴が「継起」の場合に排除されるわけではない（シテが表す結果状態が「時間的に同存」し、「主たる出来事の実現のし方」を表している点で両者が同じである）と考えれば、どちらも「付帯状態」になる。しかし、二つの分類が互いに重なり連続するといっても、継起性を本質的な特徴とする「継起」に対して、「付帯状態」のある中の場合には「継起」性があってよいとする（つまり、時間的関係で対立する両者を時間的関係で対立するカテゴリーの一方にまとめる）ような位置づけには、妥当性が見出しにくいであろう。

応するタイプの動詞をふまえ「《姿勢変化》《着脱》《携帯》とでも呼べる出来事を形成する動詞によって、構成されている（同：93)」とする。しかし例えば、主体動作客体変化動詞（仁田 1995 の「対象変化動詞」）については言及がないわけではないものの、周辺的な扱いに留まっている（同：101-102)。主体動作客体変化動詞も動詞のタイプに対応して何らかの意味を表すのか、他のタイプによる意味関係とどう関連するのかといった体系的な考察が必要であるように思われる。

また仁田（1995）が言うように、奥田（1989）は確かに、「立つ、手をあげる」などの「ふるまい動詞」が、主要な動作に同伴する「ふるまい状態」を表すと述べているが、同時に、奥田（1989）は「ふるまい動詞」が必ず「ふるまい状態」を表すのではなく、局面のとらえ方の違いによっては、動作と主要な動作の継起的な複合を表す場合があることも指摘している(同: 26-29)。例えば、次のような例である。

・太郎は出窓に座って、空を**見ていた**。
・太郎は出窓に座って、空を**見た**。

一つ目の例では、確かに、「出窓に座って」を「空を見ていた」に対する「ふるまい状態」（あるいは「付帯状態」）ととらえることが可能であろう。しかし二つ目の例では、「出窓に座って」が先行する動作を表しており、二つの出来事間の時間的関係は「継起」ととらえることもできる。動詞のタイプのみによっては、このような異なりをとらえることができない。そこで、定形動詞の側の特徴、すなわちアスペクトに注目する必要が出てくるのである。

2.3. 「中止形」という概念

意味・機能の分類・体系化のあり方や、複数の形式の比較の方法は、「読み」や「読んで」のような形式をどのようなものとして位置づけるかによって異なる。さらに、各形式の位置づけは、「単語」や「活用」といった文法研究の根本的な概念をどうとらえるかという問題に関わってくる。本研究の「中止形」という位置づけも絶対的なものではなく、特定の立場を表明する、一つの相対的な把握である。

以下、まず本研究の「中止形」という名称について、既存の用語との異なりを整理したうえで、動詞の活用表の中での位置づけを整理することとする。そのために、本節では「用法」という用語で、品詞の異なりや、形態素か単語かという異なりも含めた、文法形式が持つ広い意味での意味・機能を指すことにする。

2.3.1. 「中止形」という用語

本研究では、すでに述べたように、「読み」のような形式も「読んで」のような形式も、さらには文法的に有標な「読んでおり」「読んでいて」といった形式も動詞の「中止形」と認める。これは文を言い切らず続け、かつテンス・ムードを表し分けないという構文論的・形態論

的に共通する特性に注目したものであり、共通の機能を持つ複数形式を一つの活用形として認める立場である。「読み」や「読んで」のような形式を指すのに鈴木（1972）や奥田（1989）は「なかどめ」、高橋（1983）は「中止形」といった用語を用いているが、本研究の「中止形」はこれらと同様の把握によるものである。

しかし、このような「中止形」は、「読み」のような形式に対する「連用形」や、その用法の一つである「中止法」（あるいは「連用（形）中止法」）といった用語に比べ、相対的に一般性が低いだろう。同じことが「読んで」のような形式に対する「テ形」という用語についても言える。「連用形」や「テ形」といった用語と、本研究の「中止形」が指示する対象には重なりがあるにせよ、本研究がこれらの用語を用いないのは、これらが異なった文法観を反映した、特に形式を中心に見る用語法であるからである。

まず、「読み」のような形式を「連用形」と言う場合、一般的には、学校文法における「未然・連用・終止・連体・仮定・命令」という六つの活用形の一つとして認識され、かつ複数の用法が認められることが多い（沖森他編 2015:10）。例えば『日本語大事典』の「連用形」の項では、(1)「急ぎ戻る」のように後に来る用言を修飾する「連用法」、(2)「雪が降り、路面が凍結した」のようにいったんそこで文を中止し、さらに文を続ける「中止法」、(3)「食べ歩く」のように複合動詞を作る場合、(4) 助詞・助動詞に接続する場合、(5) 単独あるいは他の要素と複合して名詞化する場合が「連用形」の用法に含められている。一口に「連用形」といっても内実は様々な定義がありうるが、代表的な学校文法の「連用形」では、基本的に一つの文法形式に複数の用法をとらえるという立場を示している。

ここで文法研究における議論のすべてを追うことはできないが、このような一つの形式に複数の用法を認める把握を古くから端的に示しているものとして、大槻（1897）『広日本文典』の記述を紹介しておく。大槻（1897）では「読み」のような形式について、活用表のうちの「第五活用」のなかに「中止法」「連用法」「名詞法」を認めているが[10]、一つの形式を中心に、複数の用法を認めている点は、学校文法における「連用形」の位置づけと共通している。

一方で、大槻（1897）の「第五活用」が単に形式だけを指す名称であるのに対して、学校文法における「連用形」は特定の用法によった名づけである点で異なっている。しかし「連用形」

[10] 先行する大槻（1890）『語法指南』では活用形の名称が「第五變化」、「法」の各名称が「折説法」「熟語法」「連用法」となっている。「中止法」という用語については、大槻（1897）において「連用法」との区別から新設されたことが述べられている （このことは橘 1983 でも指摘されている）。大槻（1897）における「中止法」の定義は以下の通りである。

第一四八節

中止法。此ノ法ハ、文ノ中間ニテ、中止シ、即チ、其意ヲ、暫シ言止シ置キテ、末ニアル他ノ動詞ノ法ニ照應シテ、其ノ法ノ意ニ従フモノナリ、第五活用ヲ用ヰル。

書を讀み、字を記す。　事を勤め、功を成す。
花落ち、鳥、鳴く。　月を見、故郷を懐ふ。

コレヲ、句毎ニ分チテ言ハヾ、「書を讀む、」又、「字を記す、」事を勤む、」又、「功を成す、」ナド、各自ニ、終止トスベキヲ、暫シ「讀み」勤め」ト言止シ置キテ、末ナル「記す、」成す、」等ノ動詞ニ照應シテ、終止ノ意ヲ終フ。

（同：90-91）

という用語は、上述のように、一つの用法を持つ形式を指すものでもない点で複雑である。「連用形」を複数の用法を持つ形式と規定するならば、「連用形」という名称はあくまで代表的な用法によった便宜的なものであることになる。加えて、形容詞の「連用形」における「楽しく過ごす」のような場合を典型的な「連用」として規定するならば、「中止的な述語機能を持つ形式」を指す本研究の「中止形」とは名称だけでなく内実にも大きな隔たりが生じることになる。「中止的な述語となる」という機能を軸に、一つの活用形に複数形式の所属を認める本研究の立場からすれば、このような意味での「連用形」という用語は避けなければならない。

もちろん、特定の構文的機能を指すものとして「連用形」という用語を定義すれば、本研究の「中止形」のように複数の形式を束ねたものとして用語を用いることも可能である[11]。しかし、「連用形」という用語がすでに学校文法等において定着していることから、そのような用語法でも用いることはしない。奥田（1992）は、後に示すように、「第一なかどめ」「第二なかどめ」や、「同時形（シナガラ）」「先行形（シテカラ）」「共存形（シタリ）」といった形をまとめる活用形の名称として、「連用形」を立てており、「なかどめ（中止形）」より広く、これらの諸形式の機能の共通性がとらえられている。今後筆者なりに、中止形以外の従属的な動詞形式も含めた「連用形」の位置づけを積極的に行なう必要があると考えているが、本研究では「中止」の上位の機能としての「連用」については考察を進めることができないため、この点についてはこれ以上立ち入らない。

これに対して、「テ形」という用語については、「連用形」という用語の問題に対して、相対的に単純な理由から使用を避けている。第一に、「テ形」という名称がいかなる意味・機能をも表現していない、形式中心の名称であるからである。そして、そのことと連動して、「テ形」という用語に、「本を読んで、感想を書く」のように中止的な述語として用いられる場合のみならず、いわゆる補助動詞がついた場合（「読んでおく」）や、命令形的な用法（「手紙を読んでね。」）といった、構文論的に異なった機能を含める余地があるからである。

最後に、「中止形」を「連用形」や「テ形」のように特定の形式を指すものとして用いることも可能であるが[12]、そのような用語法でもないことを確認しておく。

2.3.2. 活用表の中での位置づけ

動詞の活用表には、各形式にどのような意味・機能を与えるか、あるいは形式と意味・機能の関係をどうとらえるか、といった文法観が反映される。本研究の「中止形」には、「読み」「読んでおり」「読まれ」といった第一中止形の系列と、「読んで」「読んでいて」「読まれて」のような第二中止形の系列があり、いずれも、「中止」という共通の機能のもとに束ねられて

[11] 加藤（2002）は、「読み」のような形式を「連用非テ形」と呼び、「読んで」のような形式を「連用テ形」と呼んで両者を「連用形」としている。

[12] 橘（1983：35-36）によれば、「中止形」という用語は、早くは吉岡郷甫（1910）『改訂日本口語法』に見られる。吉岡（1910）では、「中止形」は同じ形式で用法の異なる「連用形」「名詞形」と並立されているが、このような位置づけは大槻（1897）における「第五活用」の「中止法」「連用法」「名詞法」の並立と同様のものである。また佐久間（1966：102-103）では「読み」のような形式を「造語形」、「読んで」のような形式を「中止形」としている。

いる。これは、すでに述べたように、「読む・読んだ・読んでいる・読んでいた・読もう・読め」などの文を言い切る諸形式を「終止形」とするように、構文的機能を中心に諸形式を整理する活用観に従ったものである。

以下、「読み」のような形式と「読んで」のような形式に、何らかの共通性を認めて動詞の活用表に位置づけているものを紹介する。なお、学校文法に代表されるように、「読み」のような形式を自立的な動詞形式と認める一方、「読んで」のような形式については「読ん-で」のように二つの単語の結合と見て、主に助辞（助詞）「て」の側の特性からとらえる立場がある。この立場では、複文（または重文）を構成する形式として「読み」と「読んで」が同列で取り上げられることがあるが、活用体系の中で両形式がパラディグマティックにとらえられているわけではないため、考慮の外におく。「単語」をどう認定するかという問題にも関わっているが、その点にも触れない。以下に紹介するものは、両者の意味・機能の共通性を前面に出した活用形の名称を与えるか否かという違いはあるが、それぞれを一つの自立的な動詞形式と認める点では共通している。

三上（1972b）は、次のような「基本・完了」の「テンス」と「中立・自立・仮定・想像・命令」といった「陳述度（ムウ度[13]）」によって整理した活用表を提示している。

【三上（1972b：144）の活用表（本文の縦書きは横書きに改めた）】

テンス	中立	自立	仮定	想像	命令
基本	取リ	取ル	取レバ	取ロウ	取レ
完了	取ッテ	取ッタ	取ッタラ	取ッタロウ	

三上（1972b）の整理における、第一のポイントは、「取リ」と「取ッテ」が同じ「中立」の枠に入る点である。これは、「陳述度」の観点からみた場合、両者（三上 1972a では「中止連用形」）に「陳述度」がなく、「補語を食い止めない」という共通の性質による。三上（1972b）では「中止連用形」は補語を食い止めない「単式」の活用形に分類されている。第二のポイントに、「取ッテ」が「完了」の「取ッタ」の系列である点である。これは、「取ッテ」と「取ッタ」が共通して促音便化すること、「静かに」と「静かな」とが同じ系列に属すのと並行的に考えられること、「添動詞」の「取リ＋カケル」と「取ッテ＋シマウ」を比較すると後者が「完了」を表していることの三点による。

寺村（1984）の活用表では、「連用形」「テ形」「タリ形」が独立の動詞形式として認められ、かつ「保留」の「ムード」という構文論的な性質によって統一されている。ここでは「連用形」が機能ではなく「読み」のような特定の形式を指すものとして「テ形」や「タリ形」に対置されている。寺村（1984）によれば、「保留のムード」とは「ムードを保留し、後の文にゆだねる」ものである。寺村（1984）の活用体系に関して注目すべき点は、三上（1972b）が二つの

[13] 原文ママ。

形式を「陳述度（ムウ度)」で一括しつつ両者を「テンス」によって対立させているのとは異なって、「基本語尾」と「タ形語尾」という名称の示す通り、「シ」と「シテ（シタリ)」の異なりを意味・機能上の対立としては提示していない点である。

【寺村（1984：45）の活用表（必要な部分のみ抜粋)】

ムード	基本語尾		タ形語尾	
保留	シ	＜連用形＞	シテ	＜テ形＞
			シタリ	＜タリ形＞

なお、寺村（1984）に示されているように、本来は命名の原理が異なる「連用形」と「テ形」を活用表上の同一のカテゴリーにまとめ入れるという立場は、近年でも日本語記述文法研究会（編）（2010）などに見られるものである[14]。

次に、奥田（1984、1992）に示された活用観を提示する。繰り返しになるが、本研究はこの立場に沿ったものである。奥田（1984）によれば、動詞の活用形は、まず「構文的な要素としての動詞の distributional な特徴（同：54）[15]」に従って「終止形」「連用形」「連体形」「条件形（奥田 1992 では「接続形」)」の四つに整理される。これらの文法的形式は、文中のどこに配置されるかという構文論的な機能と、形態論的カテゴリー（テンス・ムード）によって体系づけられる。動詞は、文における「distributional な特徴」すなわち「文法的な機能」と、テンス、ムードに代表される文法的な意味によって語形変化するものと規定される。以下に奥田（1992）から「終止形」と「連用形」の体系を示す。

「終止形」は、文末の位置で述語となるという構文論的な機能と相関して、テンス、ムードなどの文法的カテゴリーを持つ。それに対し、「終止形」以外の形式は、連用、連体といった構文論的な機能に対応して、「終止形」の持つ形態論的カテゴリーを欠くか、「終止形」とは異なった体系を持つ。

[14] 日本語記述文法研究会（編）（2010）では、活用形について、文を言いおわるときに使われる「終止法」と、さらに文を続けるときに使われる「接続法」の二つに大きく分け、「接続法」を「中止形」「連体形」「条件形」の三つに分ける。この「中止形」の中に「連用形」「テ形」が並列されている。

[15] 奥田（1984：54）は「(一）どの位置におかれるか、(二）ほかのどのような要素とくみあわさって、どのようなむすびつきをつくっているか、(三）このむすびつきのなかでどのような役わりをはたしているか、という構文的な観点」を「distributional な特徴」と呼んでいる。

【奥田（1992：17）の「終止形」の活用表】

			完成相		継続相	
			みとめ	うちけし	みとめ	うちけし
直説法	いいきり	非過去	はなす	はなさない	はなしている	はなしていない
		過去	はなした	はなさなかった	はなしていた	はなしていなかった
	おしはかり	非過去	はなすだろう	はなさないだろう	はなしているだろう	はなしていないだろう
		過去	はなしただろう	はなさなかっただろう	はなしていただろう	はなしていなかっただろう
命令法	命令		はなせ	はなすな	はなしていろ	はなしているな
	勧誘		はなそう	—	はなしていよう	—

奥田（1992）は「連用形」について次のように述べ、「はなし」「はなして」のみならず、「はなしながら」「はなしてから」「はなしたり」といった形式を「連用形」と認めている。

(b) 連用形　ひとつの主語との関係において、述語としてはたらく動詞がふたつあるばあいには、さきに配置される動詞は連用形を採用する。このばあい、あとに配置される定形動詞との関係において、連用形の動詞は副次的な動作をさしだしていてふたつの動作のあいだには、先行・後続あるいは同時という時間的な関係のほかに、さまざまな意味的な関係がなりたっている。このさまざまな時間的な、意味的な関係を表現するために、連用形はつぎのようなかたちに分化している。(表 2)

(表 2)

基本形	第一なかどめ	第二なかどめ	同時形	先行形	共存形
はなす	はなし	はなして	はなしながら	はなしてから	はなしたり

(同：17)

形態論と構文論の両面から「終止形」と「連用形」を含むそれ以外の形式を区別し、それぞれ別の形態論的カテゴリーの体系を持つとする把握は、学校文法の「終止形」「連用形」と同じ名称を用いているようでも、明確に異なるものである。また、三上や寺村の活用表では、接続関係（終止か非終止か）といわゆるムード（叙述法か命令法か）が混合しているのに対し、奥田はまず接続関係を第一の整理の基準として、そののち、文を言い切る諸形式（「終止形」）が「ムード」「テンス」によって整理されている。

また、奥田が「第一なかどめ」と「第二なかどめ」について文法的な意味・機能の共通点と相違点をとらえ、それを名称に反映している点は、「中立」の「ムウ度」において「取リ」と「取ッタ」をまとめている三上（1972b）と共通していると言えるが、三上（1972b）が、「取

ッテ」と「取ッタ」の間の意味・機能および形式面の共通性に注目し、「取リ」「取ル」との異なりを「テンス」によって体系づけているのとは異なる。奥田（1992：17-18）が述べているように、「第二なかどめ」の特性は、副次的な動作を表すことによって定形動詞によって表される主要な動作と組み合わさって、ふたつの動作の複合、あるいは複合的なひとつの動作を表現することである。さらに奥田（1989）では、以上のような活用観に従って、「第二なかどめ」単独の意味記述ではなく、「第二なかどめ」と「第一なかどめ」の意味・機能的対立を具体的に明らかにすることが意図されている。

本研究の分析は、第二中止形のシテ、シテイテを主な対象とし、動詞の中止形に属すすべての形式、あるいは奥田（1992）の「連用形」に含まれる諸形式の体系について全面的に明らかにすることはできない。しかし、本研究でシテとシテイテの関係、あるいはシテイテとシテオリの関係をとらえるために、また、「中止」あるいは「連用」という広い意味での構文論的機能とは何かを今後考察していくために、上記のような構文論的・形態論的な観点によって諸形式をまとめあげる理論的裏付けが欠かせないものであることを再度強調しておきたい。

第 3 章　本研究の方法

3.1.　用例の収集方法と量的分布

3.1.1.　用例の収集方法と範囲

第 3 部「分析各論」の第 4〜7 章では、第二中止形のうちシテを対象として、動詞のタイプごとに分析する。第 8 章では、第二中止形のうちアスペクト形式であるシテイテについて、第一中止形であるシテオリとも比較しながら分析する。それぞれについて、分析のための用例の収集方法と範囲を述べる。

まず、第 4〜7 章のシテの分析で使用する用例は、次のような範囲からすべて前後の文脈も含めて手作業で収集し、カード化して分析した。①の範囲で収集した作品の中には、②③で再度用例収集に用いた作品もある。

①小説作品の冒頭から 150 例の範囲で収集した、地の文のすべての形式の中止形の用例（150 例×30 冊＝4,500 例）、および同じ範囲の地の文以外の用例（455 例）
②小説作品の全体から収集した、定形動詞が継続相である用例（26 作品＝866 例）
③小説作品の一部から収集した、定形動詞が完成相である用例（14 作品＝1,361 例）

まず①の範囲と対象で用例を収集したのは、動詞の中止形が使用される文の構造を俯瞰的に整理、確認するためである。地の文に限定して各作品から 150 例を収集したのは、第一中止形と第二中止形が両方用いられるのが主に地の文であるからである。この用例に基づいた動詞の中止形の量的分布については次節で確認する。次に、②で定形動詞が継続相である場合に絞って用例を収集したのは、定形動詞のアスペクトと出来事間の時間的関係に注目して分析を進める手順上の必要からである。①の範囲で収集した用例全体の整理をふまえると、定形動詞が継続相である例の方が、定形動詞が完成相である場合に比べ使用頻度が低いことがわかる。そこで、第 4〜7 章の分析では、定形動詞が継続相である例からまず分析を進める。そのうえで、使用頻度が高く使用のバリエーションが複雑な定形動詞が完成相の場合についても観察・記述することとする。最後に、③のような範囲で使用頻度の高い定形動詞が完成相である例についても収集したが、これは補充的なものとして分析に用いている。

第 8 章のシテイテ（シテオリ）の分析では、シテイテの使用頻度がシテよりも低いことから、「CD-ROM 版　新潮文庫の 100 冊」の検索（文庫本 35 冊分[16]）と手作業（文庫本 32 冊分）を併用して、シテイテ、シテオリおよび関連する周辺形式（シテイ、シテオッテ）を合わせて 2,580 例を収集している。

以上の方法で収集した用例には【表 1】から【表 5】の観点を含む構文的特徴を付した。

収集の対象外とした形式は、以下の通りである。ただし判断のつかないものは一概に対象外とせず、用例に含めている。

[16] 収録作品のうち、翻訳と戦前・戦中に発表された作品を除いた数である。

・副詞、接続詞、いわゆる後置詞として固定的な形式で用いられているもの
　例：決して、そして、～について　など
・モダリティ形式、派生形式の中止形
　例：～べきであり、～かもしれず、したくて　など

3.1.2.　量的分布の確認

上記①の範囲で小説の地の文から収集した動詞の中止形の用例4,500例について、動詞の中止形が用いられる文の形式的特徴によって整理した。その量的分布を示す。

【表1】動詞の中止形の形式

収集した動詞の中止形は、表にあげた形式のものである。肯定・否定の形式で分けて示す。

サレ（サレテ）、サセ（サセテ）、シテオリ（シテイテ）といった文法的に有標の形式については、シ、シテとは別にして収集した。

「着る、見る、来る、する」のようにシの形が「着、見、来、し」のように一拍になる場合は、「シ（一拍）」として分けた。それに対応して、「着て、見て、来て、して」など、シが一拍になる動詞がシテの形をとっている場合を「シテ（シが一拍）」として隣の列に示した。こ

【表1　動詞の中止形の形式】

肯定形式				
基本の形	第一中止形		第二中止形	
スル	シ	1211	シテ	1882
	シ（一拍）	122	シテ（シが一拍）	434
	（存在動詞[17]）	29	（存在動詞）	42
サレル	サレ	90	サレテ	89
サセル	サセ	19	サセテ	22
シテイル	シテイ	1	シテイテ	85
シテオル	シテオリ	35	シテオッテ	0
シテアル	シテアリ	4	シテアッテ	3
サレテイル	サレテイ	0	サレテイテ	5
サセテイル	サセテイ	0	サセテイテ	0
サレテオル	サレテオリ	2	サレテオッテ	0
	－	－	その他[18]	251

否定形式				
基本の形	第一中止形		第二中止形	
シナイ	セズ	100	シナイデ	7
	セズニ	48		
	シナク	0	シナクテ	3
	その他[19]	15	その他	1

[17] 用例収集の時点では静態動詞に属す存在動詞（ある、いる、おる）のみ分けて収集していたので、別に示す。内訳は以下の通りである。
　第一中止形：あり（28）、い（0）、おり（1）　第二中止形：あって（25）、いて（17）、おって（0）

[18] ここで「その他」としているのは、「彼は食べては飲み、飲んでは歌った」のように、第二中止形にとりたての「は」のついた形の用例（5例）と、シテイク、シテクル、シテオク、シテミルのように、第二中止形が複合的な述語の要素になっているとみられる例（246例）であるが、これらはその他の動詞の中止形と連続している場合のみ収集した。いずれも分析の対象外である。

[19] 「その他」としている形式は、以下の通りである。第一中止形のうち「ナク」は形容詞「ない」の中止形であり「動詞の中止形」ではないが、存在動詞との対比の関係上、念のため収集したものである。
　第一中止形の系列：サレズ、サレズニ、シテイズ、シテナク、シテオラズ（各1）、ナク（15）
　第二中止形の系列：シテイナクテ（1）

れは、「シ」が一拍になる場合に、音声的な不安定さから使用頻度が低くなるという宮島(1992)の指摘を考慮してのことである。

肯定の形式で圧倒的に多いのは、第一中止形の系列ではシ、第二中止形の系列ではシテである。これら無標の形式の使用頻度が高いのは当然かもしれない。アスペクトに注目した分析において留意すべきは、シ、シテに対して、シテイテ、シテオリという中止形のアスペクト形式は明らかに使用頻度が低いということである。シとシテにはアスペクト的対立のない動詞の場合も含まれるため一概には言えないものの、使用頻度の観点からは、定形動詞としてのスル（シタ）対シテイル（シテイタ）と同様のあり方では、シとシテオリ、シテとシテイテがそれぞれ文法的に対立していない可能性があることを述べておく。

【表 2】中止形の連続の有無

【表 2　中止形の連続の有無】

	用例数（%）
中止形が単独の場合	2613（58.1）
中止形が複数連続する場合	1887（41.9）

【表 1】で挙げた動詞の中止形の各形式について、一文中に中止形が一つだけある場合と、複数の中止形が連続する場合を分けた。

連続する中止形の数や、中止形がかかる述語の接続関係（文中での位置）も、ある一つの中止形をとりまく環境として考えた場合、その環境は 300 種類以上になる。そのうち、一文中に中止形が一つだけ、すなわち単独で後続する述語にかかっていく場合が約 6 割となっている。複数の中止形が連続する場合については本格的な整理ができておらず、分析の対象から外さざるを得ないが、次の点を考慮して形式的なパターンを整理している。

・一文中に出てくる複数の動詞の中止形は、それぞれ 1 例として収集する。

・複数の中止形がかかっていく述語の接続関係を考慮する（ただし、品詞は考慮しない）。

【表 3】主体の同一性

【表 3　主体の同一性】

	シ	シテ
同一主体	987	1713
同一主体か迷うもの	4	5
異主体	207	87
異主体か迷うもの	9	23
その他判断できないもの	4	53

中止形と、それがかかる後続の述語との主体の同一性を確認する。厳密には、中止形が文末にある典型的な「述語」以外にかかる場合（例えば「串に刺して**焼いた**肉を皿に並べた」のように規定語にかかる場合）もあるが、ここでは一括して「中止形がかかる述語」としている。【表 1】で圧倒的に数の多かったシとシテの場合（存在動詞以外）に限って示す。

シもシテも同一主体の場合が圧倒的に多い。異主体の場合の用例数は主体が同一である場合に比べると少ないものの、シにおいては、異主体の場合の用例数がシテを上回っており、同一主体の場合とは逆の分布になっている。結果、シの用例では異主体の場合の比率が高くなっている。

【表 4】中止形がかかる述語の品詞

中止形がかかっていく述語の品詞は右の通りである。これについても、シとシテの場合（存在動詞以外）で代表させる。なお、中止形が動詞にかかっていく場合については、モダリティ形式および派生形式も区別している。

シもシテも、動詞にかかる場合が圧倒的に多く、基本的には、動詞の中止形とそれがかかる動詞からなる文が、動詞の中止形の基本的な使用環境と言える。

【表 4　中止形がかかる述語の品詞】

	シ	シテ
動詞	1156	1761
モダリティ形式	34	62
派生形式	1	5
形容詞	8	22
名詞	10	13
判断に迷う場合	2	19

【表 5】中止形がかかる動詞の接続関係

中止形が動詞にかかる場合について、かかる動詞の接続関係（終止、連体、中止、その他連用的な非終止の位置）を分けた。「中止（第一中止、第二中止、中止否定)」となっているものは、ある中止形がかかっていくのが動詞の中止形ということであり、【表 2】で示した、中止形が複数連続している場合の用例と重なる（ただし、「かかっている」かどうかの厳密な判断は行っておらず、ただ後続するという、直線的な把握である)。

【表 5　中止形がかかっていく動詞の接続関係】

		シ	シテ
終止		642（67）	979（111）
連体		67　(1)	235　(15)
中止	第一中止	77　(0)	133　(1)
	第二中止	205　(2)	98　(2)
	中止否定	6	4
その他連用的非終止		54	153
その他		14	25
迷ったもの・未分類		23	19

また、「その他連用的非終止」には、シナガラやシテカラ、条件形、～シ、～ガのような、中止形を除く連用的な非終止の従属形式をすべて入れている。なお、（　）の数字は、中止形がかかる動詞が、シテを含む複合的な述語（シテイク、シテクルなど）の場合を区別して示している。

圧倒的に多いのは、中止形がかかる動詞が「終止」の位置にある場合であった。分析では、すでに述べたように、中止形と、それがかかる「終止」の位置にある動詞（定形動詞）からなる文を典型的な構造として、二つの動詞述語が表す出来事間の関係を分析する。中止形が「終止」の位置にある動詞にかかる場合と同様の関係が、連体やその他連用的非終止の位置にある動詞にかかっていく場合にみられる可能性もある。しかしまずは文を言い切る「終止」の場合が動詞述語の典型的機能であることを前提に、述語らしさを持ちつつもその他の機能をも持ちうる「中止」と「終止」との対比に注目して分析を進めていく。

3.1.3.　分析対象の確認

本研究の目的上、また分析の手法上、分析の対象には種々の限定を設けざるを得ない。特に第 4～7 章のシテの分析では、前節で見たように使用頻度が高く多様な環境で用いられている

シテの用例すべてを対象にできるわけではない。また第 8 章を除き、第一中止形については分析することはできない。

第 8 章のシテイテ（シテオリ）の分析については措いて、第 4～7 章でのシテの分析の対象を整理すると次のようになる。

【表 6　第 4～7 章での分析対象】

	分析対象	分析対象としない場合
主体の同一性	**同一主体**	異主体
第二中止形の形式	**シテ**	シテイテ、サレテ、サセテ、シナイデなどの形式
定形動詞の文法的意味	**アスペクト**	ヴォイス、否定、ムード、モダリティ（ノダ以外）
定形動詞の位置	**終止の位置**	非終止の位置（連体形、連用的従属形式）
二つの動詞のアスペクト的意味	**継続相・完成相**	恒常的な特性、ものの配置、反復習慣、パーフェクト
動詞のタイプ	**外的運動動詞**： **主体動作客体変化動詞** **主体変化動詞** **主体動作動詞**	外的運動動詞： モノの非意志的な変化を表す主体変化動詞 モノの非意志的な動きを表す主体動作動詞 内的情態動詞、静態動詞

対象とする文の構造は「～が（は）＋シテ＋定形動詞」ということになる。このような例に注目するのは、最も単純なかたちで、二つの動詞述語が表す出来事間の関係を取り出すためである。

同一主体の場合に注目するのは、一つの主体のもとでシテが定形動詞との関係の中で示す副次的な意味・機能を明らかにするためである[20]。例えば「私はコーヒーの豆を挽いて、彼はお湯を**わかした**」「彼は椅子に座って、私は**立っていた**」のような異主体の文では、同主体の文に比べ、シテの副次性はとらえにくいため、扱わない。

定形動詞の位置を「終止」に限定するのは、完成相と継続相の基本的なアスペクト対立が成り立つのが、動詞が「終止」の位置にある場合であり、この場合をまず記述すべき中心的なものと考えるからである[21]。

定形動詞が表す文法的意味のうちアスペクトに注目するのは、すでに述べたように出来事の時間的関係の側面を分析するために必要だからである。動詞のタイプを外的運動動詞に限定するのも、典型的なアスペクト対立が外的運動動詞にのみ成立するからである。

しかし、中止形研究の最終的な目標は、用例の分類のみならず、「中止的な述語の一般的な

[20] 奥田（1989）は述語が二つで主語が一つである文を「ふたまた述語文」と呼ぶ。奥田（1989）は、動詞の「第二なかどめ」が「動作の複合」を表すがゆえに、「第二なかどめ」の使用においては同一主体の場合が中心であること、また、「ふたまた述語文」において「第二なかどめ」の修飾語化が進むことを指摘している。

[21] 動詞の中止形は、「終止」のみならず他の副次的な機能を果たす形式にかかっていくこともある。例えば、「串に刺して**焼いた**肉」「肉を串に刺して**焼いたら**、皿に盛りつける」「肉を串に刺して**焼き**、皿に盛りつける」のような場合である。

特性」や「中止的な述語とそれがかかっていく述語の一般的な関係」とはどのようなものかをとらえることである。そして動詞の中止形の問題は、「述語」「活用」「動詞」といった文法論の根本的概念を問うことに直結している。そのような根本的課題に取り組むには、動詞だけでなく、形容詞や名詞の場合も含めて中止形が用いられるすべての文を視野に入れ、意味・機能的関係や文の構造のあり方を網羅的に分析・記述することが必要である。

例えば、異主体の場合や、シテがかかる動詞が非終止の位置にあって三つ以上の出来事が関係する場合は、単文・複文といった文の構造的なタイプについて論じるためには本来避けては通れないものである。

また、中止的な述語による出来事間の関係を総合的に記述するにあたって、アスペクト対立のない静態動詞や形容詞、名詞の場合も含めるとすれば、これらのタイプの品詞では出来事間の動的な時間的関係が認められないか、あってもとらえにくい。最終的には、時間的なもの以外の特徴をとらえ、かつすべての品詞の場合を包括できるアプローチが必要になるだろう。

また、並列関係や条件関係（原因・理由、譲歩）といった論理性が前面に出た関係も本研究で扱うことはできないが、これらは動詞に限らずその他の品詞の中止形でも認められる関係である。こうした場合をとらえるためにも、本来はアスペクトのみならず、ヴォイスや否定、ムード、といった文法的意味も考慮されなければならない。

しかし、多様なケースの包括的な記述は、使用頻度がかなり低いタイプがあること、中止形の他にこれらの関係を表す専用の複文形式との関係も考える必要があることから、二つの動詞の関係の多様さを整理しきれていない今の筆者には、手が及ばない。今後、段階的な整理を経て、改めて分析・記述することとしたい。

3.2. 本研究の用語

以下、本研究の分析の基礎となる用語のうち、注意が必要なものについて簡単に説明しておく。

①定形動詞（終止形）

奥田（1992）は、テンスやムード、丁寧さ、みとめ方といった形態論的カテゴリーを持ち、文末に位置してそこで終止させる、という構文論的機能を持つ活用形を「終止形」と呼んでいる。すでに述べたように動詞述語の「終止形」においては、語彙的意味と相関して、テンス、ムード、アスペクトが統一的に表現される。本研究は、中止形がかかる「終止形」の動詞として「定形動詞」という用語を用いている。これは「終止形」は形容詞や名詞述語についても存在すること、また「食べるだろう」の「食べる」のように必ずしも終止の位置にない場合を指す際に用いられることがあるためである。これは奥田（1989）の「定形動詞」と同様の用語法であるが、奥田（1992）では、「動詞とは、述語としてはたらきながら、物の動的な特徴をさししめす単語なのである、といえる。しかし、動詞は連体や連用のごとき、なおもいくつかの

機能をもっていて文のさまざまな位置にあらわれてくる。したがって、日本語の動詞も終止形 finite form と非終止形 non-finite form とにわかれている。(同：5-6)」として、「終止形」が finite form、つまり「定形」であるという立場を示している。

②述語

述語は、単語の構文論的な機能上のカテゴリーであり、工藤（2002：102）によれば、「中核的な文の成分で、広い意味での〈属性〉（運動、状態、特性、関係、質）を表す。〈みとめ方〉〈テンス〉〈ムード〉〈丁寧さ〉の文法的カテゴリーが典型的なかたちで分化する」。高橋（2003）が指摘するように、条件形や連体形といった非終止の述語形式では、構文論的にも形態論的にも、また語彙的な意味のうえでも変容が生じ、脱述語化する傾向がある。動詞の中止形も述語機能を持つが、文中にあって従属的・副次的な成分としての機能を持ち、述語らしいとは言えない場合も出てくる。そのような変容をとらえるためにも、まずは述語らしい述語である定形動詞との相関関係において、副次的な述語である中止形の意味・機能のあり方を考察する。

③修飾語・状況語

工藤（2002：104）によれば、修飾語は「述語が表す属性の〈内的特徴〉（様子、程度、量）を詳しく表す任意的な文の成分」、状況語は「述語と主語（補語、修飾語）からなる〈事象〉をとりまく〈外的状況〉（時間、場所、原因、目的、場面）を表す任意的な文の成分」である。動詞の中止形が、述語としての機能に加え、文中でどのような副次的な機能を果たしているかを、これらの任意的な文の成分としての特性から考察する。なお、「副詞」的あるいは「副詞」化といった用語は、修飾語や状況語を含めた広義の連用的な意味・機能を指す場合にも、上記の狭い意味での修飾語的意味・機能を指す場合にも用いられることがあって複雑であるため、本研究では用いない。

第 3 部　分析各論

第 4 章　シテが主体動作客体変化動詞の場合

4.1.　はじめに

本章では、シテが＜主体動作客体変化動詞＞である場合を分析する。

シテが主体動作客体変化動詞である場合については、詳しい先行研究がない。仁田（1995）は「付帯状態」の箇所では「し手容態」などの明確なタイプのほかに「付属状況」を立て、シテが主体動作客体変化動詞（仁田の用語では「対象変化動詞」）の場合に言及している。「次の部屋に弱い電燈をつけて、息子が眠っていた」という例について「主たる出来事が実現する際の状況を表し、主たる出来事の実現のされ方を表現しているものの、もはや、主体の様態的なあり方とは言えないだろう」「変化後の対象のあり様が存続し、主たる出来事とともにより大きな出来事を作ることによって、〈付帯状態〉を形成する」との記述がある（仁田 1995：101）が、それ以上の詳しい意味記述は行なわれていない（吉永 2008 も同様[22]）。

分析では、1.3.1 節で述べたように、第一に、定形動詞のアスペクトによって二つの出来事の時間的関係が表し分けられ、シテの意味のあり方が異なる場合があるという事実に注目する。次の（a）（b）を見られたい。

（a）太郎は新聞をひろげて、ゆっくり**読んでいた**。　［定形動詞＝継続相］
（b）太郎は新聞をひろげて、ゆっくり**読んだ**。　［定形動詞＝完成相］

これらの例では、シテと定形動詞の組み合わせは同じである。しかし、定形動詞が（a）継続相であるか（b）完成相であるかによって、二つの出来事が同時的であるか継起的か、という時間的関係が異なる。より正確に言うと、主たる出来事に対して、シテが（a）先行する＜主体の動作＞の側面を背景化させて＜客体の変化としての結果状態＞の同時性を表すか、（b）主体の動作の側面を前面化させて主体の動作の先行性と客体の変化の結果状態の同時性の両面を表すかで、意味のあり方が異なっているのである。

このような異なりには、シテの動詞のタイプが関与している。最も典型的に違いが現れるのは、本章で扱う主体動作客体変化動詞の場合である。以下、シテが主体動作客体変化動詞である場合について、まず定形動詞が継続相である用例を分析し、同じ用例で定形動詞が完成相の場合も考察することで、定形動詞のアスペクトによる意味関係の異なりを明らかにする。

第二に、時間的関係の異なりに関わらずシテが動詞のタイプに対応した意味を表すという事

[22] 吉永（2008：40）では、「付帯」用法で選択されにくい動詞のタイプの一つとして主体動作客体変化動詞を挙げ、「殻を剝いて旨そうに**食べた**」のような例について「付帯節が最終目的を表す主節動作の方法手段になっている場合が多く、これらはより継起的なものとして付帯用法に入れられない」と述べる。このような「付帯」か「継起」かという大きくは時間的関係において対立する分類法に対して、本章は時間的関係の異なりを認めつつ、主体動作客体変化動詞において吉永（2008）のいう「最終目的を表す主節動作の方法手段」のような役割的関係の側面を積極的に取り出そうとするものである。

実に注目する。主体動作客体変化動詞は、主体の動作と客体の変化の二側面を表すが、シテにおいて重要であるのは、客体の変化結果としての状態の側面である。定形動詞が継続相である場合、「太郎は新聞を積み重ねて、**読んでいた**」が表すのは客体の変化結果としての状態と主たる出来事との同時的関係であって、「太郎は新聞を積み重ねながら、**読んでいた**」のような主体の二つの出来事（動作）の同時進行の関係ではない[23]。

重要なことに、シテが表す客体の結果状態は、主たる出来事に対して意図的に準備されたものとして効いている場合がほとんどである。定形動詞が完成相の場合、シテは主体の動作の側面を前面化して表すが、主たる出来事のために客体の変化結果としての状態が準備されることには変わりがない。このことから、シテが表す基本的な意味特徴を＜意図的に準備された客体の結果状態＞としておく。

これらの点をふまえて、シテが表す役割的関係における意味のバリエーションをタイプ化して記述する。具体的には、二つの動作の客体が（c）同一であるか（d）同一でないか、すなわち＜客体の同一性＞という文構造と意味関係の異なりに従って、次のような二つのバリエーションを取り出す。

（c）太郎は新聞をひろげて、ゆっくり**読んでいた**。　［客体が同一］
（d）太郎は新聞をひろげて、爪を**切っていた**。　［客体が同一でない］

以下、まず、4.2 節において定形動詞が継続相である場合を分析する。意図的に準備された客体の結果状態という意味特徴を基本として、客体の同一性から二つのバリエーションに整理して記述する。その中で、一見例外的と思われる場合についても触れる。そのうえで 4.2 節において、同じ用例について定形動詞を完成相にしてみることで、時間的関係の異なりと役割的関係の共通性を確認する。

4.2　定形動詞が継続相の場合
　4.2.1　客体が同一の場合
　4.2.2　客体が同一でない場合　　意図的に準備された客体の結果状態
4.3　定形動詞が完成相の場合
　4.3.1　客体が同一の場合
　4.3.2　客体が同一でない場合

[23] 次のような例では主たる出来事の実現のためにシテが表す動作が複数回行なわれることから、主体の動作の側面が表されていると言えるかもしれない。しかし、やはり二つの出来事の単なる同時的進行を表すのではない。「薪をくべて暖を取る」には手段と動作、「半紙を貼って高張提灯を作る」では材料と生産のような意味関係があるが、複数回行われる「薪をくべる」「半紙を貼る」という動作によって、主たる出来事が段階的に実現していくという、独特の関係になっている。
・まだストーブもつけずに、囲炉裏に薪をくべて暖を**取っている**。（泥流地 172）
・耕作は取って来た柳の枝に、半紙を貼って高張提灯を**作っている**。（泥流地 194）

4.2. 定形動詞が継続相の場合

4.2.1. 客体が同一の場合：共通の客体の結果状態

この場合、シテと定形動詞の両方が他動詞であり、かつシテの表す動作の客体は定形動詞が表す動作の客体でもある[24]。そのように構造が限定されているため、客体が同一でない場合に比べると用例数は相対的に少ない。しかし客体が同一であれば、客体の結果状態が主たる出来事のために準備されたものであることが一文レベルで非常に明確である。一方、客体が同一でない場合には、シテが表す客体の結果状態が、相対的に間接的に主たる出来事に関わっている場合（例（21）（22））や、文脈を考慮することで出来事間の関係が読み取れる場合（例（25）（26））も含まれている。このことから、客体が同一である場合を先に扱う。

シテは二つの動作に共通の客体における結果状態を表している。これを＜共通の客体の結果状態＞としておく。まず挙げるのは、シテが「丸める、重ねる」のような＜もようがえ動詞＞の場合である。シテは、主たる出来事のための前提として必要になる、客体の形状における変化結果としての状態を表している。たとえば例（1）では、「紐で束ねる」という主たる出来事のために、「新聞」という客体の形状を「積み重ねた状態」にしている、という関係がある。

（1）菊子が新聞を積み重ねて、紐で**束ねていた**。（山の音 029）

（2）「お前の上着をか」

「うん。まるめて枕の替りに頭の下に敷いてる」（夏草下 010）

（3）兵隊はトタン板の四つの角をぐるぐるに折り曲げて**持っている**。（黒い雨 028）

次に挙げる「のせる、入れる」のような＜とりつけ動詞＞＜うつしかえ動詞＞の例では、シテがニ格（へ格）名詞によって表される第二の対象をともなっていることが普通である[25]。この場合、定形動詞が表す主たる出来事（客体への働きかけ）に対して、副次的に＜客体の位置＞をも表していると言える。シテに関係するニ格（へ格）名詞との関係に従って、語順の違いによる二つのバリエーションを示す。

［語順：ニ格名詞→ヲ格名詞→シテ→**定形動詞**］

（4）膝の上に五日分ほどの新聞を積み重ねて、ゆっくり**読んでいた**。（山の音 163）

（5）住職は縁側に蔵書を持ち出して陽に**当てていた**。（夏草下 009）

（6）人夫は一升瓶二本に水を詰めて車に**積んでいた**。（黒い雨 029）

---

[24] 基本的にヲ格名詞は文中に一つであるが、「それを」のような指示代名詞がある場合もある。

・洪作が手足を洗って応接室へ戻ると、金枝と藤尾は蓄音機のレコード盤を引き出して、それを**見ていた**。（夏草下 005）

[25] このほか、カラ格名詞をともなう例もみられた。共通の客体が、カラ格名詞が表す第二の対象（でどころ）とともに、文の中に導入されている。

・向い側には新聞をひろげた中年の仏蘭西人が腰かけている。時々横においた袋からキャマンベールをはさんだパンをとりだして**齧っている**。（留学 019）

［語順：ヲ格名詞→ニ格名詞→シテ→**定形動詞**］

(7) 保子は茶の間で、十日分ほどの新聞を膝に積み重ねて**読んでいた**。(山の音 032)

(8) 女たちはそれぞれガートの露店で買った花びらを木の葉にのせて水に**流している**。(深い河 210)

(9) 耕作は、福子からもらった白い小石を、袋にいれて腰に**つけている**。(泥流地 163)

後者の語順では、シテのみに関係するニ格名詞が両方の動詞に関係するヲ格名詞よりも定形動詞に近い位置にある。例 (8) (9) では規定語とヲ格名詞の部分 (「それぞれガートの露店で買った花びらを」「福子からもらった白い小石を」) が長いためにこのような語順になっているとも考えられる。主体動作客体変化動詞の場合にこのような語順のバリエーションがありうることはこれまで指摘されていないため、整理して示しておく。

4.2.2. 客体が同一でない場合：補助的な客体の結果状態

このタイプは客体が同一ではないが、多くの場合、シテが表す客体の結果状態が、主たる出来事のための下地として意図的に準備されたものであることが明らかである。この意味で、主たる出来事に対して補助的に働いていると言える。以下、シテが表す役割的関係における意味を＜補助的な客体の結果状態＞とする。シテが表す出来事と主たる出来事との関係が一様ではないため、関わり方が直接的なものから間接的なものへと整理して提示する。また、一文ではシテの表す客体の結果状態が主たる出来事にどう効いているのか一見わかりにくい場合についても触れる。

まず、定形動詞が他動詞である場合の用例を示す。例 (10) ～ (14) では、主たる出来事の実現にあたって必要な客体の結果状態をヲ格名詞とシテが表している。変化をこうむる客体は、主たる出来事を効果的に行なうために、それに何らかのかたちで加わっている。例 (10) (13) で形状の変化、例 (11) (12) (14) で位置の変化をこうむる客体が主たる出来事のために用いられるという点では、その客体を広い意味の「道具」と言えるかもしれない。

しかし正確には、例 (10) の「原稿紙」は主たる出来事を実現するために必要な第二の対象である。このことは「原稿紙」が定形動詞に対して「原稿紙に随筆を書く」というくっつき先のニ格相当の関係になることからもわかる。例 (11) (12) では、「蓄音機で室内楽を聴く」「盥で濯ぎものをする」という道具のデ格相当の関係にあることからもわかるように、「蓄音機」「盥」は直接の道具として働くものであり、シテは主たる出来事を効果的に実現するための、道具としての客体の結果状態を表している。例 (13) (14) の「莚」「椅子」は、名詞のデ格で表されるような直接的な道具 (たとえば庖丁や鉛筆) ではなく、主たる出来事を効果的に行なうために必要な、いわば間接的な道具としての客体を表している。

［主たる出来事を行なうために必要な第二の対象の結果状態］

(10) 寝ながら藁半紙のような原稿紙を拡げて、富岡は、漆に就いての随筆を**書いていた**。(浮雲 048)

→ 原稿紙に随筆を書くために、原稿紙を拡げた状態にする

［主たる出来事を効果的に行なうために必要な道具の結果状態］

(11) 清吾は、枕許に手巻きの蓄音機を引き寄せて、横になったまま音のかすれた室内楽を**聴いていた**。(白夜を 177)

→ 蓄音機で室内楽を聴くために、蓄音機を引き寄せた状態にする

(12) 井戸端に盥を出して作造が**濯ぎものをしていた**。(あ・う 032)

→ 盥で濯ぎものをするために、盥を井戸端に出した状態にする

［主たる出来事を効果的に行なうために必要な間接的な道具の結果状態］

(13) 下のおばさんが莚をひろげて大根をサクサクサクと**切っていた**。(リツ子 028)

→ 莚の上で大根を切るために、莚をひろげた状態にする

(14) その午後、田中は窓の近くに椅子を運んで、鉛筆を片手に仏語で手紙を**書いていた**。(留学 017)

→ 椅子に座って手紙を書くために、椅子を窓の近くに運んだ状態にする

次の例（15）～（18）でも、客体の結果状態が同時的に存在していることによって、主たる出来事を直接的に、あるいは効果的に行なうことが可能になっている。例（15）（16）では、主たる出来事は、普通、シテが表す客体の結果状態がなければ実行できないものである（貯金箱をあけなければ金は数えられない、紙袋の口を広げなければなかは見せられない)。一方、例（17）（18）では、必ずしもその状態でなければ主たる出来事を実現できないわけではないが、効果的に、あるいは効率よく実現させるために必要になるものである。

これらの例では、シテと定形動詞が表す動作に対する二つの客体（「竹筒の貯金箱」と「金」、「紙袋の口」と「なか」、「ゲートル」と「足」、「瓶」と「酒」）は、同一の物体における部分どうし、あるいは入れ物と中身の関係としてタイプ化が可能である。

［主たる出来事を行なうために必要な結果状態］

(15) 昨夜拓一が、竹筒の貯金箱をあけて、金を**数えていた**。(泥流地 181)

→ 貯金箱の中の金を数えるために、貯金箱をあけた状態にする

(16) 玄関先に出てきたマリのまえで、行天が紙袋の口をちょっと広げてなかを**見せていた**。(まほろ 168)

→ 紙袋のなかを見せるために、紙袋の口を広げた状態にする

［主たる出来事を効果的に行なうために必要な結果状態］

(17) 浜野軍曹はゲートルを解いて、足を**揉んでいました**。(ねじま 126)

→ 足を揉むために、ゲートルを解いた状態にする

(18) その一つの卓に瓶を置いて、准士官が一人酒を**飲んでいた**。(桜島 078)

→ 酒を飲むために、瓶を卓に置いた状態にする

定形動詞が自動詞の場合も確認しておく。この場合は、客体（ヲ格名詞）が共通であることはありえない。しかし次の例（19）（20）のように、シテが主たる出来事のために必要な客体の結果状態を表している点は、定形動詞が他動詞である場合と同様である。

［主たる出来事を行なうために間接的に働く結果状態］

(19)「(…) あの時浜で、太郎が、お父様から寝せつけていただいた所があったでしょう。あの辺りの砂を探し出して、その上に**寝てましたのよ**。(…)」(リツ子 014)

→ 砂の上に寝るために、砂を探し出した状態にする

(20) 月の明るい海だった。リツ子の枕頭のガラス戸を押し開いてなまめき照っている海の窓に**凭れていた**。(リツ子 027)

→ 窓に凭れるために、ガラス戸を押し開いた状態にする

ここまでの例と違って、次の例（21）（22）では、シテの表す動作の客体が主たる出来事に直接的に関わっているとは言いにくい。主たる出来事に直接的に関わっていると言えるのはそれぞれ「ヘッド・ランプ」を部分とする「バイク」、「コンパクト」の部分である「鏡」であろう。この意味で例（11）～（14）のような場合に比べると間接的であるが、客体の結果状態が主たる出来事に対して補助的に働いていることは同様である。

［主たる出来事のための道具の部分、または道具的部分を含むもの全体への働きかけ］

(21) タケはヘッド・ランプを消して、飯塚と冴子の乗ったタクシーを**尾行していた**。(眠り猫 181)

→ バイクでタクシーを尾行するために、バイクのヘッド・ランプを消した状態にする

(22) あきらめきった表情で、毛布の皺の中に、コンパクトを挟みこんで、ゆき子は乱れた髪を**なおしていた**。(浮雲 059)

→ コンパクトの鏡で髪をなおすために、コンパクトを皺の中に挟みこんだ状態にする

次の例（23）（24）でシテが表しているのは、主たる出来事の成立に食いこんでいく対象としての具体物における結果状態ではない点で、より間接的である。主たる出来事をとりまく空間、あるいは「環境」としての客体における変化結果としての状態である。ただし、このような例は少ない。

［主たる出来事を効果的に行なうために必要な環境としての結果状態］

(23) 部屋に戻ると、君島が勝手にクーラーを入れて、コーヒーを飲みながらゴルフ中継を**見ていた**。(顔に降 157)

→ 部屋でゴルフ中継を見るために、部屋のクーラーを入れた状態にする)

(24) 次の部屋に弱い電燈をつけて、息子が**眠っていた**。(偕老同穴、仁田 1995 の例[26])

[26] これは仁田（1995：101）が「付帯状態」の例として挙げる例（38）である。

→　部屋で眠るために、部屋に弱い電燈をつけた状態にする

以上、客体の同一性によって取り出した二つのタイプの文法的な異なりは、次のような言い換えの可否に現れる。客体が同一の場合には、次の例（4”）（7”）のように、シテを連体形にしてヲ格名詞の前におくことが可能で、意味もほとんど変わらない。このような言い換えは、例（11”）（15”）のように、客体が同一でない場合には不可能である。

（4”）膝の上に*積み重ねた*五日分ほどの新聞を、ゆっくり**読んでいた**。
（7”）保子は茶の間で、膝に*積み重ねた*十日分ほどの新聞を**読んでいた**。
（11”）*清吾は、枕許に*引き寄せた*手巻きの蓄音機を、横になったまま音のかすれた室内楽を**聴いていた**。
（15”）*昨夜拓一が、*あけた*竹筒の貯金箱を、金を**数えていた**。

ここまで、シテが基本的に意図的に準備された客体の結果状態を表すものとして用例を確認してきた。これに対して、実例としては少数であるが、一文を見る限りではシテと主たる出来事との関係が明確でない場合がある。しかしそのような場合でも、文脈を広く考慮することで、客体の結果状態が意図的に準備されたものであり、主たる出来事の成立の際に同時的に存在しなければならない理由が理解できる。

例（25）（26）はそれぞれ、定形動詞が他動詞と自動詞である。いずれも、一文ではシテが表す客体の結果状態が主たる出来事のために準備されたものとは判断しにくい。

（25）見ろ、おまえの白け果てた骨の上に、こうして父と子が「味噌の骨」をのせて握り飯を**喰べている**。（リツ子 056）
（26）母が、太郎にも服を着せて、ラジオの前に**坐っている**。（リツ子 019）

しかし文脈をみると、例（31）では骨壺をリツ子に見立て、そこにリツ子を思い出させる「味噌の骨（茄子の味噌漬）」をおくことで、家族が一緒になって食事をしている（と「私」がみなしている）ことがわかる。リツ子の遺骨と「味噌の骨」という、二つの異なる「骨」の連想が存在している点が興味深いが、重要であるのは、主たる出来事に対してシテがやはり補助的な客体の結果状態を表している点である。シテが表す副次的な動作の客体が主たる出来事の成立に加わっていくという意味では、これまでに挙げた例と同様である。

（25）「太郎。母のポンポンの上で御飯を喰べようか」
「うん、うん」と太郎は嬉しそうに肯いて、「ハハもおにぎり喰べたい、喰べたいって？」
今度は私が笑って肯いてみせるのである。そこで骨壺の上に握り飯の竹の皮をのせた。発ち際に下のオバさんが作ってくれたおにぎりには、きっちりと沢庵が添えてある。その横に小さな茄子の味噌漬が光っていた。

「ほうら、太郎。味噌の骨」

私はそれを指でつまんで、いぶかる太郎の口に入れてやる。

「すっぱい、すっぱい」と太郎が眉根を寄せている。

「味噌の骨」には死者の思い出があった。食慾の無い日にはきまってリツ子が「ほらあの骨を」と狡そうに私に甘えて、下のおばさんから味噌漬をねだらせたものである。結核が腸に来たと自分でも知ってからは、いつとはなしにその「味噌の骨」を云わなくなった。言葉の「骨」を忌んだのであろう——。

何もかも済んで終った。見ろ、おまえの白け果てた骨の上に、こうして父と子が「味噌の骨」をのせて握り飯を**喰べている**。(リツ子 056)

例(26)は「家族そろって玉音放送を聞く」という文脈の中で、ラジオの前で放送を待つにあたって家族(太郎)の服装をきちんと整えておくことが、主たる出来事に対して必要な客体の結果状態として効いていることがわかる。

(26) 茶の間の方に帰ってみた。母が、太郎にも服を着せて、ラジオの前に**坐っている**。抱いたまま、私を見上げ、

「リツ子さんは?」

「聞かないそうです」

「でも、何か覚悟しなければならないことなら、一緒に聞いた方がよくはない?」

「いいでしょう」

「あなたは、裸?」「いいさ裸でも。生れた時の恰好だから」

「上着だけでもおかけなさい。新のがあるのよ」

と母は太郎を横にはずして、箪笥の一番下の引出しから、弟の霜降りの学生服をとりだした。

「じゃ、着よう」(リツ子 019)

シテが主体動作客体変化動詞である場合の意味が、例(25)(26)のようなものだけであれば、客体の結果状態は主たる出来事の成立のために必要なものとして食いこんでいかない、付随的なものとしてのみ扱われてもおかしくない[27]。しかし実例の多くでは一文レベルで客体の

[27] 次のような場合については、もはや客体の結果状態が主たる出来事のために準備されたものとは言えず、単に付随する出来事ということになるだろう。定形動詞は表情や思考活動を表しているが、その理由や内容を示す部分はシテと定形動詞を含む一文の外にある。二つ目の例では、先行する会話文からナイフを構えた状態で微笑むことの意味は理解できるものの、やはり客体の結果状態が主たる出来事の実現のために効いている、という関係ではない。しかし、このような場合はごく少数である。

・タクシーは遅く、CB はすぐにちかづいてしまう。動力性能が極端に違うと、案外尾行はしにくいものだ。
タケはアクセルを八分の一程度開いて、**考えこんでいた**。
冴子と飯塚は、由子の店の一階の喫茶店の陰で抱き合っていた。
あのときタケは、おもわず革ジャンの内ポケットのベレッタに手を伸ばしたものだ。
無理強いされていると思ったのだ。しかし冴子はうっとりとしていた。タケには、そう感じられた。(眠り猫 182)

・言った直後、タケは飛びのいた。タケの腹を果物ナイフがかすめた。タケは口を尖らせて声をあげる。
「本気だろ! シャレになんないよ」

結果状態が主たる出来事のために準備されていることが明確であり、二つの出来事に明らかな統一性がある。中でも 4.2.1 節で確認した二つの動作の客体が同一の場合は、意味面のみならず文法的特徴から明確なパターンとして取り出すことができる。そのうえで、客体が同一でない場合のより精密なパターン化が可能になる。

4.3. 定形動詞が完成相の場合

シテが主体動作客体変化動詞である場合、基本的に定形動詞のアスペクトによって時間的関係の違いが表し分けられることは 4.1 節で述べた。本節では、4.2 節で取り出したタイプに沿って定形動詞を完成相に言い換えることで、客体の変化結果としての状態に基づくシテの意味特徴が、時間的側面の違いに関わらず認められるという事実を述べる。なお、言い換えは場面・文脈を考慮せず一文レベルで考察する[28]。

4.3.1. 客体が同一の場合：共通の客体に対する先行動作とその結果状態

まず客体が同一である場合には、定形動詞を完成相にすると、シテが＜共通の客体に対する先行動作とその結果状態＞を表す。定形動詞が継続相の場合と違って、シテが表す主体の動作の側面が前面化し、二つの動作の継起性がとらえられる。順序は非常に明確である。

(1') 菊子が新聞を積み重ねて、紐で**束ねた**。
(2') (上着を) まるめて枕の替りに頭の下に**敷く**。
(3') 兵隊はトタン板の四つの角をぐるぐるに折り曲げて**持つ**。
(4') 膝の上に五日分ほどの新聞を積み重ねて、ゆっくり**読んだ**。
(5') 住職は縁側に蔵書を持ち出して陽に**当てた**。
(6') 人夫は一升瓶二本に水を詰めて車に**積んだ**。

定形動詞のアスペクトによる時間的関係の異なりは、次のように連体形との言い換えにも出てくる。4.2.1 節で確認したように、定形動詞が継続相で二つの出来事が同時的な場合は、次の例 (4") のようにシテを連体形にして客体を表すヲ格名詞の前においてもよく、意味がほとんど変わらなかった。一方、定形動詞が完成相で継起的な場合は、例 (4"') のように連体形を使って言い換えると先行する動作との継起性がとらえられなくなり、(非文法的ではないが) 意味が変わってしまう。

「お陰様で、お嬢様育ちだったわたくしも、あなたたち親子のおかげで、すっかり鍛えられましたの」
冴子は果物ナイフを顔の高さにあげて、**微笑んでいる**。(猫の息 002)

[28] すでに述べたように、定形動詞のアスペクトは、テクスト中の他の文の動詞述語のアスペクトとの相関によって複数の出来事間の時間的関係を構成している。一文で言い換えを判断するのは、定形動詞のアスペクトを継続相から完成相にすることで、(シテが含まれる文以外の) 他の文との時間的関係が変わり、テクストの流れ (文脈) 上の不自然さが生じることを避けるためである。

(4) 膝の上に五日分ほどの新聞を積み重ねて、ゆっくり**読んでいた**。
(4") 膝の上に*積み重ねた*五日分ほどの新聞を、ゆっくり**読んでいた**。
(4') 膝の上に五日分ほどの新聞を積み重ねて、ゆっくり**読んだ**。
(4"') 膝の上に*積み重ねた*五日分ほどの新聞を、ゆっくり**読んだ**。

一方で、定形動詞が完成相であっても、客体の変化結果としての状態が主たる出来事の成立の際に同時的に存在していることは継続相の場合と同様である。「新聞を積み重ねて、**読んでいた**」でも、「新聞を積み重ねて、**読んだ**」でも、「積み重なった状態」にある新聞を読むということには変わりがない。つまり、定形動詞が完成相の場合、主体の動作は定形動詞の表す動作に先行し、かつ、客体の結果状態は定形動詞の表す動作と同時的な関係にあるという、複合的な時間構造になっている。

(5) 住職は縁側に蔵書を持ち出して陽に**当てていた**。[客体の結果状態の同時性]
(5') 住職は縁側に蔵書を持ち出して陽に**当てた**。 [主体の動作の先行性 ＋ 客体の結果状態の同時性]

例(7')～(9')の、ニ格名詞とシテが定形動詞に近い位置にある語順の場合でも、二つの動作の継起性(シテが表す動作の先行性)だけでなく、シテが客体の結果状態の同時性とともに共通の客体の位置を表現していることが確認できる。

(7') 保子は茶の間で、十日分ほどの新聞を膝に積み重ねて**読んだ**。
(8') 女たちはそれぞれガートの露店で買った花びらを木の葉にのせて水に**流す**。
(9') 耕作は、福子からもらった白い小石を、袋にいれて腰に**つける**。

4.3.2. 客体が同一でない場合：補助的な客体に対する先行動作とその結果状態

次に、客体が同一でない場合には、シテは<補助的な客体に対する先行動作とその結果状態>を表す。客体が同一である場合と同様、シテは先行する一つの独立した動作を表す。しかし、客体の結果状態は続く主たる出来事の実現のために用意されるものであり、二つの動作の順序ははっきりしている。

[定形動詞が他動詞の場合]
(10') 寝ながら藁半紙のような原稿紙を拡げて、富岡は、漆に就いての随筆を**書いた**。
(11') 清吾は、枕許に手巻きの蓄音機を引き寄せて、横になったまま音のかすれた室内楽を**聴いた**。
(12') 井戸端に盥を出して作造が**濯ぎものをした**。
(13') 下のおばさんが莚をひろげて大根をサクサクサクと**切った**。
(14') その午後、田中は窓の近くに椅子を運んで、鉛筆を片手に仏語で手紙を**書いた**。

（15’）昨夜拓一が、竹筒の貯金箱をあけて、金を**数えた**。

（16’）玄関先に出てきたマリのまえで、行天が紙袋の口をちょっと広げてなかを**見せた**。

（17’）浜野軍曹はゲートルを解いて、足を**揉みました**。

（18’）その一つの卓に瓶を置いて、准士官が一人酒を**飲んだ**。

［定形動詞が自動詞の場合］

（19’）「あの辺りの砂を探し出して、その上に**寝ました**のよ。」

（20’）リツ子の枕頭のガラス戸を押し開いてなまめき照っている海の窓に**凭れた**。

しかしこれらの場合でも、二つの出来事の間に、主体の動作の先行性とともに客体の結果状態の同時性が認められることを再度述べておく。同時的に存在する客体の結果状態は、主たる出来事に対して何らかの意味で必要なものとして効いており、定形動詞が継続相か完成相かに関わらず、シテの主体動作客体変化動詞という動詞のタイプと対応して意味関係の中心となっているのである。

4.4. 本章のまとめ

本章の分析を整理して典型例とともに示すと、以下のようになる。

Ａ．定形動詞＝継続相

シテ＝客体の結果状態の同時性

Ａ－１．客体が同一：共通の客体の結果状態

・太郎は畳の上に新聞をひろげて、**読んでいた**。

Ａ－２．客体が同一でない：補助的な客体の結果状態

・太郎は畳の上に新聞をひろげて、爪を**切っていた**。

Ｂ．定形動詞＝完成相

シテ＝主体の動作の先行性＋客体の結果状態の同時性

Ｂ－１．客体が同一：共通の客体に対する先行動作とその結果状態

・太郎は畳の上に新聞をひろげて、**読んだ**。

Ｂ－２．客体が同一でない：補助的な客体に対する先行動作とその結果状態

・太郎は畳の上に新聞をひろげて、爪を**切った**。

定形動詞のアスペクトとシテの動詞のタイプに注目した分析を通じて、シテが主体動作客体変化動詞である場合に表される意味について、主に次の二点を記述した。

①シテが主体動作客体変化動詞の場合、定形動詞のアスペクトによって、意味のあり方は次のように異なる。

（A）定形動詞が継続相の場合、シテは時間的に先行する主体の動作の側面は背景化させて、主たる出来事に対して客体の結果状態の同時性を表す（4.2）。

（B）定形動詞が完成相の場合、主たる出来事に対して主体の動作の先行性と客体の結果状態の同時性の両面を表す。（4.3）。

②シテが主体動作客体変化動詞の場合、主たる出来事のための意図的に準備された客体の結果状態を表す。またシテが主体動作客体変化動詞であることと関係して、二つの動作の客体が同一である場合（4.2.1、4.3.1）と、同一でない場合（4.2.2、4.3.2）というバリエーションがある。これらは、定形動詞のアスペクトによる二つの出来事の時間的関係の違いに関わらず、動詞のタイプに対応した特徴である。

本章の記述は、奥田（1989）の「動作の複合」という時間的側面を含みこんだ意味記述のあり方をふまえたものである。奥田（1989）は、「動作の複合」のうち継起的な時間的関係がみられる場合について次のように述べている。

> ふたつの動作が第二なかどめでむすばれて、ひとつの複合動作をかたちづくっているとき、おおくのばあい、ふたつの動作のあいだに先行・後続の時間的な関係がみられる。定形動詞によってさしだされる、主要な動作が実現するにあたって、まえもって用意しておかなければならない状態が、第二なかどめの形のなかにさしだされる動作によって実現されるのである。したがって、第二なかどめの形のなかにさしだされる動作は、定形動詞によってさしだされる動作との関係において、かならず先行していなければならない。そして、この動作は完結して、結果的な状態をのこしていて、それが主要な動作の実現のための条件としてはたらいている。ここでは、第二なかどめの動詞はパーフェクト性をおびているのである。この意味で、第二なかどめの形のなかにさしだされる動作は、主要な動作に先行する、副次的な動作としてあらわれながら、ふたつの動作のひとまとまり性が生じてくる。つまり、第二なかどめの動詞がふくみとしてさしだす≪状態≫のなかでのみ、定形動詞によってさしだされる動作は進行することができる。　（同：20）

このような指摘は、従来、単に「継起的」であるとされてきた例について、主体の動作の先行性と客体の結果状態の同時性の両面を認めることにとって重要である。定形動詞が継続相であって客体の結果状態の同時性をシテが表している場合、先行する動作そのものは背景化されているが、「この動作は完結して、結果的な状態をのこしていて、それが主要な動作の実現のための条件としてはたらいている」という点は同じである。

シテが表す出来事が結果状態か動作か（主たる出来事に対して同時的か継起的か）という違いに関わらず、定形動詞が表す主たる出来事との関係において、シテはどちらも副次的な出来事を表す。そのような把握によって、主体動作客体変化動詞の場合、定形動詞のアスペクトによって時間構造が異なる一方で、主たる出来事のために準備される客体の結果状態をシテが共通して表すことが記述できた。客体における変化結果としての状態を表すことは主体動作客体変化動詞という動詞のタイプに対応しているが、それが続く出来事に対してどのような意味を

持つのかは、定形動詞の表す主たる出来事との関係の中でしか見えてこない。定形動詞のアスペクトもこの点と関わる。定形動詞が完成相である場合の二つの動作の継起性には、主たる出来事のために客体の結果状態を先行させて成立させるという主体の意志的側面が含まれているのであって、単に出来事の順序が継起的であるというわけではない。この点は、続く主体変化動詞の分析にもあてまはる基本的な事実である。

第 5 章　シテが主体変化動詞の場合：姿勢変化動詞の分析

5.1.　はじめに

本章では、シテが＜姿勢変化動詞＞である次のような場合について記述する。

(1) 釣りの男は風のこない二段目の堤防にすわってのんびり煙草を**ふかしていた**。(岳物語 009)

(2) 男は目を伏せて煙草を**吸っていた**。(離宮の 003)

例 (1)「すわって」と例 (2)「目を伏せて」は、どちらも主体の身体における、外見的な変化としての結果状態を表している。これら「座る」「(目を) 伏せる」といった動詞を＜主体変化動詞＞に所属する姿勢変化動詞としてまとめて分析する。

例 (1) と例 (2) では、定形動詞のアスペクトを継続相から完成相にした場合に、次のような違いがある。「堤防にすわって煙草を**ふかした**」ではシテが表す動作の先行性が認められるのに対し、「目を伏せて煙草を**吸った**」では動作の先行性がはっきりしない。奥田 (1989)、仁田 (1995) といった先行研究では、二つの出来事の時間的関係の異なり (動作の先行性の有無) を意味記述に含めているが、それがどのような条件で生じるかは明らかでない。そこで、定形動詞のアスペクトに注目して、上記のような違いを説明する。

また、例 (1) はシテが「堤防に」というニ格名詞をとり、これを場所のデ格名詞で「堤防で煙草を**ふかしていた**」と言い換えてもよいが、「岩にすわって煙草を**ふかしていた**」にするとデ格名詞では言い換えられない。奥田 (1989) は例 (1) のような場合を「主要な動作が実現する空間」を表す場合としているが、本節ではニ格名詞との関係に注目し、この点をさらに詳しく記述する。

以下、定形動詞のアスペクトやシテと名詞の結合のし方といった文法的特徴に基づいて二つの出来事間の関係とシテの意味のあり方を記述し、連続的に位置づける。また、修飾語らしさや状況語らしさといった、シテの文の成分としての機能の側面も考察する。

分析の対象 (主体変化動詞・姿勢変化動詞) については 5.2.1 節、先行研究については 5.2.2 節で確認する。5.3 節で用例を分析し、5.4 節では記述を整理したうえで主にシテの機能面について考察する。

5.2.　分析対象と先行研究

用例の具体的分析に先立って、本章の分析の対象と先行研究について概観する。

5.2.1.　本章の分析対象

主体変化動詞については工藤 (1995) の次のような下位分類と定義に従う。

[主体変化動詞の定義 (工藤 1995：83)]

(A・2) 主体変化動詞は、主体の変化の側面を前面化して、あるいは、主体の変化の側面のみを、とら

えているものである。

人が自らを変化させるべく行なう能動的・意志的動作をとらえている、①②のような動詞グループと、ものの受動的変化をとらえている③のような動詞グループに下位分類される。①②の動詞の方は、人の意志的動作を含んでいる点で、（A・1）の主体動作・客体変化動詞に、より近い。③の動詞には、主体の意志的動作の側面はなく、主体動作・客体変化動詞（他動詞）に対応する自動詞は、すべて、この③に所属することになる。

［主体変化動詞のタイプ（工藤 1995：74-75 から筆者によるまとめ。□は筆者が付した)］

①主体変化・主体動作動詞［再帰動詞］

・かぶる、きる、ぬぐ、はく／・おぶう、かかえる、かつぐ、だく、つかむ、もつ

②人の意志的な（位置・姿勢）変化動詞［自動詞］

・あがる、あつまる、いく、うつる、かえる、かくれる、くる、でる、はいる、もどる、よる

・かがむ、こしかける、しがみつく、しゃがむ、すわる、たちどまる、たつ、のる、ねころぶ

・（人の社会的な変化）結婚する、就職する、卒業する、入院する、離婚する

③ものの無意志的な（状態・位置）変化動詞［自動詞］

・あたたまる、うれる、おれる、かわく／うまる、かくれる、かさなる、さがる、たつ／おちる、ちぎれる、とれる、ぬける、はなれる／あがる、あつまる、うつる、でる／あらわれる、できる

本章が主な対象とする姿勢変化動詞は下記の□の自動詞と、「目を伏せる、腰を下ろす」などの他動詞（主体動作客体変化動詞）の再帰構造による、主体の身体の全体・部分における向き・位置などの外見的変化を表す動詞である。このような把握は奥田（1989）の「ふるまい動詞」と基本的に同じである。分析のための詳しい下位分類については 5.3.1 節で確認する。このほか、部分的にではあるが、「行く、出る」などの＜位置変化動詞＞も姿勢変化動詞との関連から扱うこととする。

用例の収集方法、対象とする形式については 3.2.3 節で述べた通りであるが、ここでは、主体変化動詞のうち対象外にするものについて二点述べておく。

第一に「着る、持つ」などの主体変化・主体動作動詞の場合（上記工藤 1995 の分類の①)、は、ヒトの意志的な動作を含む点で姿勢変化動詞と共通するが、他動詞であるため主体動作客体変化動詞との共通性もある。また「着る」に類する動詞では「彼は紺地の浴衣を着て、黒い帯を**締めていた**」のように同種の出来事が並列される例が多く見られる点でも、姿勢変化動詞とは異なる傾向を示している。これらについては第 6 章で分析を加える。第二に「花びらが落ちて、雨で**濡れていた**」のように、シテがモノの無意志的な（状態・位置）変化を表す場合（上記工藤 1995 の分類の②）は、主体の結果状態が意図的に準備されるかどうかが問題にならない点で、姿勢変化動詞とは大きく異なる。「花びらが落ちて、雨で**濡れた**」のような場合は結果状態の意図的準備性に基づかない出来事の連鎖である。このような場合

には、意志的なヒトが主体である場合に見られる役割的意味のバリエーションが出ない点でもふるまいが異なる。このような場合については今後の課題とする。

5.2.2. 先行研究

まず、奥田（1989）について、例も挙げながら、シテが姿勢変化動詞である場合についての指摘を整理して示す。

①副次的な動作と主要な動作との継起的な複合において、シテが移動動作を表す動詞および「たつ、すわる」のような動詞で「主要な動作が実現する空間」を表す場合がある。（同：21-22）。

・仕方がないので、洗面所にたどりついて、水道栓をひねってみた。［移動性の動作を表す動詞］

・稜線の頂にたって、後方を展望すると、(…)　［「たつ、すわる」のような動詞］

②「ふるまい動詞」は「ふるまい状態」と主要な動作との同時的複合を表すが、一方で「ふるまい動作」と主要な動作との継起的複合を表すこともある（同：26-28）。

・三吉はションボリたって、ながめていた。　［ふるまい状態との複合］

・一度たって、夕刊と老眼鏡とをもってきた。　［ふるまい動作との複合］

③シテが主要な一つの動作のあり方・様態の特徴づけに移行した場合に、シテが「心理活動に付随しておこってくる表情やみぶり」を表す場合がある。（同：29-32）。

・しかし、信吾は胸をのりだして、小川のこちら岸の篠竹のあいだを、目でさがしてみた。

奥田（1989）の記述については、取り出したタイプとその相互関係のより客観的・法則的な説明が必要であると思われる。例えば上記②の「ふるまい状態」と「ふるまい動作」の、「複合」のあり方の違いについての次のような指摘は非常に重要であるが、その違いの文法的条件は明らかではない。①と②、②と③の関係についても同様である。

> 《ふるまい状態》と動作との複合のばあいでは、ふるまい動詞は動作性をきりすてながら、たんなる状態をさしだしているにすぎないが、継起的におこってくる、ふたつの動作の複合の場合では、ふるまい動詞の動作性が前面にでてきて、結果性がふくみとして表現されている。　（同：28）

次に、仁田（1995）では、シテが姿勢変化動詞である場合が「付帯状態」として下位分類されている。しかし用例を詳しく観察すると、この「付帯状態」「継起」の区別に疑問が生じる。「付帯状態」には容易に「継起」的になるものがある。例えば仁田（1995：93）の「自分はそれを何気なく、踞(しゃが)んで**見ていた**」を「自分はそれを何気なく、踞んで**見た**」にした場合。この場合、定形動詞のアスペクトによって「付帯状態」と「継起」が異なると思われるが、言及はない[29]。そもそも、「踞んで**見ていた**」と「踞んで**見た**」では二つの動詞の組み合わせが同じ

[29] 仁田（1995：103-104）は「姿勢変化そのものに焦点を当てて理解するか、変化後の状態維持に力点を置

であり、異なるカテゴリーに分けることは不自然である。仁田（1995）が「付帯状態」の特徴とする「主節として表される事象の実現のされ方を限定・修飾する」という関係は、時間的関係が「継起」的であっても変わらない。つまり本研究の言うところの役割的関係は共通しており、時間的関係による「付帯状態」か「継起」かの違いは二次的なものであると言える。

また仁田（1995）の「付帯状態」には主体における結果状態だけでなく動作や心理的状態によるものなどの下位分類があるが、検討されていない場合もある。例えば「李先生は、気が向けば台所へ入って庖丁を**ふるう**」は「継起」の例（同：105）だが、主たる事象の限定・修飾という「付帯状態」らしい側面もあり、「継起」性以外にも記述すべき関係があるように思われる[30]。

5.3. 用例の分析

本節では、まず分類の基準となる文法的特徴を確認する（5.3.1）。そのうえで用例を＜意図的に準備された主体の結果状態＞を表す場合（5.3.2）と＜付随的な主体の結果状態＞を表す場合（5.3.3）に大きく分け、さらにそれぞれを下位分類する。

5.3.1. 分類の基準の確認

用例の分析では、まず、1.3.1 節で述べた、定形動詞のアスペクトによって主体の動作の先行性が前面化するか否かという観点に基づいて、用例を大きく二つのタイプに分ける。

次のように、姿勢変化動詞では、定形動詞のアスペクトによってシテと定形動詞が表す二つの出来事の間の時間的関係が異なる場合がある。例（3）（ア）の「立って」では、定形動詞が表す主たる出来事に対して、シテが表す動作の先行性が認められるのに対し、（イ）の「立って」では、動作の先行性は表現されていない。

（3）僕はなんとなく不安になって、洗面所まで行った。洗面所のドアは開けはなしになっていた。（ア）僕は戸口に立って、妻のうしろ姿を**眺めた**。（イ）彼女は青い無地のパジャマに着替え、鏡の前に立ってタオルで髪を**拭いていた**。（ねじま 123）

つまり、定形動詞のアスペクトが（a）完成相か（a’）継続相であるかが、主体の動作の先行

くか」で「付帯状態」「継起」のどちらにも解釈されるとし、「〈動きの取り掛かり方〉を表す副詞」や三つ以上の出来事の連鎖を「継起」と解釈される条件として挙げるが、定形動詞のアスペクトに比べると二次的な条件であろう。例えば「男は椅子に座って、目を閉じて音楽を**聞いていた**」は三つの出来事間の関係だが、継起的ではない。なお成田（1983）も同様に、副詞的用法と継起的用法の異なりを述べる一方で、副詞的用法は「継起的な意味も内包しているとみなすことができる（同：140-141）」、「「様態動詞」も継起的用法に用いられることがある（同：157、注 5）」と述べている。

[30] 例えば「台所に入って包丁を**ふるう**」の「入って」を姿勢変化動詞の「立って」に変えて「台所に立って包丁を**ふるう**」とすると、容易に「付帯状態（姿勢）」を移行することになるのではないかと思われるが、「立って」が「姿勢」を表すことのみが「付帯状態」という意味分類にとって重要とは思われない。そもそも「入って」が付帯状態的な意味をも表していると考える方が自然である。

性が前面化するか否かに対応している[31]。一方で、(b)(b')のように定形動詞のアスペクトが違っても(a)(a')ほど主体の動作の先行性が前面化するか否かが明確でない場合もある。

(a) 僕は戸口に立って、妻のうしろ姿を**眺めた**。　　[定形動詞＝完成相]
(a') 僕は戸口に立って、妻のうしろ姿を**眺めていた**。[定形動詞＝継続相]
(b) 僕はぽかんと口を開けて妻のうしろ姿を**眺めた**。　　[定形動詞＝完成相]
(b') 僕はぽかんと口を開けて妻のうしろ姿を**眺めていた**。[定形動詞＝継続相]

重要なのは次の二点である。第一に、どの場合でも、シテが表す<主体の変化結果としての状態>が主たる出来事と同時的に存在している。この特徴は多くの場合、姿勢変化動詞というタイプに共通する[32]。第二に、(a)でシテが表す動作の先行性が前面化するのは、その動作によって生じる結果状態が主たる出来事のために意図的に準備されるという関係があるからである。一方、(b)の「(ぽかんと)口を開けて」は、主たる出来事のために準備されたものであるとは考えにくい。つまり(a)と(b)は主体の結果状態が主たる出来事のために準備されたものかどうかで異なる。このような意味関係の異なりに基づいて、意図的に準備された主体の結果状態を表す場合(5.3.2)と付随的な主体の結果状態を表す場合(5.3.3)を分ける。

以下、より詳しく分析を行なうための、姿勢変化動詞および位置変化動詞の下位分類を示す。自動詞には「中腰になる」のような[姿勢を表す状態名詞のニ格＋なる]の場合も含める[33]。それぞれのタイプが5.3.2節以降の分析のどこで主に扱われるかも示す。

[姿勢変化動詞]

○自動詞

くっつき先のニ格名詞をとるもの(5.3.2(A)、5.3.2(B))

起きる、起き上がる、立つ、立ち上がる、立ち止まる、座る、屈む、しゃがむ、ひざまずく、正座する、うずくまる、寝る、寝ころぶ、たたずむ、立ちつくす、へたりこむ、這いつくばる、倒れる、乗る、のぼる、もたれる、よりかかる、つかまる、すがる、しがみつく、横(棒立ち、つま先立ち、仁王立ち、中腰、立て膝、四つん這い、あお向け、うつぶせ、大の字、馬乗り)になる　など

くっつき先のニ格名詞をとらないもの(5.3.2(A)、5.3.3)

ふりかえる、ふりむく、うつむく、うなだれる、前のめり(猫背)になる　など

○再帰構造(身体部分を表す名詞＋主体動作客体変化動詞)

くっつき先のニ格名詞をとるもの(5.3.2(A)、5.3.2(B)、5.3.3)

体幹：腰を下ろす(かける)、身(体)を起こす、身(腰)を屈める、尻をのせる　など

[31] これは、第4章で分析した主体動作客体変化動詞の場合と同様のふるまいである。
[32] 「彼は一度立って、そのあとは**座っていた**」のように同時に存在しえない結果状態が並列される場合もあるが、これについては5.3.2節(D)で触れる。
[33] 「あぐらをかく、尻餅をつく、頬杖をつく、腕組み(を)する」などもあるが、これらも同様に扱う。

四肢：手を入れる（おく、のせる）、肘をつく、膝をつく、足をかける（投げ出す）　など
頭部：額（おでこ）をくっつける、顔をおしあてる、頬を寄せる、口（唇）をつける　など

くっつき先のニ格名詞をとらないもの（5.3.2（A）、5.3.3）

体幹：身を乗り出す、体を縮める、背中（腰）を丸める、背筋（腰）を伸ばす　腰を抜かす　など
四肢：足（腕）を組む、足（腕、指）をそろえる、足（腕、指）を曲げる、肩を落とす（すぼめる、すくめる）、膝をかかえる、脇をしめる、手をあわせる、手（指）をひらく　など
頭部：顔をしかめる（伏せる、上げる）、眉を寄せる（ひそめる）、目を開ける（閉じる、伏せる、吊り上げる、細める）、口を開ける（閉める、すぼめる、尖らせる）、頬をゆるめる（ひきしめる）、首を傾げる、あごを突き出す、舌を出す、唇を結ぶ、歯をむき出す　など

［位置変化動詞］（5.3.2（C））

行く、来る、帰る、戻る、引き返す、入る、出る、寄る、着く、回る、移る、上がる、下りる　など

姿勢変化動詞（自動詞・再帰構造）を、くっつき先のニ格名詞の有無によって分けるのは、シテがニ格名詞をとるか否かが、シテが表す役割的関係における意味の分化に関わるからであり、またこの特徴が位置変化動詞との共通性を示すからである。再帰構造を身体の部分（体幹・四肢・頭部）で分けるのもバリエーションをとらえるためである。

自動詞は「立ちつくす、へたりこむ、倒れる」「うつむく、うなだれる」のようなものを除いて、意図的に準備された主体の結果状態を表す場合が多い。再帰構造は「腰を下ろす、身を起こす」など自動詞の「座る、起き上がる」に相当するものを除いて、付随的な主体の結果状態を表す場合が多い。しかし、シテのタイプのみで分析できるわけではなく、定形動詞が表す出来事との関係を考慮する必要がある。例えば、シテが意志的な姿勢変化を表す自動詞であっても「男は壁によりかかって**死んでいた**」のように、定形動詞が非意志的な出来事を表す場合には、シテが意図的に準備された結果状態を表すわけではない。また再帰構造でも「腰を曲げて、湿布を**貼っていた**」のように意図的に準備された結果状態を表すことがある。このような場合については5.3.2節（D）で触れる。

5.3.2.　シテが意図的に準備された主体の結果状態を表す場合

本節では、シテが意図的に準備された主体の結果状態を表す場合を、次のように下位分類して記述する。以下では、主たる出来事を実現するために意図的に準備される主体の結果状態としての姿勢や場所を、簡略化して［姿勢］［場所］と表記する。同じ姿勢変化動詞でも（A）と（B）を分けるのは、（B）がニ格名詞をともなって動作の［場所］をも表し、（C）の位置変化動詞の場合と連続するからである。

（A）姿勢変化動詞による［姿勢］　　：彼は座って洗濯物を**畳んでいた**。
（B）姿勢変化動詞による［姿勢と場所］：彼は縁側に座って洗濯物を**畳んでいた**。
（C）位置変化動詞による［場所］　　：彼は縁側に出て洗濯物を**畳んでいた**。

なお、定形動詞が継続相である場合を主に分析するが、継続な動作を表す場合（動作継続）と継続的な結果状態を表す（結果継続）の場合とがある。以下では、用例の多かった動作継続の用例をまず挙げる。結果継続の場合は 5.3.2 節（D）で触れる。

［A　姿勢変化動詞がニ格名詞をともなわないで［姿勢］を表す場合］

次のような場合、シテは主たる出来事を実現させるために必要であるか、効果的に行なうために意図的にとられる［姿勢］を最も単純に表す。効果的であるというのは、必ずしそうしなければ主たる出来事が実現できないということではなく（例えば屈まずに靴紐をかけることもできるし、身を起こさずにこちらを見ることもできる)、ある姿勢をとったほうが動作の対象に近づいたりすることで動作がしやすいということである。なお例（4）～（6）の動詞はニ格名詞をともなえば［場所］を表すことができる。

(4) リツ子も気分がよいのかおき上って窓からしきりに手を**ふっている**。(リツ子 023)
(5) 成瀬は屈んでワークブーツの靴紐を丁寧に**かけている**。(顔に降 151)
(6) 森のなかの小さな草地にねころがっていた学生が身を起してこちらを**見ていた**。(煙草 001)
(7) 沼田は馬車が動き出すと、ふりむいて、自分を追いかけてくるクロを**見つめていた**。(深い河 184)

［B　姿勢変化動詞がニ格名詞をともなって［姿勢］と［場所］を表す場合］

次のような場合、姿勢変化動詞がくっつき先のニ格名詞をともなって、全体として［場所］を表す。すなわち、主たる出来事は、主体がある場所である姿勢をとった状態で行なわれる。特徴は、シテが「座る（例 8、9)、立つ（例 10)、寝る（例 11)」や、それに意味上類似する「腰を下ろす（かける)、横になる」といった、主体の身体全体に関わる基本的な姿勢を表す動詞であり、かつ、ニ格名詞が例（8）～（10）のように一定の空間的な広がりを持つモノであるか、例(11)のように形式名詞によって空間化されたモノであることである。

(8) 釣りの男は風のこない二段目の堤防にすわってのんびり煙草を**ふかしていた**。(岳物語 009、例 1 再掲)
(9) 誰もいない美術館の横のベンチに腰をおろして、田中は晩飯のかわりにハムをはさんだパンを**齧っていた**。(留学 022)
(10) 渡海千造は、息子の博正と一緒に千歳空港のロビーに立って、平八郎たち一行を**待っていた**。(優駿 169)
(11) 公平は波子に言われたとおり、座席の下に這いつくばって、両手で頭を**隠していた**。(赤い月 191)

シテが［場所］をも表すと言える文法的基準は、［ニ格名詞＋シテ］の部分をデ格名詞で言い換えられることである。デ格名詞と動詞（シテ）による表現の違いは、デ格名詞の場合、

主体がその場所にいることが動作の結果として示されるわけではないことである。姿勢変化動詞が省かれるので、当然、［姿勢］の側面も表されない。

（8’）釣りの男は風のこない二段目の堤防でのんびり**煙草をふかしていた**。
（9’）誰もいない美術館の横のベンチで、田中は晩飯のかわりにハムをはさんだパンを**齧っていた**。
（10’）渡海千造は、息子の博正と一緒に千歳空港のロビーで、平八郎たち一行を**待っていた**。
（11’）公平は波子に言われたとおり、座席の下で、両手で頭を**隠していた**。

次の場合はデ格ではなくカラ格名詞のほうが自然である。カラ格名詞は方向性のある動作の起点を表すが、主体が存在して主たる出来事が実現する場所である点ではデ格名詞と同じである。

（12）ふと気づくと、いつのまに来ていたのか、平八郎が横に坐って（横から）、多田の手にしている手紙に視線を**注いでいた**。（優駿 181）

ただし、くっつき先のニ格名詞があってもデ格名詞では言い換えにくい場合がある。従って、ニ格名詞があれば必ず［場所］を表すというわけではない。デ格名詞で言い換えにくいのは、ニ格名詞が、空間的な広がりのない具体物を表す場合である[34]。このとき、ニ格名詞が表す具体物は、出来事全体をとりまく空間ではなく、ある姿勢をとる際の支え、あるいは「よりどころ」である。例（15）の「もたれる」や「よりかかる（よる）、つかまる、すがる（すがりつく）、はりつく」などの動詞は常にそのようなニ格名詞とともに用いられる。

（13）耕作は、山の上の石に腰をおろして（*山の上の石で）、あたりを**見まわしていた**。（続泥流 008）
（14）よろしく頼んで、離れに戻ると、章次は畳に寝そべって（*畳で）写生帖を**めくっていた**。（白夜を 171）
（15）友子はけいこ着になっていたが、踊ってはいなかった。バアにもたれて（*バアで）、レコオドを**聞いていた**。（舞姫 004）

［C　位置変化動詞がニ格名詞をともなって［場所］を表す場合］

[34] 「いす、ベンチ、テーブル、デスク、ベッド、こたつ」などの人がその上で活動することを前提とする器具の場合はデ格名詞への言い換えができ、［場所］を表すと言える場合が多い。
・岳の部屋にそれとないそぶりで行ってみると、彼はベッドに寝ころがって（ベッドで）、やはり思ったとおり釣りの本を**読んでいた**。（岳物語 006）
・彼女は眠らずに台所のテーブルに座って（台所のテーブルで）僕を**待っていた**。（ねじま 119）
また、次のようにカラ格名詞で言い換えられる場合があるが、この場合は主体が存在し、主たる出来事が実現する場所ではなく、方向性のある動作の起点・経路となる具体物である。
・太郎は茶の間の先の海の見える川ふちの手すりに寄って（茶の間の先の海の見える川ふちの手すりから）、何かしきりに潮の中へ**投げこんでいた**。（リツ子 009）
・禮子は木戸にはりついて（木戸から）、なかを**うかがっている**。（あ・う 030）

姿勢変化動詞が［場所］を表す場合を取り出すことで、同じ主体変化動詞のうち、「行く、来る、出る、入る、着く」といった位置変化動詞も同様の意味を表すことが記述できる。姿勢変化動詞と位置変化動詞は「主体が自らを変化させるべく行なう能動的・意志的動作（工藤 1995：83)」を表す点で共通している。すでに確認したように、奥田（1989：21-22）は「移動性の動作を表す動詞」が「主要な動作の実現する空間」を表すことを指摘しているが、デ格名詞による言い換えが、その文法的な条件であると言える。

（16）あの爆発の日、おどは清水の沢の飲み友だちの所に行って（清水の沢の飲み友だちの所で）酒を**飲んでいた**。（続泥流 002）

（17）シゲ子は裏手を流れる溝川の洗い場に出て（裏手を流れる溝川の洗い場で）、暗くなったのに洗濯物を**漱いでいた**。（黒い雨 031）

（18）我々はバス停に着いて（バス停で）、バスを**待っていた**。（ねじま 131）

ただし姿勢変化動詞と位置変化動詞は次の点で異なる。姿勢変化動詞は例（4）～（7）のようにニ格名詞なしで［姿勢］を表すことができるが、位置変化動詞は文脈上省略してもよい場合や「入って来て」「出て行って」のような方向づけがない場合を除けば、基本的にニ格名詞を省くことができない。また姿勢変化動詞は（A）（A’）のように（シテはそのままで）ニ格名詞をデ格名詞にしてもよい。（A）のニ格名詞はシテのみと関係するが、（A’）のデ格名詞は二つの動詞と関係する。一方位置変化動詞は（B’）のようなデ格名詞での言い換えはできない[35]。

（A）［縁側に座って］洗濯物を**たたんでいた**。　［くっつき先－姿勢］－**主要な動作**
（A’）縁側で［座って洗濯物を**たたんでいた**］。　場所－［姿勢－**主要な動作**］
（B）［縁側に出て］洗濯物を**たたんでいた**。
（B’）*縁側で出て洗濯物を**たたんでいた**。

また姿勢変化動詞と組み合わさるニ格名詞が表すのは基本的にくっつき先としてのモノであって、シテが［場所］を表すと言っても、その場所は人がそこに立ったり座ったりして存在する相対的に狭い空間である。この点で「日本、村、学校」といった典型的な空間名詞と結びつく位置変化動詞とは異なる[36]。

---

[35] 「乗る、のぼる、あがる、落ちる」といった動詞はくっつき先のニ格名詞をとる点では姿勢変化動詞だが、姿勢（身体の向き・様態）を表すのではなくニ格名詞なしでは用いにくい点では位置変化動詞らしい。
・玄海丸の屋根に匍い上って、一人、白昼の海の青をむさぼるように**見つめている**。（リツ子そ 004）
また「隠れる」はニ格名詞がくっつき先ではなくゆくさきを表す点では位置変化動詞だが、「物置に（物置で）隠れて煙草を**吸っていた**」のようにニ格名詞をデ格名詞にしてもよい。しかしこれは姿勢ではなく態度的な意味が含まれているからであろう。

[36] 姿勢変化動詞が典型的な場所を表すニ格名詞をともなう場合も見られたが、多分に修辞的な例である。
・富岡は、雨の街に立って、並樹の美しい、昔の東宮御所の方を**眺めていた**。（浮雲 024）

なお、上記はニ格（へ格）名詞をともなう位置変化動詞についての分析であるが、複数主体の集合様態を表す「集まる、固まる、別れる」や移動の経路を表すヲ格名詞をともなう「通る、降りる、越える」など、その他のタイプの位置変化動詞による場合もある。位置変化動詞を含めた、移動性の動作を表す動作の総合的記述は今後の課題である[37]。

［D　その他注意すべき場合］

ここまで典型的なタイプを中心に取り上げてきた。ここでは、次節の付随的な身体の結果状態の場合の記述に先立って、中間的なものも含め注意すべき場合を挙げる。

［①定形動詞が継続的な結果状態（結果継続）を表す場合］

ここまで、定形動詞が主たる出来事として継続的な動作（動作継続）を表す場合を見てきたが、継続的な結果状態（結果継続）を表す場合も、次のような例は動作継続の場合と同様に分析できる。例（19）（20）では二つの動詞がいずれも姿勢変化を表しているが、シテは主たる出来事としての姿勢をとるための副次的な［姿勢］を表していると言える。単なる同種の出来事の並列ではない。例（21）は主たる出来事としての姿勢をとる［場所］を、ニ格名詞をともなった位置変化動詞のシテが表している。

（19）なるほど少女は起き上がって、畳の上に**坐っていた**。（夏草下 013）
（20）同じころ、長田は新橋駅のベンチに座って**腕組みしていた**。（眠り猫 134）
（21）ところが、自分は父の在所の村にきて、こうして湯宿の古畳に**寝そべっている**。（白夜を 193）

例（22）（23）のように二つの同種の姿勢変化が並列される場合は、シテが表す主体の結果状態が副次的なものとして主たる出来事と同時的に存在しているわけではない点で、これまで記述した場合と異なる。しかし姿勢の対比（あるいは切り替わり）を表す表現や文脈の支えがなければ解釈しにくく、また収集した範囲ではこのような例が見られなかった点で、特別なタイプであるように思われる。例（24）の二つの位置変化の並列の場合も同様である。

（22）私は最初は正座して、そのうち足が痛くなったので、あとはあぐらを**かいていた**。
（23）会議中、彼は発言するために一度立ち上がって、今はずっと**座っている**。
（24）彼は昨日京都に行って、今日は大阪に**戻っていた**。

［②主体の動作の先行性が明確でなく、意図的に準備された結果状態とは言いにくい場合］

5.3.1 節で述べたように、シテが意図的に準備された結果状態を表す場合は、定形動詞が完成相であれば主体の動作の先行性が前面化される。ここまでの例でもこのことが確認できる。

[37] 移動動詞を分析した李（2009）は複文を対象とした第 4 章でシテによる実例を整理して記述している。

(6”) 森のなかの小さな草地にねころがっていた学生が身を起してこちらを**見た**。
(8”) 釣りの男は風のない二段目の堤防にすわってのんびり煙草を**ふかした**。
(16’) あの爆発の日、おどは清水の沢の飲み友だちの所に行って酒を**飲んだ**。

シテが姿勢変化動詞である例（3）（ア）（イ）同様、シテが位置変化動詞である例（25）でも一連の文脈の中で定形動詞のアスペクトによる出来事間の時間的関係の表し分けが確認できる。

(25) 少年の一人がその路地の端の溝のところへ行って、そこを**覗き込んでいた**が、
「あった！　これだろう」
他の二人の少年もすぐその方へ移動して行った。そして、そこを覗き込んでいたが、小柄の少年が、
「ここにあらあ、ここにある、ある！」
と言った。洪作も清吉さんと一緒にそこへ行って、溝を**覗き込んだ**。（夏草冬 046）

しかし実例には、必ずしもこのような違いが明確でない場合がある。いずれもシテが表す結果状態の意図的準備性が、動作の先行性とともに薄れていることを確認しておく。

第一に、定形動詞がヒトによる非意志的な出来事（動作・結果状態）を表す場合がある。

(26) が、たちまち空襲のサイレンが追いかけるように、せわしく鳴った。リツ子の母が起きだしてぶるぶる**ふるえている**。（リツ子 001）
(27) ふと気づくと、居間の気配がひっそりとしている。鉛筆の音も、ストーブを突つく音もしない。頭をもたげて板戸の隙からそっと見ると、耕作がちゃぶ台にうつ伏せになって**眠っていた**。拓一はむっくりと起き上り、そそくさとシャツを着、ズボンをはくと、そっと板戸をあけた。耕作は歴史の教科書の年代表の頁に右頬をあて、眠っている。（泥流地 158）

この場合、そもそも主たる出来事が非意志的に行なわれるものであり、シテが表す主体の結果状態がそのために意図的に準備されたものとは考えられない。その結果、定形動詞を完成相にした場合は、単に事実の推移として出来事の連続を述べているか、主たる出来事が意志的に行なわれるとしか解釈できない[38]。ただし例（28）のような実例もあり、定形動詞が完成相の場合が非文法的であるというわけではない)。

[38] 例（26’）（27’）の不自然さは主語が「が」で標示されていることや、定形動詞が非過去形（スル）であることに起因する可能性もある。しかし、次のように主語の標示を「は」にし、定形動詞を過去形（シタ）に変えてみても、「単に事実の推移として動作の連続を述べているか、主たる動作が意志的に行なわれるとしか解釈できない」という点は同じであろう。
・リツ子の母は起きだしてぶるぶる**ふるえた**。
・耕作はちゃぶ台にうつ伏せになって**眠った**。

(26') リツ子の母が起きだしてぶるぶる**ふるえる**。

(27') 耕作がちゃぶ台にうつ伏せになって**眠った**。

(28) 水田は若い女と温泉宿に行って、そこで**頓死した**。(山の音 086)

第二に、「たたずむ、立ちつくす、突っ立つ、へたり込む、棒立ち（仁王立ち）になる」などの動詞は単なる姿勢のみならず、心理・態度的なニュアンスを含む。また「倒れる、尻餅をつく」「はまる、落ちる、沈む」などは意志的な姿勢（位置）変化ではない。これらの場合、シテの側が意志的とは言い難い出来事を表していることから、主体の結果状態の意図的準備性から動作の先行性はとらえられない。この点で、次節で扱う付随的な主体の結果状態の場合と近いのだが、異なるのは例（29）（30）のようにニ格名詞をともなって［場所］をも表しうる点である。

(29) 多田もその場に立ちつくして、博正が仔馬に投げかけている言葉を**聞いていた**。(優駿 172)

(30) サチはホノルルの日本領事館からその知らせを受け、そのまま床に座り込んでしまった。頭の中ががらんとして、何を考えることもできなかった。ただそこにへたり込んで、目の前の壁の一点を**見つめていた**。(ハナレ 012)

(31) 相生橋北岸の空鞘町まで行くと、瓦の破片の積み重なっているなかで、二人の女が尻餅をついてしくしく**泣いていた**。(黒い雨 032)

第三に「立つ」という動詞は、「立ち上がる」などと違って姿勢変化を積極的に表しておらず、単に主体のある場所での存在を表すとしか言えない場合が多い。

(32) 一つはたしか四年生ぐらいの時だったと思うが、掃除当番で四五人の女生徒が放課後に残っていた。バケツや棒雑巾をしまって帰りかかった時のことである。そこにどうして又そんなことが始められていたのかも憶えていない。ともかく同級生の男の子が五六人教壇に立ってズボンを下の方に**おし下げている**。(朱を奪 147)

［③主体の身体部分が主たる出来事に加わる対象である場合］

次節で記述する、付随的な主体の結果状態を表す場合は、多くの場合、シテが再帰構造であるが、再帰構造でも意図的に準備された主体の結果状態を表す場合がある。

まず、ヲ格名詞が体幹（腰、身、体など）を表し、「腰を下ろす、体を乗り出す」といった再帰構造で用いられる場合は、身体の部分というより身体全体に関わって［姿勢］を表す。このような場合についてはすでに触れた（例 6、7、9、13）。

次に、ヲ格名詞が四肢（腕、足など）、頭部（顔、目、口など）を表す場合は、出来事を行なう際の身体の部分的な特徴を表す。主体の身体全体に関わらないという点では「姿勢」と

は言いにくいが、重要であるのは、次のように意図的に準備された結果状態を表す場合があることである。収集した限りでは定形動詞が継続相である実例は見られず、例（33）（34）は作例、例（35）は定形動詞が完成相の例である。

（33）彼は台に尻をのせて、辛そうに**さすっていた**。
（34）彼は指で目を開いて、目薬を**さしていた**。
（35）なおもなにか話しかけようとしたとき、男が腕を振りあげて、花の頬を**はたいた**。（私の男 329）

これらの文では、「身体部分を表すヲ格名詞が主たる出来事に加わっていく対象でもある」という特徴がある。この場合にシテが表す役割的意味を＜主たる出来事に加わる対象としての身体部分の様態＞としておく。このことは「尻をさする」「目に目薬をさす」「腕ではたく」という身体部分を表す名詞と定形動詞との格関係によっても確認できる。また定形動詞が完成相であればシテが表す動作の先行性も明らかである。ヲ格名詞が主体の身体部分を表すと言っても、動作の客体としての面が強く、例（36）～（38）のように、主体の身体部分ではないモノを客体とする場合と近い。

（36）彼は台に茶碗をのせて、**さすっていた**。
（37）彼は指で猫の目を開いて、目薬を**さしていた**。
（38）男が新聞紙を振りあげて、花の頬を**はたいた**。

次の例（39）では、シテが表す動作の客体（指）が直接ヲ格やニ格の資格で主たる出来事に関わるわけではないが、その部分（爪）が対象として主たる出来事に加わっている。つまり、例（33）～（35）、（39）は身体部分の全部または一部が対象として主たる出来事に関わる場合としてまとめられる。

（39）花子は指を曲げて爪にマニキュアを**塗っていた**。

次の例（40）～（42）でも「白い腕で拭く」「(そむけた）目で見つめる」「(とがらした）口で云う」という関係が想定できる。シテに組み合わさる身体部分を表すヲ格名詞に、定形動詞との間の格関係が想定できるという点では、例（33）～（35）と共通している。しかし、規定語なしで「腕で拭く」「目で見つめる」「口で云う」とは普通言えないことから、「腕ではたく」と言える例（35）と違って、主たる出来事の実現に加わる対象（道具）らしいとは言えない。主体の内的な側面についての修飾をともなえば付随的な主体の結果状態を表す場合につながる、中間的な場合であろう（5.3.3（B）の例 63、64 も参照）。

（40）会社の部屋では、夏子が白い腕を出して、窓ガラスを**拭いていた**。（山の音 028）

（41）仏壇に並べられた三枚の写真から目をそむけて、僕は壁にくっきりと映った僕らの影**を見つめていた**。（遺影 180）

（42）一ツ細目の芋を取り出した。お箸のままフウフウ息をふきかけると、太郎も下で口をとがらしてフウフウと**云っている**。（リツ子 021）

5.3.3.　シテが付随的な主体の結果状態を表す場合

以下、シテが付随的な主体の結果状態を表す場合を分析する。シテが単に身体部分の結果状態を表すのみならず、身体部分の様態を通じて、主たる出来事にともなう主体の内的（態度・心理・生理的）な側面をも表す場合が出てくることから、（A）シテが＜身体部分の単なる結果状態＞を表す場合と（B）シテが＜主体の内的側面の現れとしての身体部分の様態＞を表す場合に下位分類して記述する。

［A　シテが身体部分の単なる結果状態を表す場合］

例（43）は体幹、例（44）は四肢、例（45）は頭部における結果状態が表現されている例である。体幹や四肢と違い、顔やその部分の場合は「姿勢」ではなく「表情」という方が適切かもしれない。再帰構造だけでなく例（46）のような「うつむく（うなだれる）」や「前のめり（猫背）になる」などの自動詞の場合もある。

（43）「お店にいると、縫う暇がなくて……」

言いながら福子は背すじを伸ばして針を**運んでいた**。（続泥流 004）

（44）窓際の席で頬杖をついて、ひろがる氷の色の海を**みつめていた**。（私の男 194）

（45）男は目を伏せて煙草を**吸っていた**。（離宮の 003、例 2 再掲）

（46）清海は手に持っていたむきだしの札束を、多田に押しつけた。「これ、星くんから。『清海にエロいことしたら、亀尾川のモクズにするって言っとけ』だって」

終わった、と多田は思った。住民たちはうつむいて、タワシで石を**こすっている**。（まほろ 190）

定形動詞が動作継続の場合だけでなく結果継続を表す場合も挙げておく。例（47）（48）は主たる出来事としての「姿勢」に対して、シテがその部分における副次的な結果状態を表している。例（49）（50）では二つの動詞が、一人の主体に共存する、二つの身体部分における結果状態を表している。

（47）洪作は雨に叩かれたまま、両膝を両手でかかえて、飛込台の上に**うずくまっていた**。（夏草冬 040）

（48）子供靴の片方を手に出てきた若い女をみて、仙吉は肝をつぶした。女はまり奴だった。

「水田子爵」

まり奴も口をあけて**立っていた**。（あ・う 031）

（49）一番端の席で佐木多加志が腕組みをして目を**閉じていた**。（優駿 182）

(50) みなが殊勝に、目をとじて手を**合わせている**。(橋づく 062)

シテがくっつき先のニ格名詞をともなう場合もある。しかしニ格名詞が表すは身体部分が接触している具体物であって、主たる出来事が実現する［場所］(5.3.2（B)) ではない。従って、デ格名詞による言い換えはできない。例 (51) は体幹、例 (52) (53) は四肢、例 (54) は頭部の例である。

(51) 鉱山斑の瀬谷という老人は、河内からずっと女連の自動車の方へばかり乗り込んで、篠井春子のそばへ腰をかける習慣になっていた。わざと春子の肩や膝頭に軀をくっつけて (*肩や膝頭で)、汗のにちゃつくのもかまわずに、図々しくみだらな**話をしている**。(浮雲 002)

(52) 女は手すりに肘を置いて (*手すりで) 海を**見ていた。**(すいば 185)

(53) 池はやや日本風で、小さい中の島の燈籠に白人兵が片足をかけて (*小さい中の島の燈籠で)、娼婦と**たわむれていた**。(山の音 020)

(54) 背中の老婆は、女の肩に頬をつけて (*女の肩で) 目を**閉じていた**。(白夜を 168)

姿勢変化動詞は、工藤 (1995) が示すように、基本的には主体による意志的な動作としての変化を表すものである。付随的な主体の結果状態と言っても全く非意志的にもたらされるというわけではない。しかし定形動詞が表す出来事との関係から見れば、［姿勢］の場合 (5.3.2（A）(B)) や、身体部分が定形動詞の表す出来事に対象として関わる場合 (5.3.2（D)) と異なって、主たる出来事に対して結果状態を意図的に準備するという関係ははっきりしない。このことは 5.3.1 節で示したように、定形動詞のアスペクトを完成相にしても動作の先行性が明らかでないことから確認できる。先行性があるとしても、どのような意図で結果状態を準備する必要があるのかは明らかではない[39]。

(43') 言いながら福子は背すじを伸ばして針を**運んだ**。

(44') 窓際の席で頬杖をついて、ひろがる氷の色の海を**みつめた**。

(45') 男は目を伏せて煙草を**吸った**。

(46') 住民たちはうつむいて、タワシで石を**こする**。

(51') わざと春子の肩や膝頭に軀をくっつけて、図々しくみだらな**話をする**。

(52') 女は手すりに肘を置いて海を**見た**。

(53') 小さい中の島の燈籠に白人兵が片足をかけて、娼婦と**たわむれた**。

(54') 背中の老婆は、女の肩に頬をつけて目を**閉じた**。

[39] ただしシテが表す動作に様態の修飾がある場合は動作性が明らかである (定形動詞が完成相の例)。
・薄い唇をゆっくり開いて、しゃがれた声で**つぶやく**。(私の男 065)
・千造の問いに、久美子はぺろっと舌を出して恥しそうに**笑った**。(優駿 056)

［B　シテが主体の内的側面の現れとしての身体部分の様態を表す場合］

実例では、例（55）～（60）のように、身体部分の結果状態が主たる出来事にともなう内的（態度・心理・生理的）な側面の現われとなっている場合が多い。このことは修飾語や文脈によって示される。「胸を張る、腰を抜かす、肩を落とす（すぼめる）、手を合わせる、頭を下げる、舌を出す」のようにフレーズとして心理・態度的な意味を持つ場合もある。このような場合では、シテの役割的意味は具体的なものから抽象的なものに移行しつつある。

（55）父親の姿はベンチになかった。怪訝に思って周囲を見回すと、宝くじ売り場にいた。こどもの目には壁のように大きく見える背中を丸めて、くじを**買っていた**。声をかけるとぎょっとした顔で振り向いて、それから、照れくさそうに笑った。（はずれ 045）

（56）誰もが、重い空気を背負わされたように猫背になって、その重みに耐えているような目を、膝の上に組んだ両手や足許の床に**落していた。**（白夜を 173）

（57）暁はがっかりしたように肩を落として、離れていく花の背中をじっと**見送っていた**。（私の男 220）

（58）ドアの外では、王が、どうか自分に免じて、この部屋だけは襲わないでくれと、両手を合わせて満人たちに**頼んでいる**。（赤い月 169）

（59）何を言うべきかを思い出そうとして、益垣先生は眉根をよせて、じっと**立っている。**（泥流地 167）

（60）タケはカウンターの左隅で、口を尖らせてCDのケースを**弄んでいる**。ときどき、腹に据えかえねたように溜息をつく。（猫の息 003）

これらに比べて、（A）シテが身体部分の単なる結果状態を表す例（43）～（50）のように修飾や文脈がない場合は、内的側面の表現性は相対的に薄いかもしれない。しかしその場合でも、心理的なものの含みが全くないとは言えない。例えば例（43）「背すじを伸ばして」の生真面目さ、例（46）「うつむいて」の無関心さ（のよそおい）、例（48）「口をあけて」の驚き、例（50）「目を閉じて」の真剣さのように。特に顔やその部分の場合、テクストの流れのなかで主体の内面的な含みが読み取れない例はほとんどないように思われる。

［C　その他注意すべき場合］

ここまでの例（43）～（60）は定形動詞が意志的な出来事を表す場合だが、定形動詞が非意志的な出来事を表していれば、当然、それに付随する結果状態を表す。

（61）胸の上に片腕をのせて妻は**眠っていた**。（深い河 005）

（62）川添が軽く顔を傾けて、首を**吊っていた。**（顔に降 195）

身体部分の結果状態が付随的なものである場合は、身体部分が対象として主たる出来事関っていくという関係も考えにくい。次のような例はデ格名詞で言い換えることができるが、

このような場合、身体部分は出来事（動作）に加わる対象としての道具とは言えない。規定語による修飾をともなった様態規定のデ格名詞であろう。

(63) 腐野さんはなぜだか、哀れむように目をほそめて（哀れむようにほそめた目で）僕を**見上げていた**のだった。(私の男 159)

(64) 隣に坐っている増矢武志は、口をかすかにあけて（かすかにあけた口で）、軽いいびきを**かいていた**。(優駿 168)

ここまでの例では、まだ二つの外的で目に見える出来事どうしの関係が認められるが、一歩進めて、定形動詞が主体の感情や思考を表す次のような場合は、もはや二つの具体的で外的な出来事間の関係はとらえられない。奥田（1989）は、このように定形動詞が表す心理活動の側面としてシテが表情やみぶりを差し出す場合を「動作の特徴づけ」のなかで扱っている。

(65) 着いてみると、何のことはない。リツ子は久しぶりに太郎と私を見て有頂天に喜んだが、
「どうかした？　電報など」
と云うと、不審そうに眼を丸くして**驚いている。**(リツ子 008)

(66) 片頬をゆがませてなにごとか**考えていた**。(私の男 237)

このほか「顔（頬、耳）を赤らめる、目を濁らせる（曇らせる）、まぶたを腫らす、瞳をうるませる」などの再帰構造や、「青ざめる、赤面する」などの自動詞には、もはや主体の意志的な動作の側面はない。当然、シテが意図的に準備された結果状態を表すことはありえない。純粋に内的な側面の反映としての非意志的な変化であり、「赤くなる、濁る、曇る、腫れる、うるむ」のような、モノの非意志的な変化を表す主体変化動詞と近づいているだろう。

5.4.　本章のまとめと考察

ここまでの分析を整理したうえで（5.4.1）、シテの機能面を考察する（5.4.2）。

5.4.1.　分析の整理

5.3 節で取り出したタイプと、その特徴と例文を整理する。番号は本文の節番号と対応させる。

	構文的特徴・動詞のタイプ	例文・動詞の例
5.3.2.　意図的に準備された主体の結果状態	定形動詞のアスペクトによって動作の先行性が前面化する	・彼は畳に座って本を**読んでいた**。[継続相] 彼は畳に座って本を**読んだ**。　[完成相]
（A）主たる出来事が実現	動詞：姿勢変化動詞	立つ、座る（腰を下ろす）、もたれる、ふりむく

する際の姿勢	①ニ格がなくてもよい ②ニ格→デ格は不可	・彼は座って本を**読んでいた**。 ・彼は畳に座って（*畳で）本を**読んでいた**。
（B）主たる出来事が実現する際の姿勢・場所	動詞：ニ格をとる姿勢変化動詞 ①ニ格があり、デ格でも可 ②ニ格→デ格も可	立つ、座る（腰を下ろす）、寝る ・彼は縁側に座って（縁側で）本を**読んでいた**。 ・彼は縁側で座って本を**読んでいた**。
（C）主たる出来事が実現する際の場所	動詞：位置変化動詞 ①ニ格があり、デ格でも可 ②ニ格→デ格は不可	行く、来る、出る、入る、戻る、帰る ・彼は縁側に出て（縁側で）本を**読んでいた**。 ・彼は*縁側で出て本を**読んでいた**。
（D）主たる出来事に加わる対象としての身体部分の様態	動詞：姿勢変化動詞（再帰構造） ①身体部分＝主たる出来事の対象 ②主体の内的側面を表す修飾・文脈、フレーズ性なし	・彼は腰を曲げて（腰に）湿布を**貼っていた**。 ・彼は指を伸ばして（指で）窓を**こすっていた**。
5.3.3. 付随的な主体の結果状態	定形動詞のアスペクトによって動作の先行性が前面化しない	・彼は口を開けて本を**読んでいた**。［継続相］ 彼は口を開けて本を**読んだ**。　［完成相］
（A）身体部分の単なる結果状態	姿勢変化動詞（再帰構造が中心） ①身体部分≠主たる出来事の対象 ②主体の内的側面を表す修飾・文脈、フレーズ性なし	背を曲げる、腕を組む、口を開ける、うつむく ・彼は足を組んで本を**読んでいた**。 ・彼は口を開けて本を**読んでいた**。
（B）主体の内的側面の現れとしての身体部分の様態	姿勢変化動詞（再帰構造が中心） ①身体部分≠主たる出来事の対象 ②主体の内的側面を表す修飾・文脈、フレーズ性あり	胸を張る、肩を落とす、頬をゆがめる ・彼は肩を落として本を**読んでいた**。 ・彼は驚いたように口を開けて本を**読んでいた**。

上記のタイプ間の関係（共通点・相違点）をまとめると、次のようになる。

①5.3.2（A）（B）は、主たる出来事が実現する際の［姿勢］を表す点で共通。くっつき先のニ格名詞との結合の有無およびデ格名詞による言い換えの可否で異なる。

②5.3.2（B）（C）は、ニ格名詞との結合によって主たる出来事が実現する際の［場所］を表す点で共通。動詞のタイプの違いと連動して、ニ格名詞との結合は（B）の姿勢変化動詞では任意、（C）の位置変化動詞では基本的に必須である点で異なる。

③5.3.2（A）（B）（D）は、再帰構造が用いられる点で共通。ただし前者は「腰を下ろす、身を起こす」などの主体の身体全体に関わる基本的なものに限定される。

④5.3.2（D）と5.3.3（A）（B）は、再帰構造が用いられる点で共通。5.3.2（D）では身体部分は主たる出来事に加わる対象（の全部・一部）として定形動詞への格関係も考えられるが、5.3.3（A）（B）ではそうではない。

⑤5.3.3（B）は、フレーズ化や、修飾や文脈をともなうことで、外的な身体部分の結果状態が内的側面の表現にもなっている。それが相対的に明らかでない 5.3.3 の（A）は、中間的な場合である。

重要であるのは、同じ姿勢変化動詞でも、動詞の下位タイプや定形動詞との関係によって異なった意味が連続的に存在するということである。動詞のタイプと役割的関係における意味の対応が相対的に明確な場合もあるが、再帰構造が中心に用いられる 5.3.2（D）や 5.3.3 の各タイプの場合は、主たる出来事との関わりや、主体の内的側面を明らかにする修飾や文脈まで考慮しなければタイプを規定しがたい。

次に姿勢変化動詞と、第 4 章で分析したシテが主体動作客体変化動詞の場合との関係を述べる。

主体動作客体変化動詞は、基本的に＜意図的に準備された客体の結果状態＞を表し、定形動詞のアスペクトによってシテが表す動作の先行性が前面化する。この点で主体変化動詞である姿勢変化動詞が意図的に準備された主体の結果状態を表す場合（5.3.2）と共通する。

しかし、主体動作客体変化動詞では定形動詞のアスペクトによる違いが相対的に明らかであるのに対し、姿勢変化動詞では、付随的な結果状態を表すことで主体の動作の先行性が前面化しない場合（5.3.3）もあり、複雑である。また、姿勢変化動詞のうち再帰構造が用いられる場合は、主体動作客体変化動詞が用いられている点で共通する。「腰を下ろす」のような場合（5.3.2（A）（B））は典型的な再帰構造であるが、客体としてのモノへの働きかけに近い場合もある（5.3.2（D））。一方で「肩を落とす」のような付随的な結果状態の場合（5.3.3）では意図的準備性がない点で、意志的なモノへの働きかけを表す典型的な主体動作客体変化動詞の場合と異なる。

5.4.2.　シテの動詞述語としての機能

ここまでシテが姿勢変化動詞である場合について、意図的に準備された主体の結果状態を表す場合と、付随的な主体の結果状態を表す場合に大きく二つに分けつつ、意味の連続的な分化のあり方を中心に分析してきた。以下、一歩進めて、シテの動詞述語らしさという機能的観点から考察を加える。

まず意図的に準備された主体の結果状態を表す場合、アスペクトの異なりによって動作の先行性が認められる。定形動詞が継続相の場合、主体の動作の側面は背景化しているが、定形動詞が完成相であれば、動作の側面は前面化する。この時、動詞述語が本来表す、一時的で時間的展開性のある運動を表す点で、シテには動詞述語らしさが残っていると言える。

一方で、付随的な主体の結果状態の場合は、定形動詞が完成相であっても、動作の先行性、すなわち動詞述語が表す運動としての時間的展開ははっきりしない。一つの動作というより、もっぱら主たる出来事が実現する際の身体部分における結果状態を表すことで、シテの機能は述語から修飾語へと移行しつつあり、動詞らしさが薄れている。特に内的側面の現

れとしての身体部分の結果状態を表す場合は、出来事の意志性を薄れさせながら、具体的・外見的なものからの抽象化が進み、二つの出来事間の関係から、主たる出来事の心理的側面描写への移行過程にある。このような意味での状態規定的な修飾語的機能に限定すれば、シテの副詞化が進んでいるとも言えるだろう。

しかし一方で、姿勢変化動詞や位置変化動詞が［場所］を表す場合は、厳密な意味では修飾語（副詞）的であるとは言えない。「述語と主語（補語、修飾語）からなる事象全体をとりまく外的状況を表す（工藤 2002：111)」という状況語的機能をも持っているからである。

このような同一の文法形式の多機能性は、例えば次のようなデ格名詞の意味・機能のあり方を考えてみれば、全く不思議ではない。

・木で土に線を**引く**。　［意味：道具　機能：補語的］
・正座で／しかめっつらで話を**聞く**。［意味：様態　機能：修飾語的］
・庭で竹刀を**振る**。　［意味：場所　機能：状況語的］
・風邪で学校を**休む**。　［意味：原因　機能：状況語的］

シテと定形動詞との関係にも同じことが言える。本章で記述した姿勢変化動詞においては、一見、似たような意味（主体の身体の外見的様態）が表されているようであっても、その機能はデ格名詞と同様、多様である。また位置変化動詞の場合は、［場所］を表すという状況語意味・機能をとらえなければ、機能的な側面は記述しがたい。

・正座して／顔をしかめて話を**聞く**。［意味：姿勢　機能：修飾語的］
・庭に立って竹刀を**振る**。　［意味：姿勢・場所　機能：修飾語・状況語的］
・庭に出て竹刀を**振る**。　［意味：場所　機能：状況語的］

デ格名詞による表現と比較して、動詞（シテ）による表現の特質は次のような点である。

第一に、同じように「状態」を差し出しているようであっても、シテが表すのはあくまで変化の結果としての状態である。出来事間の時間的関係も、基本的には動詞述語としてのアスペクト性に基づいたものである。そうでなければデ格名詞の「正座で」「中腰で」に対して、「正座（を）して」「中腰になって」のように「して」や「なって」といった形式的な動詞を用いた表現の特性の把握は難しいだろう。

第二に、シテが動詞として他の従属的要素を従えるという構文論的性質によって、シテを含む部分全体が、主たる出来事に対しての副次的な意味・機能を示している点である。本節で［場所］を表すとした場合についても、シテが単独で表現しているのではなく、ニ格名詞との結合を通じた意味・機能であることに留意しておきたい。

第三に、文の任意的な成分としての修飾語・状況語的機能は、文の叙述を終えるのではなく続け、他の主要な述語に従属するという特性を持つ「中止形」であることを通じて生じる

ものである。言い換えれば、文末にあって文の叙述の中核になるという典型的な述語機能が、他の主要な述語に対して従属的な形式をとることで変容し、副次的な機能を持つということである。

第 6 章　シテが主体変化動詞の場合：装着動詞と所持動詞の分析

6.1.　はじめに

本章では、次のような場合を対象として分析する。

（a）彼はカッパを着て庭を**掃いていた。**　（b）彼はほうきを持って庭を**掃いていた**。
（c）彼はカッパを着て門の前に**立っていた**。（d）彼はほうきを持って門の前に**立っていた**。

以下、(a)（c）の「着て」のような動詞を＜装着動詞＞、(b)（d）の「持って」のような動詞を＜所持動詞＞とする。装着動詞には「履く、かぶる、羽織る、脱ぐ」といった動詞が、所持動詞には「抱える、背負う、握る」といった動詞が含まれる。これらはいずれもヲ格名詞で表されるモノを主体が身に着けることを表す他動詞である（所属する動詞の詳細については後述)。本章は、これらの動詞の使用を整理して記述し、装着動詞と所持動詞の共通点と相違点を明らかにすることを主眼とする。

装着・所持動詞は、従来の動詞の中止形の分析において、第 5 章で扱った「立つ、座る」などの姿勢変化動詞と類似したものとして（成田 1983)、あるいは同じタイプのバリエーションとして扱われている（仁田 1995「付帯状態」)。確かに、(a）～（d）は主たる出来事に対して、主体が衣服や具体物を身に着けていることが表現される点で共通している。

本研究でも先行研究での位置づけをふまえて、二つのタイプの動詞をまとめて記述するのだが、実例を詳しく観察してみると、共通点だけでなく、実際の文中での使用における異なりも観察される。定形動詞が継続相である用例には、次の（e）(f）のような例が装着動詞と所持動詞のそれぞれによく見られる。(a）～（d）の場合とは、二つの動詞が表す出来事間の関係が明確に異なっている。分析を先取りするかたちになるが、(e）では二つの動詞によって、一つの主体における二つの服装が並べ立てられている。(f）では、主たる動作が移動性のものであり、モノの所持だけでなく、モノの持ち運びが表現されている。

（e）彼はカッパを着て長靴を**履いていた**。
（f）彼はほうきを持って廊下を**歩いていた**。

二つの動詞のふるまいの異なりは、奥田（1989）ですでに示唆されているが、必ずしもそれぞれの動詞タイプが用いられる文の特徴が明示的に記述されているわけではない。そこで本章の分析では、主に定形動詞が表す出来事のタイプに注目して下位分類を行なう。そのためには、二つのタイプの動詞に共通する場合と、それぞれに特徴的な場合との関係を明らかにする必要がある。また役割的関係のみならず、出来事間の時間的関係のあり方においても、二つの動詞のタイプの違いに考察を加える。

以下、シテの意味記述と動詞分類に関する先行研究を確認したうえで（6.2)、装着動詞、所持動詞の順で用例を分析し（6.3)、第 4、5 章の記述もふまえてまとめを行なう（6.4)。

6.2. 先行研究

6.2.1. シテの意味記述に関して

成田（1983）は「「て」形」の副詞的用法の分析において、典型的な動詞として「様態動詞」を取り上げ、「立つ、座る、乗る」などの「姿勢をあらわすもの」を中心に分析している。さらに「「て形」が副詞的に用いられ、主節の動詞の動作主の様態・態度をあらわす動詞」として「様態動詞」以外の動詞に分析を広げるなかで、「再帰動詞」（本章の装着動詞）や、「保持をあらわす動詞」（本章の所持動詞）を扱い、類似的なものとして記述している。

仁田（1995）は「付帯状態」のうち、主体の変化の結果（状態）と主たる出来事が同時的に存在する「し手容態」を動詞のタイプごとに下位分類をしている。「姿勢」とともに「着脱」「携帯」というラベルによって、二つの動詞のタイプの意味的特徴に言及している[40]。

・自分はそれを何気なく、踞んで見ていた。［姿勢］
・（…）わたしは汗で湿った服をそのまま着て、また≪寮≫に出かけていった。［着脱］
・そこで女中が鍵をもって、私をまっていた。［携帯］

しかし下位タイプの特徴や相互の関係についての詳しい記述はなく、動作の先行性の有無（「継起」との関係）についての言及もないため、「付帯状態」に属すとされる「着脱」や「携帯」が場合によっては「継起」的な性質も持つのではないかという疑問も残る[41]。

奥田（1989）は二つのタイプを別のカテゴリーに分けている点で成田（1983）や仁田（1995）の位置づけとは異なる。まず所持動詞については、「同時に進行する、ふたつの動作がひとつの複合動作をつくっている、特殊なばあい」として、以下のような例を「携帯」というラベルで分析する。この場合、「主要な動作が移動性のもの」とう条件がある。

・三吉は鍬をたずさえて、成長したねぎなどをみにいった。（家上）
・頼んでおいた針医が小さな手箱をさげて、楼梯をあがってきた。（新生上）

しかし、この「携帯」は「姿勢」「服装」とともに、同時に進行する二つの動作の複合ではなく、「ふるまい状態」と主要な動作との複合として位置づけることも可能であると述べてお

[40] 仁田（1995：94-95）は「(5)（6）の「スリッパヲ履ク」「服ヲ着ル」などは、主体の身体部分を編入したあり方で使われるのが通例の再帰動詞である。再帰動詞であることにより、対象に変化を与えることによって、結果として主体が変化を被る、といった意味的あり方を有しているものである。また、対象に変化を与える主体の動きとともに、変化後の対象の状態（したがって、主体の結果状態）をも表す動詞である。（中略）(7)（8）の「鍵ヲ持ツ」「トランクヲ下ゲル」も、対象に変化を与え、その結果として、主体の身体容態に変化が及ぶものである。このタイプの動詞は、対象に変化を与える動きよりも、変化後の対象状態を維持する動きが、その語義の中心をなしているものである。そのことによって、「トランクヲ下ゲテ玄関カラ出ル」は、「トランクヲ下ゲタ状態デ玄関ヲ出ル」を表している」と述べている。

[41] これは第5章での姿勢変化動詞で言及したことと同じ問題である。

り、中間的な位置づけである（同：25)。

一方、装着動詞については、姿勢変化動詞による「姿勢」と並列するかたちで、「ふるまい状態」と主要な動作との複合として、「服装」というラベルに下位分類している。

・富士田工場長が背広をきて、はいってきた。（黒い雨）
・「いや、廊下で人に会うから」と、まるでおとなしい女になってしまって、島村が湯からかえったときは、手ぬぐいを器用にかぶって、かいがいしく部屋のそうじをしていた。（雪国）

これらは奥田のいう「複合」のバリエーションであるが、「複合」をなしていない場合として、以下のような二つの「ふるまい状態」が並ぶ場合も取り上げている[42]。

テイ子さんはリュックサックを背負い、モンペに白シャツをきて、赤十字腕章をつけていた。（黒い雨）

このような分類によって両タイプの違いが示唆されているが、二つのタイプの動詞による出来事間の関係を体系的に考察するには、各下位分類を関係づけた記述が必要になる。

①装着動詞における下位類の相互関係
- 主要な動作との複合　：例（a）相当
- 主要な状態との複合　：例（c）相当
- 複合をなしていない場合　：例（e）相当

②所持動詞における下位類の相互関係
- 主要な動作が移動性のものでない場合：例（b）（d）相当
- 主要な動作が移動性である場合　：例（f）相当

奥田（1989）は、装着動詞が、副次的な「状態」として主要な動作との同時的な複合を表すか、副次的な「動作」として主要な動作との継起的な複合を表すかは、動作性を切り捨てて状態を表すか、動作性を前面化させるかという局面の取り出し方の異なりとしている（同：28)。分析では、装着動詞においてこのことを確認し、さらに所持動詞のふるまいも検討することとする。なお奥田（1989）が、二つのタイプの動詞による場合をただちに同じカテゴリーに分類していないことには、奥田（1983a）が示す動詞と名詞との結合の構造の違いも関わると思われる。これについては 6.3.2 節で触れる[43]。

---

[42] 「(12) 同時に進行していて、複合動作をなしてはないない、ふたつの動作は第二なかどめの「して」では表現できず、「しながら」の形を採用しなければならないのだが、同時に存在している、ふたつの≪ふるまい状態≫は「して」でむすびつけることができる。このばあいでも、ひとりの人間の、ふたつの≪ふるまい状態≫としてのひとまとまり性はないわけではないだろう。」（奥田 1989：36）

[43] 奥田（1983a）では、装着・所持動詞について、モノへのはたらきかけとモノの変化を表す「とりつけ」か、モノの変化は表さない「ふれあい」かという連語のタイプの異なりと、ニ格名詞との組み合わさり方、そして典型的な「とりつけ」「ふれあい」の場合との異なりが示唆されている。装着動詞は、ヲ格名詞が表す

6.2.2. 動詞分類上の位置づけ

本章で扱う動詞のうち、装着動詞については「再帰動詞」として扱われることが多く、ヴォイス・アスペクト・他動性といった文法的観点からの分析・議論が行われている[44]。成田（1983：148）や仁田（1995：94）は、シテの分析の中で、「再帰動詞」の一般的な性質（再帰性）に言及している。以下、「再帰動詞」という用語と筆者の立場を簡単に確認する。

「再帰動詞」の特徴を仁田（1982）等に従ってまとめると以下のようになる。

- ヲ格名詞をとる他動詞であるが、客体ではなく主体の動作・変化をとらえる（再帰的）。
- 典型的な他動詞と異なって、「コートを着る」に対して「コートが着られる」のような受動態がない。
- 継続相（シテイル・シテイタ）において、動作継続ではなく結果継続を表す。
- 「着る」のように動詞の語彙的な意味として常に再帰的な動作・変化を表すものだけでなく、「マフラーを巻く」のように典型的な他動詞が再帰的に用いられる場合もある。

筆者は二つの理由から、「再帰動詞」という考え方は採らない。第一に、装着動詞は典型的な「再帰動詞」として扱われるが、所持動詞の特性・位置づけは不明である。所持動詞は語彙・文法的に装着動詞と類似し、主体への「再帰」的な出来事を表すと言えるように思われるが、「再帰動詞」の枠組みに所持動詞を含めるものは工藤（1995、2014）のほかにない。第二に、一方で、「再帰動詞」あるいは「再帰用法」ととらえうるものが多様である。主体がモノを身に着けることだけではなく、「腰を曲げる」「体を揺らす」のように、主体の身体部分における変化や動作を表す場合も含めることが多い。これらを「再帰動詞（用法）」としてまとめることも可能かもしれないが、ここでは、最初からその共通性を強調するよりも、まず

モノへのはたらきかけと変化を表す「もようがえのむすびつき」のバリエーションのうち、ヲ格名詞（とりつけられる第一の対象）とニ格名詞（第一の対象がとりつけられる第二の対象）をともなう「とりつけ動詞」の中で扱われている。ただし、「帽子をかぶる」のようにニ格名詞で表される第二の対象がなくてもよい点で、典型的な「とりつけ動詞」と異なる（同：28）。所持動詞は、ヲ格名詞が表すモノへのはたらきかけのうち、接触の面だけを表して変化を表さない「ふれあいのむすびつきをつくる動詞」として扱われている。ただし、「指先でブローチをつまむ」のような場合の道具のデ格名詞は「指先にブローチをつまむ」のように、ニ格名詞でも表すことができる。このような違いをふまえたうえで、ニ格名詞とのくみあわさり方から見た所持動詞の特徴について次のように述べている。「この種のに格がふるい道具のに格であって、とりつけのむすびつきをあらわす連語のなかのに格ではないことは、表現性の存在で証明できるが、この表現性が慣用からすりきれてきたときには、ふたつのに格はくべつがつかなくなる。とくに、もつ、とる、だく、かかえる、うけるのような動詞でできている連語についていえることだが、慣用的なくみあわせではに格をもちいるのがふつうになっている（同：38-39）。」

[44] 簡単に日本語の「再帰動詞（再帰用法）」に関する先行研究をまとめると以下のようになる。まず、笠井（1988）が述べるように、ヨーロッパの言語の研究における「再帰」とは意味が異なる。日本語研究では、高橋（1975、1985）、奥田（1977、1992、1993）、仁田（1982）、村木（1986、1991）が指摘するように、ヴォイス・アスペクト・他動性といった観点から、典型的な主体動作客体変化動詞と異なる特徴を持つものとして論じられている。また「着る」のように動詞自体が再帰的な意味を表すもののみならず、「マフラーを巻く」のように他の名詞との結合において再帰的な意味を表す「再帰用法」や、自動詞との連続性についても記述されている。稲村（1995）や川野（2000）、片山（2005）は「再帰動詞」「再帰用法」あるいはそれと関連がある動詞・用法のバリエーションを記述している。一方、天野（1987a）、トルヒナ（2014）のように、「再帰動詞」という概念・グループ化の妥当性・有効性に関する議論もある。

は下位タイプごとの違いを明確にするほうが重要なのではないかと考える。

工藤（1995）の動詞分類では「着る」や「持つ」といった動詞は「主体変化・主体動作動詞」として、「座る」などの「姿勢変化動詞」や「行く」などの「位置変化動詞」とともに「主体変化動詞」に含まれている。これらのタイプの動詞は、客体ではなく「自らに変化をもたらす人の意志的な動作」を表し、この点でモノの無意志的な変化を表す動詞よりも主体動作客体変化動詞に近いこと、継続相では通常結果継続を表し、動作継続を表すには構文的条件が必要であることが述べられている（同：78-79）[45]。

本研究も基本的にこのような位置づけに従うのだが、すでに述べたように、所持動詞は工藤（1995、2014）では「再帰動詞」に分類されている。工藤（1995）の分類に従えば、装着動詞も所持動詞も主体の意志的な動作と変化を表し、継続相においては結果継続を表すことになるが、詳しく見れば、両者はふるまいが異なるかもしれない。本章では特に、中止形における二つの動詞タイプのふるまいの異なりに注目することとする。

6.3. 用例の分析

装着動詞（6.3.1）、所持動詞（6.3.2）の順で分析する。第4、5章と同じく、二つの出来事の主体が同一の文を対象とし、基本的に定形動詞が継続相の場合から分析する。定形動詞のアスペクトによって二つの出来事の時間的関係を確認する際には、定形動詞が完成相の場合も取り上げる。

6.3.1. 装着動詞の場合

装着動詞には、まず動詞の語彙的な意味として常に主体への衣服の着脱を表す「着る、履く、羽織る、まとう、（帽子を）かぶる」「脱ぐ、はだける」などがある。こほか、バリエーションをとらえるために、＜再帰用法＞として、以下のような場合も扱う[46]。

・とりつけ：（眼鏡を）かける、（コートを）ひっかける、（バッジを）つける、（指輪を）はめる、（入れ歯を）入れる、（ネクタイを）締める、（マフラーを）巻く、（口紅を）塗る　など
・とりはずし：（ネクタイを）外す、（スカーフを）とる、（マニキュアを）落とす　など

これらは、主体動作客体変化動詞のうち、第一の対象の第二の対象への付属を表す＜とりつけ動詞＞と、第一の対象の第二の対象からの離脱を表す＜とりはずし動詞＞が、主体のモノの着脱を表す場合である。とりつけ・とりはずし動詞において、動詞と組み合わさるニ格名詞（とりつけ先）、カラ格名詞（とりはずし先）が主体の身体部分を表す場合には、客体では

[45] 工藤（1995）はヴォイスとアスペクトの絡み合いをとらえる中で「再帰構造」についても記述している（同：49-54）。言語学研究会の流れにある高橋（1975）や村木（1986、1991）のヴォイスに関わる指摘、およびアスペクトに関する奥田（1977、1992、1993）の分析とも共通するように思われる。

[46] このほか「マスク（を）する」「厚着（を）する」のような場合もある。また他動詞ではないが「（浴衣に）着替える」「薄着（裸・裸足・シャツ一枚・制服姿）になる」のような場合も同様に扱ってよいだろう。

なく主体の変化を表す。このニ格・カラ格名詞は省略されることも多い。なお「(ボタンを)とめる」「(襟を) 広げる」など、客体の形状・性質などの変化を表す＜もようがえ動詞＞が、モノの着脱そのものではなく、主体に付属するモノへのはたらきかけを表す場合についても、意味的に類似したものとして取り上げる（例 31～33 参照)。

①定形動詞が継続相の場合

まず、定形動詞が継続的な動作（動作継続）を表す場合を取り上げる。例（4）はシテが再帰用法の例である。

(1) 耳門から邸内へはいって行くと信者ででもあろうか、痩せ細った中年の女が、大麦藁帽子をかぶって、庭の**草むしりをしていた**。(浮雲 043)
(2) 女は外套を脱いで、英国物らしい格子縞の旅行服で**くつろいでいた**。(クロス 001)
(3) 五日ほど経って、ふたたび病院を訪ねると、塚田は集中治療室から普通の病室に移されたばかりで、陽のさしこむ大部屋の窓ぎわのベッドで、古ぼけたパジャマの胸をはだけて、細君に背中を**ふかせていた**。(深い河 187)
(4) はるは、行天の巣であるソファで、タオルケットをかけて**眠っていた**。(まほろ 185)

次に、定形動詞が結果状態の場合である。例（5）は定形動詞が位置変化動詞、例（6）（7）は定形動詞が姿勢変化動詞の継続相である。

(5) 安枝は緑いろの新型の水着を着て浜辺へ**出ていた**。(真夏の 001)
(6) つい二三日前、この麻シャツの男が山口から広島へ帰る汽車のなかで、乗客が込みあっているのに一人の陸軍中尉が長靴を脱いで座席に**寝そべっていた**。(黒い雨 021)
(7) 高鉄棒の上から見る父親は厚い灰色のオーバーを着て、老人のように**背中を丸めていた**。(岳物語 005)

定形動詞が動作継続の場合も結果継続の場合も、ともにシテが＜主たる出来事の際の服装＞を表す場合とまとめられる。

しかし実例では、例（8）(9）のように、主体（登場人物）の身なりを説明・描写する文脈において、一文で複数の服装を並べるのに用いられる場合が多く見られる。これは、定形動詞が結果状態を表す場合の際立った特徴である。

(8)「どんなお姉ちゃんだ？」
「とても凄いのよ。ハイカラな縞の外套を着て、ナイロンの靴下を**はいてた**わ。黒いぴかぴかのハンドバッグをさげてたわね。それから、ここで煙草を吸って行ったわ」(浮雲 053)
(9) まず身なりがちがっていた。

ちょっと大時代な、僕らの兄貴たちの世代にはやったような裾広がりのドレスを着て、長いストールを肩から**掛けていた**。赤いハイヒールはことさら目についた。（霞町物 004）

シテが装着動詞で、定形動詞が継続相である場合は、例（1）～（4）のような動作継続、例（5）～（7）のような結果継続の場合よりも、このタイプが中心である。

（10）菊子は派手な銘仙を楽に着て、伊達巻を**しめていた**。（山の音 018）
（11）もっとも彼女の着ている服はそのメイキャップよりはずっと簡素で、非特徴的だった。事務的と言ってもいいくらいだった。シンプルな白いブラウスを着て、シンプルな緑のタイト・スカートを**はいていた**。（ねじま 115）
（12）先生は紫の袴をはいて、少し高い草履を**はいている**。（泥流地 188）
（13）「農士」の文字の入った印絆纏をまとって、その上を軍の帯革で無造作に**締めている**。（リツ子そ 007）
（14）耕作はマントを着たままだが、拓一はマントを脱いで、一張羅の絣の着物と羽織を**着ている**。（泥流地 173）
（15）彼女は最初に会ったときと同じ濃いサングラスをかけて、クリーム色のコットンのズボンの上に黒いポロシャツを**着ていた**。（ねじま 121）

例（8）（9）（11）（12）は「ハイカラな縞の外套に、ナイロンの靴下を**はいてた**わ」のように「着て」あるいは「はいて」という動詞を使わずに、ニ格名詞でも同じ内容を表すことができる。「着て」という動詞を使う必要性は相対的に低い。

次の例で定形動詞が表すのは、持ち物の所持（例 16、17）、主体の身だしなみに関わる身体部分（髪、ひげ、爪など）の様態（例 18、19）である。テクストの流れの中で主体の身なりを一文で表す働きは、二つの服装を並列する例（8）～（15）と同じである。

（16）三人が寺の門をくぐると、向うからやって来る住職の姿が見えた。一見して僧侶と判る白い着物を着て、茶色の風呂敷包を**持っている**。（夏草下 007）
（17）重松と庄吉さんが阿木山の大池の堤で釣をしていると、「よいお天気ですなあ」と池本屋の小母はんが声をかけた。それだけなら何のこともなかったが、小母はんは立ちどまって、
「お二人とも、釣ですかいな。この忙しいのに、結構な御身分ですなあ」と変な口をきいた。
小母はんは手拭を被って、空の目籠を**背負っていた**。（黒い雨 004）
（18）時々三階の窓から、女の人が外を見ていることがあった。赤ん坊を生んだばかりの人だったのだろう。彼女たちはみんなお化粧っ気がなく、厚手のガウンを着て、髪を一つに**束ねていた**。（妊娠カ 018）
（19）どちらの将校も清潔な軍服を着て、髭をきちんと**剃っていました**。ロシア人は腰にベルトのついたトレンチ・コートのようなものを着ていました。コートの下からのぞいている長靴はよく光り、しみひとつありませんでした。（ねじま 129）

②定形動詞が完成相の場合：動作の先行性の有無

定形動詞が完成相である場合について、シテが表す動作の先行性を確認する。

以下の例（20）～（22）では、シテで表される動作の先行性が明確である。主体が何かをまず身に着けるという動作があり、その変化結果としての状態のなかで主たる出来事が実現する。その結果状態は、主たる出来事の実現のために前もって意図的に作り出される必要があるものである。

（20）ちょっと離れたところに、踏みつけられた戦闘帽が目についたので、拾って見ると、僕の帽子によく似ているが僕のではない。まあ良いわいと、それを被って高橋夫人と一緒に構外に**出た**。（黒い雨 066）

（21）喝食も慈童も作者の名があって、本で調べてみると、室町時代のいわゆる古作にははいらないが、それに次ぐ名人の作とわかった。能面を手に取って見るのは初めての信吾も、贋ものではなさそうに思った。

「おや、気味が悪い。どれ。」と保子は老眼鏡をかけて面を**見た**。（山の音 077）

（22）富岡は、そのまま洗面所に行き、冷いシャワーを浴びた。朝になったので、何事もないじゃないか……。昨夜の妖怪変化は雲散霧消してしまったのだ。大判のタオルにくるまり、急いで二階へ駈け上る元気が出た。アイロンのきいた、白い半袖の上着に、ギャバジンの茶色の長洋袴をはいて、鏡の前で苦手な髭剃り作業に**かかる**。（浮雲 084）

すでに見た定形動詞が継続相である例（1）～（19）でも、基本的に、定形動詞が表す主たる出来事のために、結果状態を意図的に準備しておく必要があり、定形動詞を完成相にすると動作の先行性が出てくる。

まず、定形動詞が動作継続の場合について言い換えを考える。

（1’）痩せ細った中年の女が、大麦藁帽子をかぶって、庭の**草むしりをした**。

（2’）女は外套を脱いで、英国物らしい格子縞の旅行服で**くつろいだ**。

（3’）塚田は陽のさしこむ大部屋の窓ぎわのベッドで、古ぼけたパジャマの胸をはだけて、細君に背中を**ふかせた**。

（4’）はるは、行天の巣であるソファで、タオルケットをかけて**眠った**。

ただし「私は寒い部屋の中でコートを着てぶるぶると**震えていた**」のように定形動詞が非意志的な出来事を表す場合は、「私は寒い部屋の中でコートを着てぶるぶると**震えた**」のように定形動詞を完成相にしても、結果状態の意図的準備性に基づいた動作の先行性は認めにくい。継起性があるとしても、単なる事態の推移としての動作の連続としか解釈できないだろう。

次に、定形動詞が結果状態を表す場合についてもアスペクトの言い換えを考えるが、この場合は少々複雑である。

例（5’）（6’）では、定形動詞が表す主体の姿勢変化や位置変化のために、シテが表す意図的な動作（と結果状態の成立）が先行している。例（5’）では浜辺に出るのにふさわしい服装として前もって水着を着るということが、例（6’）では座席が汚れないように（またはくつろぐために）前もって長靴を脱ぐということが表されている。

（5’）安枝は緑いろの新型の水着を着て浜辺へ**出た**。
（6’）乗客が込みあっているのに一人の陸軍中尉が長靴を脱いで座席に**寝そべった**。

しかし、例（7’）や次の例（23）～（25）では、主たる出来事に対しての、結果状態の意図的準備性ははっきりしない。例（7’）（23）はそもそも定形動詞が意志的な出来事を表しているとは言いにくいため、何かを身に着けることが主たる出来事の準備として効いているとは考えられない。例（24）（25）では、定形動詞は主体の存在をも提示しており、シテはいわばその存在のあり方として服装を描写しているのであって、必ずしも定形動詞が表す主たる出来事の成立に必要なものとして提示されているのではない。

（7’）高鉄棒の上から見る父親は厚い灰色のオーバーを着て、老人のように**背中を丸めた**。
（23）伊庭は、大津しもと同じ黒色のゆるい上着を着て、これも眼を｛**つぶっている／つぶる**｝。（浮雲 045）
（24）多田は満足して愛車を眺め、事務所に戻った。いつのまにか日も陰り、夕暮れの気配が町の空を覆いはじめていた。埃で汚れ、土くれと見分けがつかない姿の雪は、もう道の端にしか残っていない。
　多田はわずかにそれを惜しんだ。なにかを惜しむのはいつ以来だろうと考え、思い浮かんだ遠い日を、すぐに打ち消した。
　事務所では行天が、コートを着てソファに｛**座っていた／座った**｝。（まほろ 174）
（25）「かまわないわよ、何も。――どうせ遊んでるんですもの」
　郁子の言葉を背に、洪作は畳をかついで外へ出た。
「御同役、御苦労でござる」
　藤尾は玄関から出たのか、寺の下駄を履いて｛**立っていた／立った**｝。（夏草下 008）

一方、同じく定形動詞が継続相において結果状態を表している場合でも、主体の身なりとして二つの服装を並べる場合では、定形動詞を完成相にしても順序性が明らかである。例（10’）（12’）（13’）（14’）では、シテが表す動作と結果状態の成立が、定形動詞の表す出来事（もう一つの服装の着脱）に先行していなければ、服装を身に着ける順として成り立たない。

（10’）菊子は派手な銘仙を楽に着て、伊達巻を**しめた**。
（12’）先生は紫の袴をはいて、少し高い草履を**はく**。
（13’）「農士」の文字の入った印絆纏をまとって、その上を軍の帯革で無造作に**締める**。

（14’）拓一はマントを脱いで、一張羅の絣の着物と羽織を**着る**。

一方、例（11’）（15’）のように、二つの動作の順序が逆であっても成り立つものもある。この場合、二つの服装は順序に支えられていない点で、シテが主たる出来事に対する副次的な出来事を表しているとは言いにくい。しかし、ある主体の服装の準備を一文でまとめて表すという点で二つの出来事には統一性がある。まったく関係のない出来事の並列ではない。

（11’）シンプルな白いブラウスを着て、シンプルな緑のタイト・スカートを**はいた**。
⇒　シンプルな緑のタイト・スカートをはいて、シンプルな白いブラウスを**着た**。
（15’）彼女は最初に会ったときと同じ濃いサングラスをかけて、クリーム色のコットンのズボンの上に黒いポロシャツを**着た**。
⇒　彼女はクリーム色のコットンのズボンの上に黒いポロシャツを着て、最初に会ったときと同じ濃いサングラスを**かけた**。

定形動詞が継続相で、二つの服装を結果状態として並べる場合では、主体（登場人物）の身なりの描写を背景として差し出す。定形動詞が完成相で、二つの服装を身に着ける動作を並べる場合は、主体がある身なりになることを、物語を進める筋の一部として差し出す。重要であるのは、同じように二つの服装に関する出来事を並べているようでも、定形動詞のアスペクトによって、小説の地の文における機能が明らかに異なるということである。衣服の着脱を物語の筋として表現する文よりも、二つの服装を状態として並べる構造の文のほうが、登場人物を導入する方法の一つとして頻繁に用いられることは強調しておきたい。

以下、周辺的ではあるが確認すべき事柄について（i）～（iii）に分けて補っておく。

（ｉ）「着て」とデ格名詞との言い換え

装着動詞の用例の中には、［(衣服）ヲ＋シテ］を［(衣服）デ］に言い換えてよい場合がある。

(5) 安枝は緑いろの新型の水着を着て（緑いろの新型の水着で）浜辺へ**出ていた**。(真夏の 001)
(26) みんな清潔な服を着て（清潔な服で)、それぞれの物静かな仕事に**携わっていた**。(ねじま 122)

動詞（シテ）がなくても「着ていること」がわかる場合も多く、「水着を着て浜辺へ**出ていた**」を「水着で浜辺へ**出ていた**」と言っても意味的には同じである。動詞を用いると、何かを身に着けていることが、動作（変化）とその結果状態として明示される。すべての例をデ格名詞で言い換えられるわけではなく、服装を表すのにデ格名詞を用いることの方が限定的であるが、本章では詳しく条件を分析することはできていないため、今後の課題とする[47]。

[47] 奥田（1983c：329）の「で格の名詞と動詞とのくみあわせ」の「規定的なむすびつき」では「腕まくり

（ii）ヲ格名詞（客体）の共有

装着動詞は主体の変化結果としての状態を表すが、他動詞であるので、装着するモノを表すヲ格名詞が定形動詞と共通である場合がある。

(27) しばらく待つと、濡れ髪を掻上げながら、走って出た。袷をつっかけて片手でしっかり**押さえている**。(リツ子 025)
(28) セーラー服のままであんなことをして、とあきれたけれど、よく見ると、女の子はみんなスカートの中に臙脂色のジャージを穿いて、膝まで**たくしあげていた**。(私の男 219)

例（27）(28）で「袷をつっかけて」「ジャージを穿いて」の部分だけを見ると、変化結果は主体に関わるものであるが、同時に、ヲ格名詞が表すモノが主たる動作の客体でもあるため、複合的である。実例では見られなかったが、身に着けるものを表すヲ格名詞が、定形動詞に対して、例（29）のようにニ格（とりつけ先)、あるいは例（30）のようにデ格（道具）といった他の格関係で主たる出来事に関わる場合も考えられる。ただし、名詞で言い換えた場合は、そのモノを身に着けていることは暗示的になる。

(29) 彼はつばの広い帽子をかぶって（つばの広い帽子に）鳥の羽を｛**貼りつけていた**／**貼りつけた**。｝
(30) 彼は頭巾をかぶって（頭巾で）頬の傷を｛**隠していた**／**隠した**｝。

このような構文的特徴は、典型的な他動詞である主体動作客体変化動詞の場合に見られたものだが、装着動詞に限らず、所持動詞の場合にも同様に見られる（例 51～53 参照)。

（iii）もようがえ動詞による動作

例（31）～（33）では、ここまで挙げた例のように、シテがとりつけ動詞で「主体がモノを身に着けること」を表すわけではない。シテはもようがえ動詞であって、主体が身に着けているモノへのはたらきかけを表している。

(31) 襟元はボタンを三つ開けて、中のゴールドのネックチェーンを**見せつけていた**。(顔に降 174)
(32) 向うの学生らしい青年は毛布を顎まで引きあげて、じっと田中のほうを**見つめている**。(留学 026)
(33) 駅者も、助産婦が連れてきたかもしれない耶蘇から身を守ろうとするかのように、防寒帽の耳当てを深く下ろして固く口を**噤んでいる**。(白夜を 030)

「主体が身に着けたモノへのはたらきかけ」である点で、典型的な主体動作客体変化動詞に

で」「たすきがけで」「くわえ煙草で」などが挙げられているが、いずれも動詞的要素を含む複合名詞である。

よる場合と、典型的な装着動詞による場合の中間的な例であろう。

6.3.2. 所持動詞の場合

所持動詞は、「持つ、抱える、抱く、背負う、かつぐ、提げる、つかむ、つまむ、握る、携える、くわえる」などの、主体がモノを身体部分によって保持することを表す動詞である。

装着動詞との異なりは、第一に、ヲ格名詞が「衣服」ではなく「持ち物」としての具体物を表す点、第二に、手や腕などの身体の部分を使ってその具体物の保持が表現される点である。第二の点について説明する。例えば装着動詞の「着る」では、一度主体がモノを身に着けてしまえば、意図的に脱がない限り、その状態が維持される。一方、所持動詞の「持つ」では、モノを手でつかんだり腕で抱えたりして、主体の身体をいわば道具として意志的・持続的に保持していなければ、その状態は維持されない。主体の身体の部分にモノが接触している点では装着動詞と同じだが、装着動詞が表す出来事における身体はとりつけ先であって、保持するための道具ではない。

このような区別については、奥田（1983a）の次のような指摘を参考にしている。「頭に帽子をかぶる（装着動詞)」「手にかばんを持つ（所持動詞)」のように、どちらのタイプの動詞も身体部分を表すニ格名詞と組み合わさるが、所持動詞の場合は「手でかばんを持つ」のようにニ格名詞を道具のデ格名詞として言い換えられるのに対し、装着動詞の場合は「*頭で帽子をかぶる」のようにデ格名詞では言い換えられない。

動詞分類上、所持動詞は、主体がモノを所持していることを結果状態としてとらえれば、工藤（1995）のように主体変化動詞とすることもできるし、モノを意志的に保持している動作としてとらえれば、「ふれあい動詞」の一種とする分類する奥田（1983a）のように、主体動作動詞的であるとも考えられる。

①定形動詞が継続相の場合

定形動詞が継続的な動作（動作継続）を表す場合を確認するが、まず奥田（1989）の次のような指摘に沿って、定形動詞が＜移動性の動詞＞である場合に注目する。ここでの移動性の動詞とは、「歩く、走る、泳ぐ」のような移動とその様態を表す＜移動動作動詞＞と、「行く、来る、帰る」のような＜位置変化動詞＞からなるものとする。

> 同時に進行する、ふたつの動作がひとつの複合動作をつくっている、特殊なばあいとして、定形動詞にさしだされる、主要な動作が移動性のものであって、第二なかどめによってさしだされる動作がその移動のさいの《携帯》になっていることがある。（同：24）

例（34）～（38）では、定形動詞が移動性の動詞であることによって、主体の移動だけでなく、主体への付属を通じた客体の移動（持ち運び）が表現されている。このとき、所持動詞は役割的意味として、＜移動の際のモノの携帯＞を表すと言える。

(34) 裸にTバックショーツの若い男たちがトレイを持って客の間を**廻っている**。(顔に降 179)
(35) 煉瓦の煙突の家の周囲を近隣の人がバケツや桶を持って**走り廻っていた**。(八甲田 007)
(36) その女は、野良着の背中に白髪頭の老婆を背負って湯小屋の崖道を**登っていた**。(白夜を 166)
(37) 丁度南嶽も連日空襲のはげしい頃で町民は鍋と布団を抱えて、**逃げまどっていた**。(リツ子 002)
(38) 生徒たちは手に手に竹箒やちり取りを持って、屋外運動場に**集まっている**。(続泥流 024)

以下の例(39)の装着動詞の場合では、同一のモノが主体へ付属していても、例(40)の所持動詞の場合と違って、のモノの持ち運びを表すのではない。

(39) 彼はジャンパーを着て、廊下を**歩いていた**。　　[シテが装着動詞]
(40) 彼はジャンパーを持って、廊下を**歩いていた**。　[シテが所持動詞]

奥田(1989)の指摘を詳しく検討するには、定形動詞が完成相の場合も分析する必要があるが、ここでは以下の点を簡単に確認しておく。上記の例(34)～(38)は定形動詞が移動動作動詞であるが、定形動詞が完成相の場合は、例(41)～(44)のように定形動詞が位置変化動詞の場合が多い。

(41) 信吾はしばらく蓮華の写真を見つめていてから、その新聞を持って、菊子の居間へ**行った**。(山の音 114)
(42) 門倉は守を抱いて、自分のうちのような身ごなしで奥へ**入っていった**。(あ・う 064)
(43) 土曜の昼下り、門倉は大きな西瓜をぶら下げて仙吉のうちを**訪ねた**。(あ・う 077)
(44) 伯母がお茶をいれてくれたので、それを飲んでいると、新聞紙に包んだ干し柿を持って、伯父が**やって来た**。(夏草冬 259)

奥田(1989)は例(34)～(38)、(41)～(44)のように定形動詞が移動性の動詞である場合には言及しているが、一方で、例(45)～(48)のように定形動詞が移動性の動詞でない場合については例を挙げていない。主たる出来事の際に主体がモノを所持している点は同じだが、持ち物が主体の移動にともなって持ち運ばれるのではない。

(45) 本田伍長は少し離れたところで小銃を持って監視に**あたっておりました**。(ねじま 125)
(46) ふと傍らの多田を見ると、多田は水割りのグラスを持って、薄暗いバーの真ん中でピアノを弾いている若い女性に目を**注いでいた**。(優駿 166)
(47)「下駄屋の小母さんなら、さっき、若い衆宿の横で、子供をおぶって、蜜柑**食べてた**ぞ」(夏草冬 209)
(48) 外階段の、破れたトタン屋根に頭をぶつけないようにかがみながら降りていくと、花が学生鞄を胸の前で抱えて、**待っていた**。眩しそうにこちらを見上げている。(私の男 172)

この場合のバリエーションとして、持ち物を表すヲ格名詞が、主たる出来事に加わる対象（道具）として関わっている場合がある。例（49）はヲ格名詞を道具のデ格名詞に言い換えてもよく、例（50）でも「珊瑚の細くて長いシガレット・ホールダアで、煙草を**吹かしている**」という関係が想定できる。

（49）ふたりの兵隊が大型の懐中電灯を手に持って（大型の懐中電灯で）、私と山本の姿を**照らしていました**。（ねじま 128）

（50）珊瑚の細くて長いシガレット・ホールダアを、同じ珊瑚いろに染めた爪先で摘むように持って、煙草を**吹かしている**。（クロス 002）

また、例（51）～（53）のようにヲ格名詞が表すモノが、シテと定形動詞の表す二つの出来事の共通の客体である場合もある。装着動詞の箇所で挙げた例（27）（28）と同様に、複合的な関係である。

（51）僕はしばらくその受話器を手に持って、じっと**眺めていた**。（ねじま 111）

（52）四時間目の授業の終りを告げる鐘が、まだ雪の深い沢合に響く。菊川先生が、手に鐘を持って**鳴らしている**のだ。（泥流地 160）

（53）淳悟はところどころ手伝ったり、指示を出したりしながら、火のついていない煙草を吸いたそうにくわえて、前歯で強く**噛んでいた**。（私の男 241）

次に、定形動詞が継続的な結果状態（結果継続）の場合を確認する。まず用例の傾向として、定形動詞が「立っている」の場合が多く見られた。

（54）もう唐泊の岩壁が見えてきた。小田の浜辺の二階の窓が見えてきた。私はまだ私の皮膚を匍うている女の肌のすべすべと臘石のように弱々しい感覚を、新しい悔いの形で思いおこしながら、舳先に一人立っていた。

　静子が太郎を負うて石組の船着場の上に**立っていた**。気がついたのか太郎が静子の背の上からしきりに手を振っている。私も延び上って、戦闘帽をゆるく振ってみた。（リツ子 027）

（55）食堂には工場長や職員たちを併せて、二十人あまりしか食卓についていなかった。それも相当年配の者ばかり、みんな石地蔵のように黙りこんでいて、食事をしている者は一人もいなかった若い炊事婦は布巾を持って、叱られたときにするように配膳口の暖簾の下に**立っていた**。（黒い雨 039）

この傾向には、定形動詞が移動性の動詞である場合が所持動詞の使用において特徴的であることが関係していると思われる。例（54）や次の例（56）（57）では、文脈上、「立っている」状態が、先行する移動のあとに存在していることがわかる。つまり、先行するモノを携

帯しての移動（すなわち持ち運び）が行なわれたのち、主体がモノを持って移動後の場所に存在している状態として解釈できる。ただし、例（55）のように先行する主体の移動が想定できず、単に付随的にものを持った状態を表す場合もある。

（56）二度目は、その翌晩で、蔵板の彌助に呼ばれて二階から降りていってみると、苗がなにやら重たげなものを両手で抱えて、庇の下に**立っていた**。なんの用かと思うと、土産を届けにきたというのであった。（白夜を 191）

（57）「お父さま、お父さま。」と菊子は障子のそとから小さく呼んだ。
「なんだ。」
「お目ざめになってましたら、ちょっと……。」
「どこか悪いの？」
菊子の声の色で、信吾はそう思うと、すぐに起きて来た。
菊子が新聞を持って、廊下に**立っていた**。
「相原さんのことが、新聞に出ています。」（山の音 024）

その他は実例が少なく、細かく分類できていないが、例（58）（59）のように主要な出来事としての結果状態に付随するモノの携帯を表す場合と、例（60）のように同種の事柄としてモノの携帯を並列する場合とでは出来事間の関係性が異なる。これは装着動詞における服装の並列と同様である。

（58）良子が何か抱いて**寝ている**。何だろうと、拓一はそっと手を伸ばした。手にとってみると、枝薪に古切れをまきつけ、ひもで結んである。（泥流地 156）
（59）鷲尾は嬉しそうに笑っていた。茶を口に含んで、**眼を細めていた**。（猫の息 004）
（60）彼はリュックを背負って、ボストンバッグを**さげていた**。

以上のように、シテが所持動詞である場合には、＜主要な出来事の際のモノの所持＞を表すものとまとめられるだろう。ただし、例（34）～（38）のように＜移動の際のモノの携帯＞を表す場合を、その中の特殊なタイプとして位置づける必要がある。

②定形動詞が完成相の場合：動作の先行性の有無

シテが所持動詞の場合、定形動詞が完成相であっても、動作の先行性がとらえにくい例が多い。言い換えれば「何かを所持していない状態から、所持した状態になる」という変化の局面がとらえにくい。これは「何かを着ていない状態から、着た状態になる」という変化の局面が明瞭な装着動詞とは異なった特徴である。以下では、動作の先行性が前面化しにくいと思われる例を、タイプに分けて見ていく。

第一に、定形動詞が移動性の動詞の場合には、定形動詞が完成相であっても動作の先行性は前面化しないように思われる。動作が先行すると解釈してもよいが、実際に行われる動作（変化）の局面）は問題にならないように思われる。

(61) 僕はクミコのブラウスとスカートを持って駅前のクリーニング屋に**行った**。僕はいつもは家の近くにあるクリーニング屋に洗濯ものを出している。とくにそこが気に入っているわけではなくて、ただ単に距離的に近いからである。（ねじま 037）

(62)「お忙しいとこ、わざわざ」

仙吉も当惑しながら四角ばった挨拶をした。

「あら閑ですよ。閑で閑で閑もて余してたとこ。読んでいただいてもう嬉しくって。あら、法事なのに喜んじゃいけなかったかしら」

「いや、にぎやかなほうが仏もよろこびますよ」

「枯木も山のなんとやらだよ。お前のとこ、東京に親戚すくないからさ」

門倉は守を抱いて、自分のうちのような身ごなしで奥へ**入っていった**。（あ・う 064）

(63) 土曜の昼下り、門倉は大きな西瓜をぶら下げて仙吉のうちを**訪ねた**。守の手を引いた禮子も一緒である。（あ・う 077）

(64) よろよろと外階段を上がると、となりの女があわててドアを閉めた。誰もいなくなった部屋の玄関で、落ちついて、お気に入りのピンクのハイヒールを履いた。折れた爪と、破れたストッキングを気にしながら、バッグをかかえて外階段を**降りた**。足音が響いた。倒れたまま、頬を押さえて泣いている小町さんの巨体を、またいだ。ふらっ、と一度だけよろめいた。（私の男 294）

(65)「馬鹿言え。このステッキ持って、**散歩する**んだぞ。ほら、あそこに山が見えるだろうって、ステッキで指すのよ。馬鹿だなお前ら」

菊川先生は、早速ステッキを持って、気取った格好で言った。（泥流地 234）

(66) 老兵と十二歳から十七歳の少年兵まで出陣して、二五十人もの戦死者を出した苛烈な戦闘で、智恵子の祖母ノシも、生れて三ヵ月の母センを抱いて炎の中をかろうじて**逃れた**。（智恵子 139）

例（67）（68）のような場合は、はじめから主体はモノを持っていることが文脈上明らかであり、持っていない状態から持った状態への変化としての動作は問題にならない。

(67) 信吾は保子が見ていたらしい四五日分の新聞を拾い上げて、読むともなしに見ていると、「花開く二千年前の蓮」という珍しい記事があった。（…）

信吾はしばらく蓮華の写真を見つめていてから、その新聞を持って、菊子の居間へ**行った**。（山の音 114）

(68) 仙吉が飛び込んで来たのは、このときだった。

仙吉はものも言わず、昇汞水の瓶をもぎ取った。（…）

「奥さん」

ヘンなところから声が出たせいか、仙吉はかすれ声になった。

本当はこれから先どうしたらいいのか。立往生したとき、玄関に気配があった。仙吉は昇汞水の瓶を持って**出ていった。**（あ・う 047）

例（69）（70）のような場合、主体がモノを持つ動作は、現実に先行しているとしても、別の場面で行なわれるため、視点人物を中心とした物語の流れ上、その先行性を確認しえないことは明らかである。

（69）部屋には小さい囲炉裡が切ってあった。洪作はそこに坐った。伯母がお茶をいれてくれたので、それを飲んでいると、新聞紙に包んだ干し柿を持って、伯父が**やって来た**。洪作をもてなすために、母屋の方へ干柿をとりに行って来たものらしく、

「若い者たちが造ったので、どうせうまくはあるまいが」

伯父は言った。（夏草冬 259）

（70）その翌日の昼すぎ、外国人はまたやって来た。グリンのボストンバッグをさげて、天井の低い小舎へ**這入って来た**。バッグを開けて、一つ一つ土産を出しながら早口でしゃべった。（浮雲 111）

例（34’）～（38’）は定形動詞が継続相の例について定形動詞を完成相にしたものであるが、同様に動作の先行性は見えにくい。

（34’）裸にＴバックショーツの若い男たちがトレイを持って客の間を**廻る**。

（35’）煉瓦の煙突の家の周囲を近隣の人がバケツや桶を持って**走り廻った**。

（36’）その女は、野良着の背中に白髪頭の老婆を背負って湯小屋の崖道を**登った**。

（37’）丁度南嶽も連日空襲のはげしい頃で町民は鍋と布団を抱えて、**逃げまどった**。

（38’）生徒たちは手に手に竹箒やちり取りを持って、屋外運動場に**集まる**。

第二に、定形動詞が移動性の動詞でなくても、「持つ、抱く、抱える、提げる」といった動詞の場合は、定形動詞が完成相であっても、動作の先行性がはっきりしないことが多い。動詞の語彙的な特徴によるものと考えられる。

（71）「さいなら、耕ちゃん」

豆腐の入った小鍋を持って、福子は耕作をじっと**見つめた**。（泥流地 270）

（72）馬にブラシをかけ終ると、今度は鶏を呼ぶ。麦を入れたザルを抱えて、耕作は大きな声で、

「トートートートート」

と**呼ぶ**。朝早くから庭やその辺にちらばっていた鶏が吾先にと駆け寄ってくる。蹴つまずくようにすっ飛んでくるものもある。（泥流地 220）

（73）「ありがとう」

とマリは言った。アパートのドアが開き、マリの母親が心配そうに、

「マリ、どこにいるの？　先生は？」

と呼ぶ声がした。多田はチワワを抱いて**立ちあがった**。（まほろ 205）

(74) シャワーを浴びた富岡は、こざっぱりと服を替えて、階下の食堂へ降りて行くと、加野が、ヴェランダに向って、木椅子に呆んやり腰をかけていた。富岡はシュバリエの植物誌の重い本をかかえて、加野の横の木椅子に**腰をかけた**。（浮雲 085）

ただし、これらの動詞でも動作の先行性が前面化してとらえられる場合がないわけではない。それは、例（75）（76）のように、「何かを所持していない状態」から「何かを所持した状態」への移行が、文脈の支えによってはっきり確認できる場合である。

(75)「ようし」湯川は手をぱんぱんと叩きながら立ち上がった。「ゲストが現れたから、もうひと勝負しよう。全員並んで綱を持ってくれ」

えー、またですかあ、と学生たちはぼやきながら綱を持って位置に**ついた**。（予知夢 036）

(76) 国男は、長いステッキを出した。つたの巻いた跡のあるつりばなの木だ。握るところがちょうどよく曲っている。

「それで、それで嫁さんば、ぶっ叩けってか」

誰かが言い、みんなは腹を抱えた。国男は真っ赤になって、

「馬鹿言え。このステッキ持って、散歩するんだぞ。ほら、あそこに山が見えるだろうって、ステッキで指すのよ。馬鹿だなお前ら」

菊川先生は、早速ステッキを持って、気取った格好で**言った**。（泥流地 233）

これに対し、「背負う、おぶう、かつぐ、くわえる、つかむ」「持ち上げる（抱き上げる、抱え上げる）」といった動詞では、例（77）（78）のように動作（変化）の側面と、その先行性が相対的にはっきりしている。

(77) 僕は咽がひりひり痛むので、リュックサックから瓶を取出して水をラッパ飲みにした。能島さんの後ろ姿が見えなくなると、リュックサックを背負って、「しかし、野島さんのおかげで、僕らは宇品に対比する決心がついたようなものだ。思いきりがついて、何よりだ」とシゲ子の気持を占う意味で**云った**。（黒い雨 095）

(78) 不安な気持ちが胸に満ちてきた。小声で、問いかけた。

「じゃ、毎日、いったいなにをしてるんですか」

僕の目つきを真似して、淳吾さんがまた目玉をぐるりと回してみせた。それから煙草をくわえて、ふっと視線を**さまよわせた**。

僕の背後で、視線が止まった。僕がさっきからもたれている、襖が色褪せた押入れを見ているのだ、とわかった。（私の男 338）

しかし、例（79）（80）のように定形動詞が移動性の動詞である場合、やはり主体の動作（変化）の先行性は認めにくい。

（79）拓一と耕作はフォークをかついで、厩に**飛んで行く**。朝飯までの仕事だ。耕作が手綱を取って、馬を外にひき出す。馬が甘えて鼻面をよせる。耕作は馬の耳に、
「今日も元気でな」
とささやく。（泥流地 217）

（80）「だって、だって……、後は好きなようにしてくれ、って言われたのよ。じゃ、死んだことにしちゃってもいいの、あの娘、きっと泣くわよ、って聞いたら、どうでもいいさ、好きにしろよ、って笑ってたの。それで、煙草くわえて、ふらっとどっか**行っちゃった**わ。あっちに帰ったのかしら。それとも、もっと遠くに逃げちゃったのかしら。私にだってわからないわ」（私の男 291）

「背負う、おぶう、かつぐ、くわえる、つかむ」「持ち上げる（抱き上げる、抱え上げる）」といった動詞に比べて、「持つ、抱く、抱える、提げる」といった動詞で動作（変化）の側面が明確でないのは、そもそも動詞の語彙的な意味において、動作の具体的なあり方が明確でないことも関係しているだろう。「持つ」では、次のように、実際に手で持っているかどうかという動作の具体的な側面が問題にならない場合もある。

（81）「（…）そうこうしているうちに、すっかり信用しきっていた女中が金を持って男と**逃げてしまった**んだ。銀行預金から株券から何から何まで全部。（…）」（ねじま 065）

総じて、使用頻度の高い「持つ」の場合は、動作の先行性が認めにくいということが言える。

以下、装着動詞と同様、補足的な事柄を挙げておく。

（ｉ）接触を表す主体動作動詞との連続性

所持動詞は、主たる出来事の際のモノの所持を常に表すわけではない。次のような場合は、ヲ格名詞のモノは持って動かすことができないものであり、主たる出来事の際に単に主体が触れているモノである。この点で、結果状態ではなく主体の動作としてモノとの接触を表す主体動作動詞として扱った方がよいだろう。

（82）富岡は自分の後に近々と歩いて来ているゆき子に、歩調を合わせるべく立ちどまったが、無意識に、自然に寄って来たゆき子の肩をつかんで、小暗いナギの大樹の下で、強く**抱き締めていた**。（浮雲 012）

（83）裏二階の部屋では、兄の清吾がぽつんと膝小僧を抱いて壁の柱に**よりかかっていた**。（顔に降 198）

（84）老人は手すりを持って階段を**あがっていた**。

（ii）とりつけ動詞によるモノの所持

「持つ、抱える」などといった動詞は、語彙的な意味として具体物を主体が所持すること表すが、次のように、とりつけ動詞が、主体の身体部分を表すニ格名詞と組み合わさって、モノの携帯に近い意味を表す場合がある。「(耳に鉛筆を）はさむ、(頭に壺を）のせる、(ポケットに札束を）入れる、(鼻に紙を）つめる、(口に水を）含む、(首に／首から箱を）さげる、(肩に／肩からかばんを）かける」などである。「手に取る、手にする」などは、フレーズ化が進んで「持つ」と同様の意味になっている。

(85) ホームの上では、饅頭や焼餅を売り尽くしてたっぷりと儲けた満人たちが、空になった箱を首から下げて、屈託のない笑顔で手を**振っていた**。(赤い月 188)

(86) 彼は頭に水の入った壺をのせて、山道を**歩いていた**。

(87) 彼は七百二十万円の札束を服のポケットというポケットに詰め込んで、あたかも地獄の只中から逃げ出すような心持で競馬場から**出て行った**。(優駿 213)

前述したように、いわゆる「再帰動詞」に関する先行研究では所持動詞は検討されていないのだが、上記のような場合も装着動詞における「(マフラーを）巻く」のような場合と並行的に考えて再帰用法とできるかもしれない。しかし「持つ」のように、身体部分を使ってモノを意図的に保持するという側面は認めにくいため、まったく同じ意味でモノの所持とは言えない。といって典型的な衣服の装着や、典型的な主体動作客体変化動詞の使用とも異なるため、ここで触れておく。

（iii）モノの非所持

モノを所持するのとは逆に、「置く、捨てる、投げ出す、放る」などの動詞によって、持ち物の所持していないことを表す場合もある。「着る」タイプにおける「脱ぐ」と同じく、対象が出来事に加わるのではなく外れることが表されている。

(88) 落ち葉の散り敷く舗道に、祖父がステッキを投げ出して、はいつくばるような感じで銀杏を**拾っている**。(青い火 168)

6.4. 本章のまとめ

本章では、シテが装着動詞、所持動詞である場合を対象に、次のような分類を行なった。冒頭と同じ例（a）～（f）を再度挙げつつ確認する。

まず、装着動詞は、(a)（c）のような場合、主たる出来事と同時的に存在する主体の変化結果の状態として、主たる出来事の際の服装を表す。一方、シテと定形動詞がいずれも装着動詞であり、一文に主体の部分的な身なりをまとめて表現する（e）のような場合は、定形動

詞が結果継続である点では（c）と共通であるが、同種の出来事を並べている点で、出来事間の関係は異なる。重要であるのは、小説における装着動詞の使用において、(e) が特徴的なタイプであることである。

(a) 彼はカッパを着て庭を**掃いていた**。　　[定形動詞＝動作継続]
(c) 彼はカッパを着て校門の前に**立っていた**。　[定形動詞＝結果継続]
(e) 彼はカッパを着てスニーカーを**履いていた**。[定形動詞＝結果継続（装着動詞)]

次に、所持動詞は、(b) (d) のような場合に、主たる出来事と同時的に存在する主体の変化結果の状態として、主たる出来事の際のモノの所持を表す。そのなかで、定形動詞が移動性の動詞であって主体の移動にともなうモノの携帯を表す（f）が、特徴的であり、同じように定形動詞が動作継続でもモノの移動（持ち運び）は表さない（b）とは意味関係が異なる。

(b) 彼はほうきを持って庭を**掃いていた**。　　[定形動詞＝動作継続]
(d) 彼はほうきを持って校門の前に**立っていた**。　[定形動詞＝結果継続]
(f) 彼はほうきを持って廊下を**歩いていた**。　　[定形動詞＝動作継続（移動性の動詞)]

装着動詞にしても所持動詞にしても、(e) (f) のように、主たる出来事のタイプに規定される、特徴的な使用パターンがある。これは同じ主体変化動詞でも、第 5 章で分析した姿勢変化動詞や位置変化動詞の場合には見られなかったものである。

装着動詞と所持動詞は、主体が何かを身に着けていることを表す点では共通であるが、上記（e）(f) のようにそれぞれに特徴的な組み合わせでの使用が認められるだけでなく、時間的関係においても異なったふるまいが見られた。装着動詞の場合、(a') (c') (e') のように定形動詞が完成相であれば、基本的に、何かを（客体）を身に着けるという変化の局面、すなわち主体の動作の先行性が前面化する。

(a') 彼はカッパを着て庭を**掃いた**。
(c') 彼はカッパを着て校門の前に**立った**。
(e') 彼はカッパを着てスニーカーを**履いた**。

一方、所持動詞の場合、定形動詞が移動性の動詞の場合や、「持つ、抱える」といった使用頻度の高い動詞において、(b') (d') (f') のように、動作の先行性がはっきりしない。

(b') 彼はほうきを持って庭を**掃いた**。
(d') 彼はほうきを持って校門の前に**立った**。
(f') 彼はほうきを持って廊下を**歩いた**。

シテが意志的な出来事を表し、定形動詞が表す主たる出来事の実現のために必要な結果状態を前もって準備するという点では、装着動詞も所持動詞も変わらないかのように思われる。しかし、所持動詞においては、必ずしも動作の先行性が明確でない場合がある点で、装着動詞や、主体動作客体変化動詞（第 4 章)、姿勢変化動詞（第 5 章）とも異なっている。このことには、奥田（1983a）が示唆するように、とりつけ的（装着動詞）かふれあい的（所持動詞）かという動詞の意味的な特性が影響しているとも考えられる。

最後に、第 5 章で扱ったタイプとの関係について述べる。装着動詞や所持動詞がヒトの意志的な動作とその結果を表す主体変化動詞であることに注目すれば、シテが（g）姿勢変化動詞や（h）位置変化動詞である場合とともに、主体の変化としての結果状態を副次的に表すものとしてまとめられる。シテの役割的関係における意味は、次のように動詞のタイプに従った並行的なバリエーションとしてとらえることも可能である。

（g）彼は背筋を伸ばして庭を**掃いていた**。　　［シテ＝姿勢変化動詞：姿勢］
（h）彼は屋敷に入って庭を**掃いていた**。　　［シテ＝位置変化動詞：場所］
（a）彼はカッパを着て庭を**掃いていた**。　　［シテ＝装着動詞　　：服装］
（b）彼はほうきを持って庭を**掃いていた**。　　［シテ＝所持動詞　　：所持］

このような共通性を確認しておくことは、主体変化動詞の下位分類に従ってシテの役割的関係における意味が分化すること、また主体動作客体変化動詞や主体動作動詞といった他の動詞タイプとの異なりを確認するうえで必要であると思われる。

シテが所持動詞の場合について、奥田（1989）は次のようにも述べている。

> 定形動詞によってさしだされる動作のし手がなにかを身につけているのを、そのし手の《ふるまい状態》であるとみなすならば、ここの記述はパラグラフの (7)にもっていくべきである。そのときには、《ふるまい状態》のもとに《姿勢》と《服装》のほかに《携帯》をも理解しなければならない。　　（同：25）

しかし一方で、少なくとも定形動詞が継続相の例において、(e)（f）のような特有の構造は、これまで明確に記述されてこなかった。奥田（1989）では個別的には取り出されていたものの、動詞タイプを明示した整理ではなかったために、その共通点と異なりは見えにくかった。本章ではそのことを動詞タイプに沿った分析によって記述した。

また、二つの出来事に時間的関係に関しては、所持動詞においても、姿勢変化動詞においても、動作の先行性が認めにくい場合があった。しかし、そのあり方は異なっている。所持動詞においては、主に移動性の動詞との組み合わせや文脈の影響によってこのことが確認できたのに対して、姿勢変化動詞の場合では、主体の身体部分における結果状態が、主体の内面の表現へずれ込むことによるのであった。

今後の課題としては、装着動詞・所持動詞の機能面を明らかにする必要がある。そのためには、第 4 章で扱った主体動作客体変化動詞との関係をも考察し、典型的な他動詞である主体動作客体変化動詞におけるシテの構文的機能を明らかにしたうえで、客体ではなく主体に及ぶ変化を表すという点で複合的な装着・所持動詞の考察に進む必要がある。現時点では、少なくとも、主体の様態を表すという点のみをもって、ただちに修飾語的であるとは言えないのではないかと考えているが、主体動作客体変化動詞とあわせ、ヲ格名詞との関わりを中心に据えた分析を通じて検証したい。

第 7 章　シテが主体動作動詞の場合

7.1.　はじめに

本章ではシテが＜主体動作動詞＞である場合を対象とした記述を行う。

最初に確認しておきたいのは、シテが主体動作動詞である場合は、主体動作客体変化動詞（第 4 章）、主体変化動詞（第 5、6 章）に比べると使用頻度が低いという点である。この点で、外的運動動詞の三つのタイプの中では周辺的なケースと言えるかもしれない。しかし、周辺的であるとしても、二つの出来事間の関係のバリエーションを体系的に記述するためには決して無視できないケースである。

主体動作動詞が表す出来事のあり方は、主体動作客体変化動詞や主体変化動詞とは異なっている。主体動作客体変化動詞や主体変化動詞は＜主体の動作＞のみならず＜客体の変化＞や＜主体の変化＞の側面をもとらえている。このような動詞の基本的性質と連動して、シテがこれらの動詞である場合には、次のような基本的特徴が認められた。第一に、客体や主体の＜変化結果としての状態＞が、主たる出来事と同時的に存在する。第二に、定形動詞のアスペクトが完成相の場合に＜主体の動作の先行性＞が認められる場合がある。これは基本的に、変化結果としての状態が「主たる出来事のために意図的に準備されたものである」という関係を条件としたものであった。

これに対して、主体動作動詞は、客体や主体の変化をとらえていない。これと連動して、シテが主体動作動詞である場合には、次のような特徴が見られる。第一に、シテは主たる出来事に対する副次的な出来事としての＜主体の動作＞を表す。主体動作客体変化動詞や主体変化動詞と違って、変化結果としての状態を表すのではない。第二に、従って、「主たる出来事のために変化結果としての状態を準備するかどうか」という観点からは、シテが表す出来事の先行性はとらえられない。

と言っても、主体動作動詞において、二つの出来事の継起性や同時性が認められないのではない。テクストの流れの中で、二つの出来事の間には、それらが連続して起こるか（継起）、重なって起こるか（同時）という違いがやはり認められる。ただしそのあり方が、主体動作客体変化動詞や主体変化動詞とは異なっているのである。また、二つの動作が継起的であるか同時的であるかが判断しにくく、定形動詞が表す出来事との関係や文脈の解釈のし方によって、どちらとも取れるケースも多い。

しかしながら、解釈による異なりが生じやすいとしても、分析者の感覚で漠然と決めてよいものではない。ある解釈が優勢であるならばその条件を、複数の解釈が生じるならばその可能性を、文が表現する出来事のあり方とともに検討することが必要である。

以上の前提をふまえて、分析では、二つの出来事関の関係について、時間的関係の側面を中心に、主体動作動詞の下位分類や文法的特徴に基づいて整理・記述する。

7.2.　先行研究

以下、奥田（1989）の主体動作動詞に関わる記述を確認する。奥田（1989）では、「二つの

動作の複合」の下位タイプである「副次的な動作が主要な動作と同時的に進行する場合」のなかに、主体動作動詞の例が挙げられている。この場合、「副次的な動作は主要な動作に付随して生じていて、主要な動作にからみついているという意味で、ふたつの動作は複合的な動作」をかたちづくっている（同：23)。しかし、この種の例は極めて少ないという。数が少ないこともあってか、挙げられた例には意味的に様々なタイプが含まれている印象がある[48]。

用例の分類にあたっては、奥田（1989）の次のような指摘も重要である。

> じっさい、ひとりの人間の、同質の、ふたつの動作が同時に進行するということは考えられないだろう。とすれば、ひとりのし手による、同時に進行する、ふたつの動作はつねに異質のものでなければならない。したがって、し手のおなじ、ふたつの動作が同時に進行するばあい、一方が肉体的な動作であれば、他方が心理的な、生理的な活動であったり、言語活動であったりするだろう。（同：23）

奥田（1989）は「心理活動に付随しておこってくる表情やみぶり」の場合に、「沼田はくちびるをかんで、かんがえこんだ」のように主体動作動詞によるものとともに、「目をつりあげて、信吾をにらんだ」のように第 5 章で記述した＜姿勢変化動詞＞による場合が挙げている。また、同時的な複合の特殊な場合として「三吉は鍬をたずさえて、成長したねぎなどをみにいった」のような「携帯」の場合を含めているが、これは本研究では第 6 章で記述した＜所持動詞＞によるものである。

このように、主体変化動詞（姿勢変化動詞、所持動詞）か主体動作動詞か、という区別よりも、これらに共通する意味カテゴリーや構文的特徴を記述することが重要であるとも思われるが、本研究はまずは動詞のタイプに沿った記述を進めるため、これらと区別するかたちで主体動作動詞の例を扱い、必要な場合は、異なるタイプの動詞との関係について述べることとする。

7.3. 用例の分析

はじめに、分析における主体動作動詞の下位分類を提示する。工藤（1995）の主体動作動詞の下位分類とは異なる部分がある。また＜客体への接触＞を表す動詞には、「抱える、抱く、つかむ」など第 6 章で扱った所持動詞と重なるものを＜客体の保持＞として含めているが、これは、所持動詞の使用には主体動作動詞としても記述することが可能である場合が見られるためである。また主体動作動詞のみならず、「笑みを浮かべる」「ため息をつく」「声を出す」のように、主体動作客体変化動詞が名詞と組み合わさって主体動作動詞相当の意味になる場合についてもここで挙げておく。

---

[48] 奥田（1989）が挙げている例は、以下のようなものである。
・お雪は母の手紙を顔におしあてて、ないた。（家上）
・隣のボックスでは、ダンサーのむきだしの肩をだいて、しんねりとささやきあっているのもいる。（めし）
・「すこしお酔いなさいよ。あなた」と、中年増の妓が銚子をもちそえて、すすめた。（家下）
・ニヤリとわらって、田中はほかの職員の顔をながめまわした。（青い山脈）
・「小さい時こうして習ったわ」と、棹をのぞきこむと、
「く、ろ、かあ、みい、の……」と、幼げにうたって、ぽつんぽつんならした。（雪国）
・「ああ、今朝は卵はやめておこう」と信吾はいって、生卵のはいった小鉢を菊子にわたした。（山の音）

○客体への接触：いじる、打つ、かじる、おさえる、押す、噛む、蹴る、こする、刺す、さする、触る、しごく、叩く、つく、つつく、つねる、殴る、撫でる、なめる、ぬぐう、はたく、払う、拭く、踏む、触れる、揉む、指さす　など

（客体の保持：抱える、抱く、つかむ、つまむ、握る、持つ、手に取る　など）

○客体の動き：動かす、こぐ、飛ばす、流す、鳴らす、振る、回す、揺らす　など

○移動動作：泳ぐ、歩く、飛ぶ、這う、走る　など

○感情表出動作：笑う、微笑む、笑顔になる、笑み（笑い、笑顔）を浮かべる（見せる、たたえる、作る）　泣く

○態度的動作：うなずく、首を振る、おじぎ（会釈）する、頭を下げる　など

○生理的動作：息を吸う（吐く）、息を殺す（つめる、止める、のむ）、ため息をつく、汗を流す、泡を吹く、いびきをかく、よだれを垂らす、せき（あくび、くしゃみ）をする　など

○言語活動：言う、答える、叫ぶ、ささやく、しゃべる、尋ねる、話す、読む　など
声を出す、声（悲鳴、叫び声）をあげる　など

○認識活動：見る、見下ろす、見上げる、見返す、見やる、見つめる、覗く、覗き込む、眺める、目（視線）を向ける（やる、落す、走らせる）、一瞥する、一瞥を投げる、睨む、睨みつける、嗅ぐ、聞く、読む　など

以下、次のような構成で用例を見ていく。定形動詞が継続相の場合（7.3.1）は用例が少なく、バリエーションを十分に取り出すことが難しいが、できる限り分類の基本的な特徴を確認することとする。定形動詞が完成相の場合（7.3.2）では、シテが主体動作動詞の場合においても主体の動作の先行性が認められる場合があること（7.3.2①）と、定形動詞のアスペクトに関わらず、動作の先行性を認めにくい場合があること（7.3.2②）を述べる。なお、それぞれの場合において、出来事間の関係の違いを示す構文的特徴として、奥田（1989）、仁田（1995）等の先行研究でも言及されているシナガラとの言い換えを検討する。

7.3.1.　定形動詞が継続相の場合
7.3.2.　定形動詞が完成相の場合
①シテが表す出来事の先行性が認められる場合：二つの出来事の継起的関係
②シテが表す出来事の先行性が認めにくい場合：二つの出来事の同時的関係

7.3.1.　定形動詞が継続相の場合

定形動詞が継続相である用例について、その時間的関係を見てみると、二つの出来事が同時的な関係にある場合がほとんどであった。バリエーションとしては、シテが表す出来事（動作）が多回的であって、その動作の繰り返しが定形動詞の表す出来事と同時に進行する場合（例 1、2）と、シテが表す出来事（動作）が一回的で、その動作の持続が主たる出来事

と同時的に存在する場合（例 3、4）とがある。前者は二つの出来事の動的な重なり、後者は静的な重なりと言えるだろう。シテが表す動作のタイプとしては、例（1）（3）（4）は客体との接触、例（2）は客体の運動を表す場合である。

（1）冴子はママを向いた。
　　ママは客の背を叩いて**笑い声をあげていた**。（眠り猫 173）
（2）急づくりの舞台では踊子が三人、手と足とをセクシーにくねらせて**舞っていた**。（深い河 200）
（3）「どうした？」
　「ねえ、寒くて、震えがとまらないのよ。お医者を呼んで貰えないかしら……」
　ゆき子は富岡の腕を摑んで、小刻みに**震えている**。（浮雲 056）
（4）れんは、火照った頬にまわりの胡散臭げな目を感じながら、軽く唇を噛んで窓の外へ目を**向けていた**。普段は独り言などめったに洩らすことはないのだが、どういうものか今日に限って、時折、胸の底の方からメタンガスの気泡のようなものが駆け昇ってきては、喉元で弾ける。そのたびに、あ、また――と急いで唇を噛むが、いつだって言葉はもう口に出てしまっている。（白夜を 194）

例（3）（4）のようにシテが一回的な動作の持続を表す場合は、シテの動詞のタイプが限られている。一つは例（3）の「抱える、抱く、つかむ、つまむ、握る、持つ、（手に）取る」など、客体の保持を表す動詞の場合である。これは第 6 章の所持動詞でもあるが、所持動詞の例と異なって、主たる出来事の際にモノを所持する（あるいは持ち運ぶ）のではなく、単にモノとの接触を表している例である。

例（4）の「噛む」、例（5）の「見る」、例（6）の「笑う」に類する動詞も、一回的な動作の持続を表しうる。ただしこれらは常に一回的な動作の持続を表すわけではなく、修飾・文脈によっては、多回的な場合（「がりがり噛む」「ちらちら見る」「くすくす笑う」）もあれば、一回的でも持続のない場合もある（「がりっと噛む」「ちらっと見る」「くすっと笑う」）。

（5）湯殿のせまい玄関には、下駄が一足だけ脱いであり、棚の脱衣籠から兄の角帯が垂れ下っていた。驚かそうと思って、黙って仕切りのガラス戸を開けると、兄の清吾が湯舟のなかからこっちを見て**笑っていた**。（白夜を 198）
（6）「大分やつれたじゃないか……」
　「ええ、少しおいしいものでも食べて、ゆっくりしていれば、貴方みたいに肥って来るでしょう……。女って、お金をかけてくれる人がなくちゃ、綺麗にはならないもんなのね」
　伊庭はにやにや笑って、耳垢を**ほじくっていた**。（浮雲 047）

例（1）～（6）では、いずれもシテが意志的な出来事としての動作を表しているが、シテが主体の心理・生理的な側面を反映した非意志的な出来事を表す場合もある。例（7）～（9）のように、シテが＜客体の動き＞を表す他動詞であって、主体の身体部分を表すヲ格名詞を客体

とする場合が特徴的である。例（10）のような自然発生的な生理現象を表す動詞（フレーズ）としては、「汗を流す、泡を吹く、いびきをかく、よだれを垂らす」といったものがある。

（7）大塩さんも、いつのまにか幼子のように身を震わせて**泣いていた**。（私の男 197）
（8）「いや、男じゃない。女だよ」
「へえ――。珍らしさ。うちゃ心中しよう、その人と」
くるくる眸をまわして**笑っている**。似ているといえばその眸が似ているのだろう、とそう思った。（リツ子 026）
（9）足が不自由なために兵役を逃れている若番頭の村中は二十五歳だが、悪い右足を引きずって**歩いている**。（赤い月 170）
（10）語録は彼のよごれた爪の間から床に落ちた。鼾をかいて彼は夢を**みていた**。（深い河 208）

以下、注意すべき点について述べる。第一に、例（11）～（13）では、ここまでの例と同様に、二つの異なる出来事（動作）が同時的に進行しているのであるが、シテが表す動作は、主たる出来事に対して意図的に付け加えられる（あるいは「そうしようとしてそうしている」）というより、主たる出来事の実現に従って、自然に、同時発生的に実現すると言った方がよいものである。これを＜同時発生的な付随動作＞としておく。

（11）今日はほかの社員も大勢、この二十階のマロン色のカーペットを踏んで、忙しそうに**行き来していた**。（顔に降 186）
（12）家に帰る前の、あとすこしの楽しい時間を惜しむように、中学生たちは真新しい制服をひるがえして、きゃあきゃあと**駆けまわっていた**。（私の男 222）
（13）うっすら雪にまぶされた起伏に富む牧場では、何十頭もの馬が雪を蹴散らせて**駈けていた**。（優駿 176）

このような観点で見ると、すでに見たシテが非意志的な出来事としての動作を表す場合（例7～10）も、同様に、主たる出来事の実現に従って生じてくる動作を表している。

第二に、定形動詞が継続相の場合では実例が見られなかったのであるが、これまで見た例と違って、次のように、二つの出来事（動作）が同時に成立しているとは言えない場合がある。

（14）私は先生の部屋のドアをノックして、しばらく部屋の前で**待っていた**。
（15）彼は黒板を一度ちらりと見て、ノートに何かを一生懸命に**書きこんでいた**。

これらの例では、主たる出来事が進行している時点ではシテが表す動作はすでに終結している。重要であるのは、シテが表す動作が、主たる出来事に対して何らかの間接的な影響を与えている点である。例（14）では、「ドアをノックする」という動作に「部屋に入ることを他者に予告する（気づかせる）」ことが、例（15）は「黒板を見る」という動作に「書かれた内容

を認識する」ことが想定され、かつ、主たる出来事がそれらの効力のもとで行なわれるという関係がある。このように、シテが表す動作が主たる出来事に与える影響のことを＜動作の効力＞と呼ぶことにする。

このような例では、主たる出来事の成立にあたって効力が先行して成立していなければならないという点から、シテが表す動作の先行性を想定することができる。ただし、定形動詞が継続相であり、シテが表す動作の先行性（二つの出来事の継起性）は背面化している。

シテが表す動作の効力が、主たる出来事の成立のために必要であるという点では、主体動作客体変化動詞や主体変化動詞の場合において取り出した、客体や主体の＜変化結果としての状態＞と共通している。しかし、変化結果としての状態が主たる出来事と同時的に存在することは主体動作客体動詞や主体変化動詞の基本的な意味特徴として認められるのに対し、効力は主体動作動詞であれば必ず認められるというわけではない。主たる出来事との関係や文脈、言語外的な知識からも影響を受けて読み取られるものである。

例（16）では、「押す」動作が持続していて同時的関係がある（「押しながら待っていた」と同義）とも、「押す」動作自体は終わっていて、効力だけが残っているとも解釈できる。

（16）成瀬は、もうすでにやってきたエレベーターの中に入り、「開」のボタンを押して**待っていた**。（顔に降 153）

このような動作の効力と、それに基づいた動作の先行性については次節でより詳しく記述する。

7.3.2. 定形動詞が完成相の場合

次に、定形動詞が完成相の場合について、二つの動作の時間的関係を中心に分析する。まずシテが表す主体の動作に先行性が認められる典型的な場合を見たのち、先行性が認められない、あるいはどちらとも取れる場合について見ていく。

①シテが表す動作の先行性が認められる場合：二つの動作の継起的関係

定形動詞が継続相である場合は、二つの動作が同時的である場合がほとんどで、時間的関係は相対的に単純であった。しかし、定形動詞が完成相の場合には、動作の効力が存在することによって、シテが表す動作の先行性が認められる場合がある。多くの場合、効力は外的に表れるものではなく、ヒトの内的な認識を介していて間接的である[49]。

例（17）～（20）では、シテが表す接触によって、他のヒトに何かを気づかせるという効力

[49] シテが表す動作に、目に見える具体的な効力ないし結果が読み取れる場合もある。以下の例では、氷を叩いて割ることが水をすくうための効力として生じているが、このような例は少数であり、端折ったニュアンスがある。動作が客体にもたらす具体的で外的な変化結果の表現は、主体動作客体変化動詞の領分である。
・豆腐屋の水が、こんなに冷たいものとは知らなかった。耕作の家の土間の隅にある大瓶の水もがんがんに凍る。柄杓の柄でばんばん氷を叩いて水を**すくう**。（泥流地 265）

が生じている。ヒトに直接接触する例（17）（18）に対して、モノを介した例（19）（20）の方がより間接的である。

（17）本当に聞えないのだか聞えないフリをしているのか、作造は悠々と煙管をくわえていたが、仙吉はやわらかく作造を突っついて、物かげへ**呼んだ**。
「放したほうがいい」（あ・う 075）
（18）「下手だな」
拓一が呟くと、撃っていた一人がふり返り、
「何をっ!?」
と、ぎょろりと目を向けた。耕作は拓一の浴衣の袖を引っ張って、あわてて**逃げた**。拓一がニヤニヤしながら従いてくる。（泥流地 298）[50]
（19）「ごめんください」
私は軽くドアをノックして**入っていった**。（顔に降 114）
（20）七瀬はブザーのボタンを押して、しばらくポーチに**佇んだ**。（家族八 001）

例（21）（22）はヒトやモノへの接触を表しているわけではないが、ヒトに何かを気づかせるという効力がある点では同じである。

（21）店を変えて飲んで、十二時を過ぎたどうに家を出た。花はだいぶ酔っていて、タクシーをつかまえて乗せたけれど、赤い顔で後部座席に丸まっていて、ちゃんと帰りつくのか心配になった。送っていって、父親だか親戚の人だかヒモだかに殴られた噂を思いだしてすこし迷ったけれど、心配なので結局自分も乗りこんだ。花をゆすって、**聞く**。
「家、どこだっけ」（私の男 324）
（22）同僚のバスがクラクションを一発、沢井の背中を叩くように鳴らして**走り出した**。（ユリイ 089）

例（23）～（26）では、何かを指示する動作によって、コミュニケーションの相手であるヒトに注意を向けさせるという効力が生じている。例（23）（26）のように外的な対象を指示するばかりでなく、例（24）（25）のように主体自身を指示する場合もある。また指示に実際の接触がともなわない場合（例 23、24）も、接触がともなう場合（例 25、26）もある。

（23）博正を見ると、藤川老人は杖をつきながら近づいて来て、
「千造さん、いい馬作ったんだってェ」
と言った。

[50] この例は、「引っ張って」をヒト（拓一）の注意を喚起する先行動作としてではなく、「耕作が拓一の袖を引っ張りながら**逃げた**」のような同時進行的な出来事として解釈するなら、動作の先行性とその効力は読み取れなくなる。しかし、耕作は拓一の弟であり、どちらかというと気弱な耕作が不敵な拓一の手を引くようにして逃げるといった状況は考えにくい。

「あの黒いやつですよ」

検査を受けているハナカゲの傍にぴったり寄りそったクロを指差して、博正は藤川老人の反応を**窺った**。(優駿 201)

(24)シンシアが、私にコーラの入ったグラスを持ってきてくれた。まだ昼食も摂っていないことを思い出し、急激に喉が渇いた。ひといきに飲み干すと、テーブルの上のポップコーンを勧められ、悪びれずに食べた。

すると、あまり日本語のできないジュリーが胸を指さして、針で縫う**真似をする**。さきほど成瀬に頬を張られた時に取れたボタンのことらしい。(顔に降 131)

(25)「代貸がわざわざ東京まで？」

こんどは長田が飯塚を覗きこんだ。代貸とは組織のナンバー・ツウだ。

「名前のとおり、わたしは三男坊でね」

飯塚は薄くなりはじめた頭頂部を平手で叩いて、長田の質問とは別のことを**答えた**。(眠り猫 099)

(26) 私は積み上げた段ボールの箱の一つを叩いて、「これは自分で運びます」と**言った**。(作例)

「息を吸う」という動作が心理・生理的な効力を残している場合がある。例(27)では病室に入る前の心の心理的な準備として効いている[51]。

(27)「あ……。あり、が……」

ありがとう、と言いかけて、わたしたちにはそぐわない言葉のような気がして、飲みこんだ。おおきく息を吸って、ため息のようにかすかに**ささやいた**。(私の男 258)

(28)息を深く吸いこんで、病室のノブをぐっと**握った**。胸の上に片腕をのせて妻は眠っていた。(深い河 004)

シテが表す言語活動が、主たる出来事の先ぶれ、ないし行動の前もっての説明として効力を残す場合もある[52]。ただし、言語活動を表す動詞の例は数が多く、全面的な分析はできていない。

(29)「私、病院車に行かなくては」

と言って美咲は**立ち上がった**。(赤い月 272)

(30)「じゃあ、ぼくがお手本を見せましょう」そう言ってジャンプ台に**上がった**。(空中ブ 130)

---

[51] 呼吸に関わる動作としては「吸う」と「吐く」が対称的であるが、「息を飲む」「安堵の息を吐く」「ため息をつく」のような場合は、基本的に非意志的な出来事としての呼吸であり、主たる出来事のために効力を残すわけではない。

[52] 以下のように「声をあげる(出す)」「叫ぶ」のような場合には、「言う」などの言語活動を表す動詞と共通する部分もあるが、シテが非意志的な出来事としての言語活動を表す場合(「あっと叫んで**立ち上がった**」「悲鳴をあげて**走り去る**」など)とも連続している。

・「ただいま」

洪作はいつもより大きな声を出して、玄関の戸を**開けた**。どうせ伯母に叱られるなら、元気よくはいって行こうという気持だった。(夏草冬 208)

(31)「ひどいですね。靴のなかへ水がはいった。」と修一は言って、玄関で靴下を**脱いだ**。(山の音 058)

(32)「あんた、エッチラオッチラ歩いて、つらそうですなあ。杖か何か持って行きましょうか」

シゲ子はそう云って、接戦訓練用の竹槍を**持って来た**。さっき家主の奥さんが作ってくれた竹槍だそうだ。(黒い雨 119)

そのほかに、小説の地の文では、「うなずく、首を振る」といった態度的動作を表す動詞による例がよく見られるが、これらは単にシテと定形動詞の表す二つの出来事のみならず、シテが表す出来事にさらに先行する、態度を引き出す言動や行動を表す部分との関係の中でとらえる必要があるだろう(例 35 の「会釈して」は、定形動詞が表す出来事に先行して態度を示すことが効力であると言えるだろうが)。

(33) 僕はポケットからレモンドロップを出して、ひとつ口に入れ、笠原メイにも勧めてみた。彼女は首を振ってかわりに煙草をまた**とり出した**。(ねじま 031)

(34)「今ここで開けてみてよろしいのでしょうか?」

間宮中尉は首を振った。「いや、申し訳ありませんが、どうぞお一人になられたときに開けられるようにという、故人の指示でありました」

僕はうなずいて、その包みをテーブルの上に**戻した**。(ねじま 083)

(35)「波子さん、どうです、一曲踊っていただけませんか」

「よろこんで」

波子はバネのついた人形のように立上がった。

「失礼」

大杉は勇太郎に形ばかりの会釈をして、波子を腕に**抱いた**。(赤い月 312)

ここまで見てきた、二つの出来事の継起性を確認する文法的特徴は、シナガラでの言い換えである。基本的に動作の同時性を表すシナガラでシテを言い換えると、動作の先行性とそれによって成立する効力が読み取れなくなり、二つの出来事の時間的関係が変わる。

(18') 耕作は拓一の浴衣の袖を引っ張りながら、あわてて**逃げた**。

(20') 七瀬はブザーのボタンを押しながら、しばらくポーチに**佇んだ**。

(22') 同僚のバスがクラクションを一発、沢井の背中を叩くように鳴らしながら**走り出した**。

(23') ハナカゲの傍にぴったり寄りそったクロを指差しながら、博正は藤川老人の反応を**窺った**。

(26') 私は積み上げた段ボールの箱の一つを叩きながら、「これは自分で運びます」と**言った**。

(28') 息を深く吸いこみながら、病室のノブをぐっと**握った**。

(29')「私、病院車に行かなくては」と言いながら美咲は**立ち上がった**。

(31')「ひどいですね。靴のなかへ水がはいった。」と修一は言いながら、玄関で靴下を**脱いだ**。

二つの同時的に行なうことが不自然（例 17’、19’、24’、32’）ないし不可能（例 27’）であり、シナガラとの言い換えが成り立たない場合もある。

（17’）？仙吉はやわらかく作造を突っつきながら、物かげへ**呼んだ**。
（19’）？私は軽くドアをノックしながら**入っていった**。
（24’）？すると、あまり日本語のできないジュリーが胸を指さしながら、針で縫う**真似をする**。
（27’）？おおきく息を吸いながら、ため息のようにかすかに**ささやいた**。
（32’）？「あんた、エッチラオッチラ歩いて、つらそうですなあ。杖か何か持って行きましょうか」
　　シゲ子はそう云いながら、接戦訓練用の竹槍を**持って来た**。

また、これらの場合、定形動詞を完成相から継続相に言い換えると、例（18”）のように動作の先行性がとらえられなくなって、時間的関係に違いが生じるか、例（27”）のように言い換え自体が不自然になる。シテをシナガラでの言い換えができないのと同様の理由で、定形動詞を継続相にすることで、二つの出来事（動作）を同時に行なうことが表現されるためであると考えられる。例（27”）では、二つの出来事が同時的に行なわれることが不可能であり、定形動詞の「ささやいていた」を継続相ではなく（動作）パーフェクト的に解釈しなければ不自然であろう。

（18”）耕作は拓一の浴衣の袖を引っ張って、あわてて**逃げていた**。
（27”）？おおきく息を吸って、ため息のようにかすかに**ささやいていた**。

以下、注意すべきタイプについて確認しておく。

（i）動作の持続に基づく動作の先行性が認められる場合

シテが表す動作が完結して効力を残しているのではなく、動作自体が持続している場合にも、先行性が認められる場合がある。シテが表す出来事（動作）は、主たる出来事と同時的に持続しているのだが、その持続の開始が主たる動作に先行しているのである。

ただし、このような関係が明確に見られるタイプとしては、今のところ、シテが客体の保持を表す動詞である場合しか取り出せていない。この場合、客体を保持する動作の持続の中で主たる出来事を行なうために、「保持していない状態」から「保持している状態」へ移る変化の局面の先行性が認められる。中でも、保持される客体が主たる動作の客体でもある場合（例 36、37）は二つの出来事の継起性がはっきりしている。

（36）ゆき子は、富岡の両の手を取って力いっぱい**ゆさぶった**。（浮雲 103）
（37）波子はカバンの中から札束をつかんで、それをぐいぐいと伊達締めの中へ端から**押し込んでいった**。
（38）そろそろおなかの目立つ禮子は、奥さんにそれだけ言いたくて、と玄関で挨拶するとすぐに帰り支度に

なった。

たみと寝巻姿の仙吉が、手をとって**引っぱり上げた**。（あ・う 050）

（39）信吾は喝食を取り上げると、両方の耳穴に通した紙紐をつまんで**ながめた**。（山の音 074）

これらは第 6 章の所持動詞でもある。しかし、代表的な所持動詞である「持つ」においては＜主たる出来事の際のモノの所持＞という役割的関係が認められたが、これは、あるモノを所持した状態で何かを行なうという、いわば付随的な関係であった。また、基本的に動作としての先行性が認めにくかった。ここでの例はそれとは異なっている。主たる出来事の直接の下地となる出来事としてのモノの保持を表しており、そのために主たる出来事に対してモノを保持する動作の先行性が認められる。上記のような例が所持動詞による例とすれば、周辺的なタイプとなるだろう。主体動作動詞によるものとすれば、以下のような、モノとの一回的な接触とその持続を表す例と連続させて考えることができる。

（40）『危ない！』

カールが私の頭を乱暴に押さえて、冷たい舗道に**押し付けた**。（顔に降 149）

（41）体が腐って死ぬかも知れないと言った福子を思いながら、昨日の霜に湿った豆殻を熊手にひっかけて、畠の上に**散らす**。（泥流地 362）

なお、これらの例では、シナガラと言い換えると不自然になる。二つの動作の継起性が明確であるため、シナガラを用いると二つの出来事が同時的に成立することになるためである。

（36’）？ゆき子は、富岡の両の手を取りながら力いっぱい**ゆさぶった**。

（39’）？信吾は喝食を取り上げると、両方の耳穴に通した紙紐をつまみながら**ながめた**。

（40’）？カールが私の頭を乱暴に押さえながら、冷たい舗道に**押し付けた**。

（41’）？昨日の霜に湿った豆殻を熊手にひっかけながら、畠の上に**散らす**。

（ii）「見る」などの認識活動を表す動詞の場合

「見る、読む、聞く」などの認識活動を表す動詞において、動作の効力あるいは持続に基づく動作の先行性が認められる場合がある。このタイプの動詞は、小説の地の文における使用頻度が高く、バリエーションも複雑であるため、ここでまとめて確認しておく。

多いのは、次のように、主体がある対象を認識する動作の効力が認められる場合である[53]。例（42）（43）ではモノを認識したことによって、主たる出来事（言語活動）が引き出されて

[53] 「見る」ことで他者の認識に何らかの効力を与える場合もあるが、このような例は少ない。
・ピストルを背中にあてられ、両手をあげた格好で、男はちらりと波子に一瞥を投げて部屋を**出ていった**。悲しげな視線だった。（赤い月 289）
・その時、ゴルフ練習場の方角から、一人の中年の女が黒い自転車をひいてこっちに歩いてきた。私は成瀬に目で合図して、急いで階段を**降りた**。（顔に降 087）

いる。例（44）（45）では言語活動の相手であるヒトに対して視線を向けることが、その相手に対する言語活動の先ぶれとなる、いわば視覚的刺激として効いている。例（46）は「見る」という動作が、言語活動を引き出す対象としてヒトを認識することと、かつ言語活動の相手であるヒトを視覚的に刺激することの、両方の性質を持つ場合である。

（42）増矢が腕時計を見て、三時かと**つぶやいた**。（優駿 223）

（43）波子から手渡されたのは、ロシア正教の十字架だった。エレナの形見だ。
それを見て、氷室は**言った**。
「奥さん、私はあなたに、一つ訊きたいことがあるんですけど……」（赤い月 240）

（44）節子は耕作を見て、
「小菊ちゃんも踊るのよ」
と**言った**。（泥流地 301）

（45）多田は料亭の下駄をつっかけて慌てて走り寄って来た。長身の多田を見あげて、平八郎は**言った**。
「また、馬を買うかもしれん」優駿 208）

（46）玄関のドアの前に坐り込んでいる博正を見て、
「何やってんだァ、こんなとこで」
と千造が**訊いた**。（優駿 199）

これらの場合、動作が持続していてもいい（対象を見続けてもいい）のであるが、持続は義務的ではない（例 42、43 ではモノを見続けずに言語活動を行なってもよい）。

シテをシナガラに言い換えても不自然ではないが、表現される出来事間の関係が変わることになる。動作が先行して成立し、その効力のなかで主たる動作が行なわれるという継起性がなくなり、同時性が明示される。

（42’）増矢が腕時計を見ながら、三時かと**つぶやいた**。

（45’）長身の多田を見あげながら、平八郎は**言った**。「また、馬を買うかもしれん」

他に、例（47）のように、シテが表す認識活動によってもたらされた主体の認識が、主要な出来事を起こす契機となっている場合もある。「読む、聞く」といった動詞では、このような場合が多い（例 48、49）。

（47）すこし惜しかったが、さと子は帽子を返した。学生は受取るとひょいとさと子の頭にのっけた。そばのガラス窓を指さし、見てきなさいよ、というしぐさをした。
「いいんですか」
うなずくのを見て、さと子は**駈け出した**。（あ・う 069）

（48）その場で、菊子は手紙を読んで、

「お友だちからですけれど、中絶なさって、後がよくなくて、本郷の大学病院へ入院したんですって。」と**言った**。（山の音 100）

（49）「じゃ、帰っていいから」

ゆかりはほっと安堵したように、大きな溜め息をついた。それを聞いて、銀行員風の男が外に**連れ出していく**。（顔に降 077）

このような場合では、主たる出来事を行なうために、先行する動作によって効力を意図的に準備しているとは言えない。このことは定形動詞が非意志的な出来事や、思考・感情を表す場合、一層明らかである。原因とその結果の関係に近づいているだろう。

（50）「石村さん、こっちへいらっしゃい」

耕作は真っ赤になった。思いがけなく女教師の花井先生だった。真っ赤になった耕作は、ぺこりとお辞儀をした。へどもどしている耕作の背を押すようにして、拓一は花井先生に近づいて行く。と、腰かけた先生の隣りを見て、耕作は二度**びっくりした**。深城節子が先生と揃いの浴衣を着て、にっこり笑って耕作を見つめていたのだ。（泥流地 299）

（51）重松は岩竹さんの手記を読んで、何を措いても矢須子に気力を失わせてはいけないと**思った**。（黒い雨 139）

（52）「(…) もし吹雪にでもなったら一歩も歩けねえ。寒さは、……そうだね、酒が凍るくらいの寒さだ」

酒が凍ると聞いて伊東中尉が**唸った**。それは容易ならない寒さだと思った。（八甲田 098）

②シテが表す動作の先行性が認められない場合：二つの動作が同時的関係

定形動詞が完成相であっても、シテが表す動作の先行性が問題にならない場合がある。先行性が問題にならないというのは、二つの出来事が同時的であるとしか解釈できないか、あるいは継起的とも同時的ともどちらともとれるということを意味する。以下、二つの出来事が両方意志的である場合と、いずれかの出来事が非意志的である場合の二つに分けて確認する。

まず、二つの動詞がどちらも意志的な出来事を表す場合である。二つの出来事が意志的であっても、動作の効力（あるいは持続）をもたらすためにある動作を先行させる、という関係性が認められない場合である。定形動詞のタイプに沿って整理して提示する。

第一に、定形動詞が移動性の動詞である場合を挙げる。例（53）～（55）では、シテが「引く、引きずる、引っ張る」といった動詞で、その動作は移動と同時的に持続しているのだが、その開始点（引く動作に入った時点）の先行性は読み取りにくく、引いている動作との同時的な関係としかとれない。例（55）のように主体の身体部分である「足」を「引きずる」場合は、生理的・身体的なものの反映であり、意志性が薄い。

（53）多田はぶつぶつ言っている行天を引きずって、部屋を**出た**。（まほろ 232）

（54）上着の下に札束を詰め込んだ襷をしている公平は重さに耐えかねて荒い息をしている。その手をかまわ

ず乱暴にひいて波子は**走った**。（赤い月 238）

（55）神田大尉は、重い足を引き摺って営門を**出た**。（八甲田 169）

例（56）～（58）では、シテが移動にともなう（多回的な）接触を表している。例（57）（58）では、シテが同時発生的な付随動作を表している。例えば例（57）では、「和具平八郎に近づいて行く」のに、意図的に霜柱を踏んでいるというより、歩く道に霜が降りているため、霜柱を踏むことが移動にともなって自然と、付随的に発生するということである。

（56）浅瀬と浅瀬のあいだには板の橋が水中に渡され、急流に流されぬようにロープが張ってありました。もう少し水かさが減れば、兵員輸送車や装甲車や戦車が楽にここに渡れるのは明らかでした。水中の橋ですから、航空機の偵察でもまず所在がみつけられません。私たちはそのロープを摑んで流れを**横切りました**。（ねじま 087）

（57）博正は霜柱を踏んで和具平八郎に**近づいて行った**。（優駿 191）

（58）声の主は、大きなぶどうの葉陰から、熊笹をかきわけて、がさごそと**現れた**。（泥流地 075）。

（59）勝手に死んじまったオーティス・レディングを、めいっぱいのボリュームで聴きながら、僕はタイヤを軋ませて**走り出した**。（霞町物 133）

（60）客は雪下駄を鳴らして**出て行った**。（泥流地 264）

重要なことに、以上の場合は、シテが表す動作の先行性が認められる場合と違って、シナガラと言い換えても出来事の同時的な時間的関係には変わりがない。

（54’）その手をかまわず乱暴にひきながら波子は**走った**。

（55’）神田大尉は、重い足を引き摺りながら営門を**出た**。

（57’）博正は霜柱を踏みながら和具平八郎に**近づいて行った**。（優駿 191）

（58’）声の主は、大きなぶどうの葉陰から、熊笹をかきわけながら、がさごそと**現れた**。

（59’）僕はタイヤを軋ませながら**走り出した**。

第二に、定形動詞が言語活動を表す動詞である場合にも、シテが表す動作の先行性が読み取りにくくなる場合が多い。言語活動が他の種の出来事と同時的に成立しやすいという意味的な特性と、二つの出来事間の関係が、必ずしも動詞の直線的な配列によっては表現されないという構文的な特性が、このことに影響していると考えられる。

次の例（61）（62）においてシテが表す出来事は、定形動詞が表す言語活動の内容を反映するものとして、主たる出来事と同時的に実現するものと解釈できる。前もってヒトに何かを気づかせるような効力を残すのではない。

（61）先輩をつついて「そんな、おかしな愛の告白、しないでくださいよ」とふざけた口調で**ささやいてみた**。

（私の男 310）

(62) 鞍馬口の門の前の、鶯いろの吉野石、茶色がかった美濃石、黒ずんだ貴船石、弥吉にはただの大石にしか思えない一つ一つを撫でて、石にも気質があるでエ、と喜七は**いった**。（櫻守 039）

次のような例では、言語活動の内容を表す部分（　　）がシテより前（例 63～65）、あるいは定形動詞より後ろ（例 66～68）に位置している。これらの例では、出来事の順序が語順と単純には一致しておらず、シテが表す動作の先行性も含め、出来事間の時間的関係がとりにくい。

(63) それから、

「お前もお前だし、両親も両親だ。――ばか者めが」

文太はきせるで煙草盆の縁を軽く叩いて**言った**。洪作は両親の分も一緒に憤られている格好だった。（夏草冬 232）

(64)「兵隊さんが雪沓を履いているぞ」

と少年がそれを指さして**言った**。（八甲田 152）

(65)「(…) そして彼女の名前はモリサキレミ。写真をよく見てくれ。モリサキレミと片仮名で書いてあるだろう」

「たしかにそう読めるな」湯川は頷いて**いった**。（予知夢 048）

(66) 望月の胸を突いて**怒鳴りつけた**。馬鹿野郎、商売だからに決まってるだろう。写真が載ってるほうがいい写真だから載せるんだよ。（クライ 067）

(68) ひときわ威厳のある男をさして、傍の中年の男が**叫ぶ**。

「中西さんも行くぞ」（泥流地 302）

(69) 耕作が返事をする前に、市三郎が大きくうなずいて**言った**。

「ああ、いいとも、いいとも。どうせ学校さ行く序だ」（泥流地 354）

次のように、言語活動の内容を示す部分をシテと定形動詞の間に位置させれば、語順に沿って、シテが表す動作の先行性が認めやすくなる。

(64') 少年がそれを指さして「兵隊さんが雪沓を履いているぞ」と**言った**。

(69') 耕作が返事をする前に、市三郎が大きくうなずいて「ああ、いいとも、いいとも。どうせ学校さ行く序だ」と**言った**。

また、これらも、シナガラで言い換えても同時性が明示されるのみで、時間的関係に変化はない。

次に、シテまたは定形動詞が表す出来事が非意志的である場合について述べる。このとき、主たる出来事のための準備という観点からは、シテが表す動作の先行性は問題にならない。こ

れは基本的に、主体の内面（心理・生理）的な側面の反映としての出来事（動作）を表す場合である。そもそもシテが表す動作の先行性が認められない場合と、シテが表す動作が先行するものと解釈できなくはない場合がある。前者では、シテをシナガラで言い換えても関係は変わらないが、後者ではシナガラで言い換えると同時性を明示することになる。しかしいずれにしても、シテが表す動作が積極的に先行しなければならない理由は読み取りにくい。つまり、シテが表す動作の効力や持続が、主たる出来事を実現するために、前もって成立していなければならない、という関係が認められないのである。

(70) 望月は唇を｛噛んで／噛みながら｝記者室を**飛び出した**。それが彼を見た最後だった。（クライ 068）

(71) 襖を手荒くあけて、房子が寝間着のまま出て来た。

新聞をよくも読まないで、びりびり引きさいて投げつけた。やぶくのにも力があまったが、投げても飛ばなかった。房子は横に倒れるようにして、散らばった新聞をはねのけた。

「菊子、そこの襖をしめときなさい。」と信吾は言った。

房子があけた襖の向うに、二人の子供の寝姿が見えた。

房子は手を｛ふるわせて／ふるわせながら｝、また新聞を**引きさいた**。（山の音 129）

(72)「すごいな、日本は前途洋々だな」

いつの間にかそばへ来ていた森田勇太郎が目を｛しばたたかせて／しばたたかせながら｝感嘆の声を**発した**。（赤い月 302）

(73)「あら、チヱさん、こんなとこにほくろあんのね」

と、上半身の背骨の右寄りにある小さなほくろを、指でつついた。

「やんだ、くすぐってい」

智恵子は軀を｛くねらせて／くねらせながら｝、くっくっと**笑った**。（智恵子 150）

(74)（これじゃやっぱり、ここの小父さん、水に手を突っこむと目まいがするって、ほんとだな）/　耕作は思う。いろはがるたにある「年よりの冷や水」という言葉が、何となく耕作にはわかったような気がした。耕作は洟を｛すすり上げて／すすり上げながら｝、手を**こすり合わせた**。（泥流地 266）

(75)「ああっ。」と信吾は息を呑んだ。三四寸の近くに顔を寄せて、生きた女がほほえんでいる。美しく清らかなほほえみだ。

目と口が実に生きた。うつろな目の穴に黒い瞳がはいった。茜色の唇が可憐に濡れて見えた。信吾は息をつめて、鼻が触れそうになると、黒目勝ちの瞳が下から浮きあがって、下唇の肉がふくらんだ。

信吾は危く接吻しかかった。深い息を｛吐いて／吐きながら｝、顔を**離した**。（山の音 079）

(76) せり出した木々の枝が作る日陰の下、ベンチに座る小夜子は、砂場で遊ぶ娘のあかりに視線を移した。公園内には、ほかに何人も子どもがいて、みんなだれかしらと遊んでいるのに、あかりは今日もひとり、砂場の隅で砂を掘りかえしている。あの子ももう少し大きくなったら思うのかしら、私がべつのだれかだったら……なんてことを。小夜子は｛ため息をついて／ため息をつきながら｝携帯電話を**取り出した**。着信履歴はない。自分の家に電話をかけて、留守番電話のメッセージを再生してみたが、そちらにも何も入っていない。待っている電話はまだきていないのだ。（対岸の 003）

(77) 曾山巻造の目が、不気味にすわったかと思った次の瞬間、巻造はいきなりちゃぶ台を両手で引っくり返し、

「やかましいやい！　俺の娘を､俺が煮て食おうと焼いて食おうと､お前ら餓鬼の知ったことかっ！」

加奈江も貞吾も、{悲鳴を上げて／悲鳴を上げながら} 次の部屋に**駆けこんだ**。煮〆や白あえが、板の間に散乱した。(泥流地 245)

(78) おくの四畳半で目を覚まして、夏布団の中でゆっくり目を開けると、天井の木目が見えた。いつもより低く感じられて、奇妙な圧迫感を覚えた。俺は {うなり声を上げて／うなり声を上げながら}、枕元においてある煙草に手を**のばした**。(私の男 346)

シテと定形動詞が隣接する場合は、さらに二つの出来事の一体性が強く感じられるだろう。

(79) 多田が笑ったことには気づかず、ばあちゃんは重そうにまぶたをしばたたかせて**言った**。

「適当なところで引き返してきたほうがいい」(まほろ 249)

(80) 目眩がした。わたしの顔色に、小町さんはますます楽しそうに、肉を揺らして**笑った**。(私の男 280)

(81)「おとうさん、明日、原宿」

「あぁ」

「男の子と。妬けないの？」

「妬くか、ばか」

花はくっくっくっ、と肩を震わせて**笑った**。(私の男 386)

(82)「お父さん、なにやってるんだろう。私たちがこんな目に遭っているのに。お父さんに早く会いたい」と美咲が鼻をすすり上げて**泣き出した**。(赤い月 268)

(83)「あと」と磯辺は息をのんで**たずねた**。「どのくらいでしょうか」(深い河 002)

これらの、シテが主体の内面（心理・生理）的な側面の反映としての動作を表す場合は、第 5 章で記述したシテが姿勢変化動詞である場合との共通性が認められる。この点については、7.4 節のまとめの中で述べる。

シテが意志的な動作を表すとしても、定形動詞が非意志的な出来事を表す場合、やはりシテが表す動作の先行性はぼやける。

(84) 美咲は自慢の長い髪をばっさりと切られ、坊主頭にされてしまった。

落ちた髪を拾いながら美咲は泣いた。そして、自分の坊主頭をなでてまた**泣いた**。(赤い月 285)

(85)「人間には赤と白があるんだ。知ってるか？」

福原は首を横に振って、**けげんな顔をした**。(眠り猫 013)

(86)「君もその店につとめてるの？」

信吾はおどろいて英子を見た。

「はあ。」と英子はうなずいて、少し**赤くなった**。(山の音 093)

次の例では、定形動詞が心理・態度的動作を表していて、シテが、その具体的な現れとなる動作を表している。「手を叩いて**笑った**」のように、定形動詞が具体的な動作を表していて、シテがその一部として同時的に行われるもう一つの具体的動作を表しているのではない。二つの具体的な出来事間の関係ではない点で、これまで見た例と性質を異にする。定形動詞が完成相の場合（例 87～89）に加え、定形動詞が継続相の場合も挙げておく（例 90、91）。

（87）耕作が中学を受験すると聞いた旧友は、みんな手を叩いて**喜んだ**。（泥流地 206）
（88）寺尾の死を佐木多加志から電話で教えられた瞬間、奈良は涙を流して何物かに**感謝した**。（優駿 262）
（89）「ふざけていたやつらは、行天に泣いて**謝った**。俺は謝ることができなかった。しでかしたことを告白する勇気がなかったし、黙っていればばれないとも思ったからだ。（…）（まほろ 255）」
（90）「なに、私だって日本刀を使えます。自分の女房の命くらい守ってみせます」
池田は言い、その向こうで村中は竹槍をしごいて**気合いを入れている**。（赤い月 179）
（91）「笑ってたか」
洪作が訊くと、
「笑ってたさ。みんな、きゃあきゃあ言って**悦んでいた**。手を叩いていた奴もあった」（夏草冬 206）

7.3.3. その他注意すべき場合

これまで見た主体動作動詞の用例のほかに、次のような場合がある。

①定形動詞のアスペクトの違いによって、時間的関係に違いが生じない。
②シテをシナガラに置き換えることはできない。

例えば、以下のような例である。

・太郎は輪を｛転がして／?転がしながら｝**遊んだ**。
・太郎はうちへ｛歩いて／?歩きながら｝**帰った**。
・太郎は｛声をあげて／?声をあげながら｝**叫んだ**。

第一の点については、これまで見た例でも、シテが継続相でも完成相でも出来事間の時間的関係が変わらない場合があった。7.3.2 節②で取り上げた、シテが表す動作に先行性が認められない場合である。しかしその場合、シナガラへの置き換えが可能であり、副次的だが一個の同時的動作への読み換えが可能であった。従って、第二のシナガラに言い換えができないという点から、これまでに見てきた二つの出来事間の関係をとらえたタイプとは区別しておく必要があるように思われる。以下では、主に事実の整理と確認のため、現在分類できているタイプについて見ておく。

次の例では、シテは、定形動詞が表す相対的に抽象的な出来事の具体的な方法を表している。定形動詞の側からすれば、シテが表す動作の意図・意味を説明していると言えるだろう。例(92)で言えば、「コーヒーをすする」という具体的な動作が、「ごまかす」という抽象的な出来事の方法として意味を持たされている。

(92) 事務所のソファに座り、早坂は言った。「森岡慎を知ってるでしょ」
「さあ、だれですかそれ」
尋ねたとたん、もしかしてシンちゃんか？　と多田は思い当たった。表情を動かさないようにしながら、インスタントコーヒーをすすって**ごまかす**。(まほろ 245)

(93) 遅咲きクライマー。安西は夢中で岩を攀じる悠木をそう呼んで**からかった**。(クライ 127)

(94) 平らなグラウンドで、生徒たちが輪っぱまわしをして遊んでいる。一人々々太い針金の輪をころがして**遊んでいる**のだ。(続泥流 009)

(95) 四人の楽士がそれぞれ木で作った楽器をならして**伴奏している**。(深い河 201)

これとは別に、定形動詞が表す動作の一側面を、シテが取り出して表しているというべき場合がある。上の場合と異なり、抽象的な出来事を表す定形動詞に対してシテが具体的な側面として動作を表しているのではなく、定形動詞が表す具体的な動作を、シテが一層詳しくするのに用いられている。以下、列挙する。

定形動詞が主体動作客体変化動詞であり、そのはたらきかけの全体から、シテが客体への接触あるいは客体の動きの局面を取り出して表している場合がある。この時、シテが表す客体への接触は、主たる出来事としてのはたらきかけの手段・方法を表していると言える。

(96) 松の木の火は消えていたが、電信柱の添木の根元が燃えていた。それを竹箒で叩いて**消しとめた**。(黒い雨 084)

(97) 自分の家のまわりは、勇太郎も波子も、全員で鎌をふるって草を**刈った**。(赤い月 327)

シテが「歩く、走る、這う、泳ぐ」などの移動動作を表す動詞で、定形動詞が位置変化動詞で移動を表す場合がある。定形動詞が移動そのものを、シテが移動の様態あるいは方法を表すというかたちで分析・分担が生じている。

(98) 大体において人の歩いて行く方角は、三滝公園か三篠鉄橋あたりの見当のようだから、僕らもその方角へ歩いて**行った**。(黒い雨 065)

(99) 少年はがっかりして材木と材木の間に身を沈めたが、足首の束縛を不意に感じなくなったので木材と木材の間から這って**出た**。(黒い雨 110)

(100) 小林と洪作が歩き出すと、二メートルほどの間隔をあけて、増田もまた歩きだした。洪作は校門を出たところで、うしろを振り返ってみた。増田はやはりうしろから歩いて**来ていた**。(夏草冬 141)

「(乗り物に) 乗る」は厳密には主体動作動詞ではないが、主たる出来事の移動に対してその様態または手段を表すという点では、同様の意味・機能を持つと言える[54]。

(101)「船へ乗って**行く**んだ。一ヵ月も船へ乗るんだ。そしてタコマに上陸し、すぐその日から洋食を食う」(夏草冬 230)

(102) この町に、小さな汽車に乗ってやって来た。明朝はやくバスに乗って**去る**。(桜島 026)

シテが「声を出す」「音を立てる」のようなフレーズで、定形動詞が表す主たる出来事に対して、その実現にともなって発生する声や音を詳しくする場合がある。「声」の場合、定形動詞は言語活動や「泣く・笑う」の場合が典型的である。例 (103) (104) (106) (107) のように「声」に修飾 (規定語) がある場合には、「～声で」と言ってもよい。

(103) 教室へはいって行くと、この春東京の官立大学を出て、すぐこの中学校へ就職して来た神代という若い教師が、独特のきいろい声を張り上げて、英語のリーダーを**読んでいた**。(夏草冬 163)

(104) ――宇治中尉殿。宇治中尉殿。

耳のすぐ側で高城が大きな声を出して**呼んでいる**。(日の果 009)

(105) 仙吉が奥へもどっていった。不意に男の号泣が聞えた。門倉だった。縁側の障子の外で、庭を向いて坐っていた門倉が、声を上げて**泣いていた**。(あ・う 009)

(106) 久美子は博正から本を受け取ると顔に近づけた。博正は車の中の明かりをつけた。久美子は小さな声を出して**読んだ**。教師に指名された生徒が国語の教科書を読んでいるような読み方だった。(優駿 080)

(107) 不意に、馭者は野太い声を張り上げて馬を**叱咤した**。橇は速力を増して揺れ出した。(白夜を 026)

(108)「どんな状態ですか、今日は」

「ええ、少しは会話もなさいました」

「あのことは当人は知らないでしょうね」と声を落として磯辺は彼女に**囁いた**。「私も黙っているんです。宜しくお願いします」(深い河 046)

(109)　仙吉が、ぐうとのどを鳴らし、初太郎にとびついた。自分の顔を白髪頭にこすりつけ、

「おとっつぁん」

とうめいた。それから、子供のように声を立てて**泣いた**。(あ・う 063)

(110) それを聞いた耕作が叫んだ。

「おれがもらってやる！」

思いがけない言葉に、深城は一瞬キョトンとしたが、声を上げて**笑った**。

「小作の小せがれの分際で、馬鹿も休み休み言え。学士でもなけりゃ、節子は嫁にはやらんが」(泥流

[54] 動詞の中止形による「歩いて、走って、泳いで」に対して「徒歩で、小走りで、平泳ぎで」のような移動の様態を表す名詞のデ格があり、言い換えてもよい場合も出てくるだろう。同様に「船に乗って**行く**」「バスに乗って**去る**」も動詞を用いず「舟で**行く**」「バスで**去る**」と言ってもよい。

地 099）

これらの場合を、「主体動作動詞」による例として扱うのがよいかには、疑問が残る。シテが移動の様態を表すという点では、主体動作動詞による「歩いて**帰る**」と主体変化動詞による「バスに乗って**帰る**」に区別を設けることは本質的ではないだろう。また、「歩いて**帰る**」のような例が、シテが表す手段的動作が多回的に行なわれるうちに定形動詞が表す主たる出来事が実現するもの考えれば、同じ主体動作動詞による「火を叩いて**消す**」「鎌をふるって草を**刈る**」や、主体動作客体変化動詞による「半紙を貼って提灯を**作る**」や「枝を燃やして**温まる**」のような例も同様に扱えるかもしれない（その場合、シテが主体の動作の側面を表すことが、これらのタイプに共通する特徴となる）。また「声を出して**読む**」「音を立てて水を**飲む**」のような場合は、名詞と主体動作客体変化動詞を中心としたフレーズ（慣用的なくみあわせ）であって、動詞のタイプよりむしろ様々な規定語によって受ける名詞のあり方を中心に据えて分析する必要があるように思われる。

また、定形動詞のアスペクトによって時間的関係の違いが認められないという点も、シテが一つの主要な出来事を側面的に修飾する要素として機能している場合には、継起か同時かという二つの出来事の総合的の時間的関係からとらえるのではなく、一つの出来事（動作）の内部構造の分析的表現としてとらえる方が適切かもしれない。

以上の点は、述語の修飾語化という重要な問題を考察するうえで、独立した一章を設けより詳しく論じるべき内容とも思われるが、バリエーションを十分にとらえるには用例数が少なく、全面的な考察を加える段階にないため、今後の課題としたい。

7.4. 本章のまとめ

本章では、シテが主体動作動詞である場合を対象として、定形動詞が表す主たる出来事に対して、シテが副次的な出来事としての主体の動作を表すことを前提に、次のことを指摘した。

①定形動詞が継続相の場合、基本的にシテは主たる出来事と同時的な主体の動作を表す。
②定形動詞が完成相の場合、シテが主たる出来事に先行する動作を表す場合がある。シテが表す動作の先行性は、基本的に、シテが表す動作の効力が、主たる出来事の成立のために必要なものとして準備される、という観点から確認できる。
③一方で、定形動詞が完成相でも、シテが表す動作の先行性が認められず、主たる出来事と同時的に成立する、あるいは同時的に成立してもよいと解釈される場合がある。

②の点は、主体動作客体変化動詞（4 章）、姿勢変化動詞（5 章）における、結果状態のあり方とも共通してとらえることができる。これらの動詞の場合では、客体や主体の結果状態が、主たる出来事の成立のために意図的に準備されるという点から、主体の動作の先行性が認められた。主体動作動詞における主体の効力や持続も、主たる出来事の成立のために同時的に存在

する下地となっている点で共通している。ただし、主体動作客体変化動詞や主体変化動詞では、変化結果としての状態が、動詞の本質的な意味特徴として備わっており、シテにおいても基本的に認められるのに対して、主体動作動詞が表す動作の効力は、本質的な特徴として常に認められるものではないという違いがある。

③のいずれかの動詞が非意志的な出来事を表す場合に、シテが表す動作の先行性が認めにくくなるという事実は、その他のタイプの動詞の分析からも予想できる。しかし、シテと定形動詞の両方が意志的な出来事を表していても、シテが表す動作の先行性が認めにくい場合があることが特徴的である。この場合、定形動詞のタイプが、移動性の動詞や、言語活動を表す動詞である場合に限られているようにも思われる。定形動詞のタイプを中心とした構造化ができていないため全面的には分析できていないが、第 6 章で分析したように、シテが所持動詞であって定形動詞が移動性の動詞である場合にその動作の先行性が認められないことと共通しているようにも思われる。

また③の点において、シテが主体の内的（心理・生理的）側面）の反映として、非意志的な動作を表す場合に、主たる動作に対する先行性が認められなくなるという現象は、第 5 章で記述した、シテが姿勢変化動詞である場合に表す＜主体の内的側面の現れとしての身体部分の様態＞と共通している。このとき、身体部分を表すヲ格名詞をとる再帰構造を基本として、シテが単なる外見的な身体部分の様態の描写ではなく、主体の心理・生理といった内的側面の表現に用いられていることが確認された。シテが主体動作動詞にも、同様の例がある（例 70～73、79～81、85)。シテが結果状態ではなく動作を表すという点で違いはあるが、同様に、主体の身体部分の外的な様態を通じて、主たる出来事にともなう主体の心理・生理的な反応を表現していると言える。以下のようなペアを見られたい。左が姿勢変化動詞によるもの、右が主体動作動詞によるものである。

・彼は体を縮めてポケットに手を**入れた**。／彼は体を震わせてポケットに手を**入れた**。
・彼は手を広げて**笑った**。　　／彼は手を叩いて**笑った**。
・彼女は首を傾げて、私の方を**見た**。　　／彼女は首を振って、私の方を**見た**。

これらを一括して、シテが表す副次的な出来事を「主体の内的側面の表現としての身ぶり」のようにまとめあげたうえで、結果状態によるもの（姿勢変化動詞)、動作によるもの（主体動作動詞）というバリエーションをとらえることも可能であろう。

最後に、主体動作動詞では、小説の地の文での使用頻度が高い「笑う」「見る」「言う」などの動詞については、意味関係の違いによって切断的に分類するよりも、語彙ごとにその用法の全体を整理することによって、むしろ意味・機能の広がりをとらえることができるかもしれない。これらの動詞の記述については、部分的に扱ったのみであるため、今後の課題である。

第 8 章　シテイテ（シテオリ）の分析

8.1.　はじめに

第 4〜7 章では、動詞の中止形のうち、第二中止形のシテを対象として分析してきた。これは、形式的な単純さ、使用頻度の高さ、表す意味の多様さといった点から、シテが動詞の中止形において基本的な形式であると考えたからである。

本章では、次の（a）の「倒れていて」のようなシテイテを主に分析する。そのために、第一中止形である、（b）の「倒れており」のようなシテオリについても扱う。

（a）庭の木が倒れていて、石垣が**崩れていた**。
（b）庭の木が倒れており、石垣が**崩れていた**。

1.2.1 節で述べたように、シテイテ（シテオリ）は、シテ（シ）に対して有標のアスペクト形式である[55]。本章はシテイテとシテオリに注目するため、シテとシテイテ、シとシテオリを区別し、まとめて呼ぶ必要がある際にはそれぞれ第二中止形、第一中止形とする。

また、動詞の中止形は定形動詞が表しうる文法的意味のうち、テンス・ムードは表しえないが、アスペクト（シテイテ、シテオリ）のほか、使役（サセテ、サセ）、受動（サレテ、サレ）、否定（シナク、シナクテ、シナイデ、セズ（ニ））、丁寧（シマシテ）などは表しうる。この中でアスペクト形式のシテイテとシテオリに注目するのは、第 4〜7 章で分析したシテの場合と同様に、動詞の中止形の意味・機能を記述するうえで出来事間の時間的関係を考察する必要があり、シテイテ（シテオリ）においても、その出来事間の時間的関係が動詞のアスペクトと相関するからである。

本章では、シテイテとシテオリの意味・機能に共通点を認めたうえで、シテイテの使用に注目して分析する。第二中止形のシテイテのみを分析するのではなく、第一中止形のシテオリと比較するのは、意味・機能的に共通するかに見える両者の使用のうち、シテイテのみが用いられる場合があるという事実を取り上げることが、シテイテとシテオリ両形式の意味・機能的な特性を明らかにために有効であるからである。

シテイテとシテオリを比較すると、一見、文体差を除けばどちらを用いても意味が変わらないように思われる。しかしシテイテの用例を観察には、例（1）のように、文体的にではなく文法的にシテオリに言い換えにくい文があることがわかる。

---

[55] シテとシの関係からすれば、形式上シテイテに対応する第一中止形は「倒れてい」のようなシテイだが、使用頻度は低く、シテオリが補充的に使用される。また形式上シテオリに対応する第二中止形は「倒れておって」のようなシテオッテだが、会話文における方言やいわゆる役割語的な言い回しに限定される。本章の分析のために収集した用例ではシテオリが 565 例、シテイは 53 例（すべて小説の地の文）、シテオッテは 7 例（すべて小説の会話文）であった。シテイテとシテオリの相補的な関係は、宮島（1994）、金水（2006）が指摘する存在動詞の「いる」と「おる」の中止形の関係と同様であると考えられる。宮島（1994）によれば、「い」という形式は一拍という音声的な不安定さから用いられず、標準語の書き言葉では「い」に対して「おり」が用いられる。

(1) 廊下を {歩いていて／？歩いており}、広瀬は自分を呼ぶ声を**聞いた**。(魔性の 008)

これに対して、シテオリの用例は基本的にシテイテで言い換えることができる。

以下、シテオリとの比較を通じて得られる、例 (1) のようにシテイテのみが用いられる文を中心に、その構文的特徴を実際の使用例に基づいて明らかにしたうえで、シテイテ、シテオリという動詞の中止形のアスペクト形式の形式の意味・機能のあり方を考察する。第 4〜7 章のシテの分析では、同一主体の文のみを対象としたが、シテイテのみが用いられる文の構造とシテイテ（シテオリ）の特性を記述するために、同一主体の文だけでなく、異主体の文についても分析の対象とする。

構成としては、まず先行研究を概観し (8.2)、本章の研究方法と両形式の文体的使用領域、分析対象を確認する (8.3)。そして両形式の意味・機能の共通点を出来事間の時間的関係の構成の観点から確認したうえで (8.4)、シテイテのみが用いられる文の構文的特徴をシテオリとの比較を通じて整理し (8.5)、シテイテを中心に文法的性質を考察する (8.6)。

3.1.2 節 (a) で示したように、シテイテ（シテオリ）といった有標の形式の出現頻度は、無標のシテ（シ）に比べ圧倒的に低く、シテイテの用例の収集のために電子コーパスによる検索を利用した。そのために、第 4〜7 章のシテの分析とは用例の収集範囲が異なることを再度述べておく。また、シテ（シ）との関係については、全面的にではないが、シテイテ（シテオリ）の分析から言えることを述べることとする。

8.2. 先行研究

管見の限り、シテイテとシテオリを比較して論じる先行研究は見当たらない。以下では、動詞の中止形の記述的研究においてシテイテを取り上げている奥田 (1989)、仁田 (1995)、新井 (2005) の分析について紹介し、また主に「シテオリではなくシテイテのみが用いられるのはどのような場合か」という点について確認する。

奥田 (1989) は、シテイテについて次のように述べている。

> 第二なかどめの位置にあらわれる動詞が継続相の形をとっているばあいでは、その第二なかどめは継続する動作・状態をさしだしている。この動作・状態は、定形動詞でさしだされる動作が進行する《状況》としてはたらいている。第二なかどめがさしだす状況のなかで、定形動詞によってさしだされる動作が実現するのである。 (同：42)

ここで挙げられているシテイテの 5 例は最後の 1 例を除きシテオリに言い換えにくい[56]。

・好太郎さんのところでは戦争中に銀杏の大木を供出して、そのとき株根を {ほっていて／？ほっており}、三石入りの備前焼きの水甕を**掘りあてた**。(黒い雨)

[56] 下線部・太字およびシテオリとの言い換えは筆者が追加した。

この「状況」が原因的に働く場合（同：42）や、二つの動作・状態の主体が異なる場合（同：42-46）にもシテイテの例があるが、それらはシテオリに言い換えられる。

・河田大隊長は足に重症を｛おっていて／おっており｝、この日拳銃で**自殺した**。（レイテ戦記）
・夫人は僕の云うのに賛成したが、このあたりの家はみんな｛たおれていて／たおれており｝、軒下の防火水槽はつぶれた壁や軒瓦の下敷きに**なっている**。（黒い雨）

仁田（1995）ではシテイテは「生起時状況」を表すものとして、主に「付帯状態」との違いから論じている。「生起時状況」のうち、シテ節の動詞が物理的・外的な動きであれば「状況付けられた生起時」を表すことが多く、心的な動きであることに応じて「状況的起因」[57]を表すとする（同：97-98）。ただし「状況付けられた生起時」の位置づけは保留されている（同：125）。そして、以下のように、「状況的起因」ではシテオリを用いてもよいのに対し、「状況付けられた生起時」では明らかにシテオリを用いにくい。

・ソノ時彼ハ｛興奮シテイテ／興奮シテオリ｝、松下課長ニソノ事ヲ**喋ッタ**ノダ。（状況的起因）
・オ茶ヲ｛飲ンデイテ／？飲ンデオリ｝、後カラ**殴ラレタ**。（状況付けられた生起時）

新井（2005）はシテイテが用いられる文を、①前件と後件の主語が同じか異なるか、「人」であるか「もの・こと」であるか、②前件の動詞のアスペクト性と語彙的な意味、③後件の述語がどのような形態論的特徴や品詞をとるか、④文が個別具体的な出来事を表すか恒常的な性質を表すかという観点から整理したものである。その分類のうち「前件の事象のうちに発生する後件の事象を表す場合」は「前件、後件の主語は同一で、尚且つ「人」であり、シテイテで表される前件の事象は、一定時間継続する広い意味での動作である」こと、また、多くの場合、後件の動詞が完成相であることを指摘している（同：71）。以下のように、この「「前件の事象のうちに発生する後件の事象を表す場合」のシテイテはシテオリに言い換えられないことがわかる。

・友達にも教えてやろうと思い、麻雀牌を学校に持って行き、机に｛並べていて／？並べており｝、教師に**みつかった**。（生きものたちの部屋）

本章のシテイテ（シテオリ）の記述においても、シテの場合と同様、出来事間の時間的関係は重要な特徴である。8.4 節で見るように、シテイテ（シテオリ）はそのアスペクト的意味に

[57] 仁田（1995）は「起因的継起」の継起性について述べる箇所で「ラリーが少しおなかをこわしていて元気ありません」という例を「起因的継起」の例として挙げ、「〈起因的継起〉では、発現の始端は先行してはいるものの、シテ節の事象と主節の事象が重なりあって存することが可能になる（同：116）」として、「付帯状態」の箇所で示された「生起時状況」と同一の構図でとらえている。

よって他の出来事との同時性を表すことが明瞭である。ただし「同時」といってもシテとそのあり方が異質であることは、仁田（1995：97-98）がシテイテについて、シテによる「付帯状態」との異なりから言及していることでも推察される。

そこで分析では、まずシテイテ（シテオリ）における「同時」のあり方について述べる。また、奥田（1989：42）が指摘するように、シテイテが主たる出来事にとっての「状況」とを表すという役割的関係の側面についても留意する。この点はシテオリと比較した際の、シテイテ独特の意味・機能を説明するうえで重要である。また新井（2005）の「前件の事象のうちに発生する後件の事象を表す場合」の分析は、シテイテのみが用いられる文の特徴をとらえているものと考えられる。本章では、主語の位置や定形動詞が表す出来事の意味的特徴にも注目して、シテイテのみが用いられる際の条件をより明示的に記述する。

8.3. 量的分布と分析対象の確認

まず両形式のテクストタイプ別の分布を【表 1】に示す。用例には「倒れてて」のようなシテイテの話し言葉的なバリアントも含まれている。地の文ではどちらも高い割合で用いられるが、会話文ではシテオリの使用頻度が低い。シテオリの会話文の例も少数見られたが、ほとんどが例（2）のように文末の述語が丁寧体であるか例（3）のように硬い口調である。一方、例（4）（5）のようにシテイテの用いられる会話文には明確な傾向は見られなかった。

【表 1　テクストタイプ別分布】

	シテイテ	シテオリ	計
地の文	1572（74.4%）	540（25.6%）	2112
会話文	332（94.9%）	18（5.1%）	350
その他	49（84.5%）	9（15.5%）	58
計	1953	567	2520

（2）「（…）菰田重徳は、二年前に幸子と結婚しており、旧姓**小坂重徳でした**」（黒い家 014）

（3）「（…）台湾には阿片吸引の習慣が残っており、その弊害を防ぐ**必要がある**。（…）」（人民は 014）

（4）「小母ちゃんが来ていて、荷物を**作っていた**」（あすな 002）

（5）「（…）青酸カリがはいっていて、佐山は**倒れました**。（…）」（点と線 008）

本章で分析する対象は以下のように限定する。本研究は基本的に外的運動動詞、内的情態動詞、静態動詞の分類は工藤（1995：69-71）に従うが、ここでは「ある、そびえる」などのアスペクト対立のない静態動詞に対して、「開ける、歩く」などの外的運動動詞と「思う、考える」などの内的情態動詞を一括したアスペクト対立がある動詞として＜運動動詞＞をたてる。

①シテイテとシテオリのアスペクト：継続相　　対象外：パーフェクト、単なる状態

②後続する述語のタイプ：運動動詞の肯定形式　対象外：形容詞、名詞、静態動詞、運動動詞の否定形式

このように限定するのは、シテイテのみが用いられる文では、多くの場合、シテイテが継続相で、後続する述語が運動動詞の肯定形式だからである。基本的に、シテイテが（6）パーフェクト、(7) 単なる状態の場合や、後続する述語が（8）形容詞、(9) 名詞、(9) 静態動詞、(11) 運動動詞の否定形式である場合には両形式を用いることができる。

(6) 尾上は昨日、七瀬と「彼」が待ちあわせ場所の喫茶店で一緒にいるところを｛目撃していて／目撃しており｝、それを自分の欲望に有利な方向へ悪用しようと**考えていた**。(エディ 019)

(7) 背の低い木が｛生えていて／生えており｝、幹に止まった蝉がうるさく**鳴いている**。(きつね 032)

(8) 細かい雨が｛降っていて／降っており｝、桟橋は、**暗かった**。(戦艦武 014)

(9) 現金が六万七千円｛入っていて／入っており｝、そのうちの五万円はぱりぱりの**新札だった**。(世界の 017)

(10) 全ての事象は何らかの関係を｛持っていて／持っており｝、その中心に高里が**いる**。(魔性の)

(11) 市川は死んだように｛眠っていて／眠っており｝呼んでも**起きなかった**。(孤高の 066)

また地の文でシテイテとシテオリの用例が最も多く分布するのは、後続する述語が運動動詞の場合である【表 2】。運動動詞は完成相・継続相の内訳もあわせて示す。

また後続する運動動詞の極性別の分布は、肯定の場合がどちらも圧倒的に多い【表 3】。ただし運動動詞の否定形式の場合、「母は私が遅刻するのを知っていて**起こしてくれなかった**」のような逆接関係ではシテオリが用いにくい（この点は 8.5.1 節で後述する）。

【表 2　後続する述語の品詞】

後続する述語		シテイテ	シテオリ
運動動詞	完成相	683（43.4%）	147（27.2%）
	継続相	375（23.9%）	173（32.0%）
	その他	164（9.4%）	81（15.0%）
静態動詞		82（5.2%）	42（7.8%）
形容詞		175（11.1%）	40（7.4%）
名詞		88（5.6%）	55（9.1%）
判断保留		5（0.3%）	2（0.3%）
計		1572	540

【表 3　後続する運動動詞の極性】

	シテイテ	シテオリ
肯定	956（86.4%）	364（91.2%）
否定	166（13.6%）	37（8.8%）
計	1222	401

8.4.　シテイテとシテオリの共通の意味・機能：同時的時間的関係の構成

本節では、シテイテとシテオリの相違点を考察するに先立って、両形式の共通点について、アスペクトによる複数の出来事の時間的関係の構成という点から確認する。

1.2.2 節で述べたように、スル（シタ）とシテイル（シテイタ）のアスペクト対立は、他の文の動詞のアスペクトとの相互関係によって出来事間の時間的関係（タクシス）を表し分けるというテクスト的機能を持つ。完成相のスル（シタ）は出来事の連鎖＝継起性の中に、継続相

のシテイル（シテイタ）は出来事の共存＝同時性の中に出来事を配置するのに用いられる。

シテイテ（シテオリ）も、シテイル（シテイタ）同様の継続相相当の形式として、複数の出来事の同時性を構成する。ただし文末述語のシテイル（シテイタ）との異なりについて、次の二点に留意する必要がある。第一に、シテイテ（シテオリ）ではテクスト中の他の文の動詞ではなく、同じ文中の定形動詞のアスペクトとの相関がまず問題になる。第二に、すでに見てきたように、シテ（シ）が他の出来事との継起性を表さない場合があるため、シテイテ（シテオリ）との間にスル対シテイルと全く同様のアスペクト対立があるとは言えない。例えば「彼は縁側に｛座って／座り｝、洗濯物を**たたんでいた**」のような文では、「座って（座り）」と主たる出来事が継起的関係にあるのではない。これらの点をふまえて、以下、シテイテ（シテオリ）による同時性のあり方を確認する。

まず、定形動詞が継続相であれば、二つの動詞が表す継続的な出来事は＜全面的同時＞の時間的関係にある。二つの継続的な動作・状態が並列されることになる。

（12）石段の途中に中学生が腰をおろしていて、単語カードを**暗記していた**。（樹々は 001）

（13）カウンターでは荒木が何か不得要領なことを喚き散らしており、総務室内の耳目はそちらに**集中していた**。（黒い家 002）

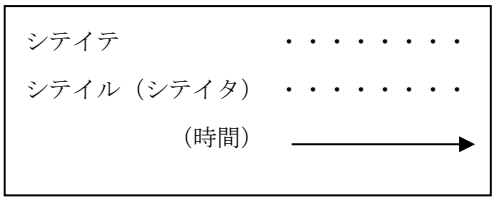
次に、定形動詞が完成相であれば、シテイテ（シテオリ）が表す継続的な出来事とスル（シタ）が表す完成的な出来事とは＜部分的同時＞の時間的関係にある。

（14）当時、大学生だった私は、家で寝転がっていて、その時に電話が**かかってきた**。（重力ピ 001）

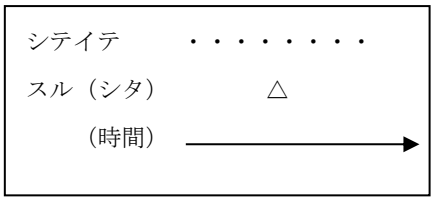
（15）泣虫は蒲団の上でのたうちまわっており、行助が、腹が刺されるように痛いそうです、と**答えた**。（冬の旅 022）

これらの時間的関係を図示すると、それぞれ【図 1】【図 2】のようになる。

【図 1　定形動詞が継続相の場合】



【図 2　定形動詞が完成相の場合】



ただし、「それから、すぐ、やがて」などの接続詞・副詞やシテカラが共起する場合は、出来事の重なりではなく、シテイテ（シテオリ）が表す出来事の継続のあとに主たる出来事が生じることが明示される。

(16) 岡安は不審そうに見ていて、それから「なにが可笑しい」と**きいた**。(さぶ 037)
(17) 昼間は丘のかげ、百姓家などに休んでいて、暗くなってから**歩きだす**。(楡家の 089)

また定形動詞が継続相であっても、例 (18) のように「午前中は」「午後からは」といった限定があることで、出来事の重なりではなく推移が表されることになる。いずれにしても、同時関係からのずれを表す場合には、外的な限定 (副詞など) が必要である。

(18) 私はその日、午前中は家を掃除していて、午後からは大学で**勉強していた**。

以上のように、定形動詞のアスペクトとの相関による時間的関係の違いを確認しておくことは、次節で取り上げる、シテイテのみが用いられる場合の記述にとって重要である。なぜなら「定形動詞が完成相」であり、「二つの出来事が部分的同時の関係にある」ということが、シテイテのみが用いられる文における独特の意味関係を支えているからである。

8.5. シテイテとシテオリの比較

本節では、まずシテオリで言い換えることができずシテイテのみが用いられる文のタイプについて構文的特徴を取り出して整理したうえで (8.5.1)、両方の形式が用いられる場合について整理する (8.5.2)。

8.5.1. シテイテのみが用いられる場合

シテイテのみが用いられる場合について、(a) 定形動詞のアスペクト、(b) 二つの出来事の主体の同一性と主語の位置、(c) 二つの出来事の意味関係という三つの構文的特徴に注目して記述する。

(a) 定形動詞のアスペクト

シテイテのみが用いられる場合、定形動詞のアスペクトは完成相である。このとき、二つの出来事が部分的同時の時間的関係にあることは 8.4 節で確認した通りである。

(19) 好太郎さんのところでは戦争中に銀杏の大木を供出して、そのとき株根を {掘っていて／掘っており} 三石入りの備前焼の水甕を**掘りあてた**。(黒い雨 007)
(20) 南窓は軍艦頭の背のひくい慈念を {みていて／？みており}、師匠の臨終の前日を**思いだした**。(雁の寺 008)

(b) 二つの出来事の主体の同一性と主語の位置

シテイテのみが用いられる多くの例で、二つの出来事は一つの主体に属すものとして提示さ

れている。また主体は基本的にヒトである。そして、例（23）（24）のように主語がシテイテより後ろにあってもよい。例（19）～（22）でも主語をシテイテより後ろに置くことが可能である。

（21）私は、父の机の引出しを｛整理していて／？整理しており｝、男女の名を十ずつならべて書いてある一枚の便箋を**みつけた**。（初夜 003）
（22）ぼくは勝負を｛見ていて／？見ており｝、だんだん**悲しくなってきた。**（4TE005）
（23）ある時、『ゴング』だったか『ボクシングマガジン』だったかのボクシング雑誌を｛読んでいて／？読んでおり｝、私はその投稿欄に眼を**引きつけられた**。（一瞬の 004）
（24）ルートが図書館から借りてきた『プロ野球名選手図鑑』を｛めくっていて／？めくっており｝、私は一つの数字に**はっとした**。（博士の 002）

ただし、次のように主体が異なる場合にシテオリが用いにくい場合もあり得る。このような場合も、同一主体の場合に準じて考えることができる。主体が異なるといっても、定形動詞が表すのは例（25）（26）のように、ある一人の主体（ヒト）のもとでの、シテイテが表す出来事を通じて生じる出来事である。

（25）が、庄吾はその話を｛聞いていて／？聞いており｝、ある気もちがむらむらと**わきあがった**。（路傍の 006）
（26）テレビを｛見ていて／？見ており｝、ひとつ謎が**解けた**。（チーム 002）

しかし、次の例（27）のような異主体の文は不自然である[58]。これは、主たる出来事が、シテイテが表す出来事によって主体に生じてきたものと解釈することはできないためである。これに対し、例（27’）のように同一主体の文として提示すれば全く自然である。

（27）？（私は）オフィス街を歩いていて、地震が**起きた**。
（27’）私はオフィス街を歩いていて、地震に**あった**。

重要なことに、例(28)のような別々のヒトによる異主体の文ではシテオリを用いてもよい。一方、二つの文は同じ現実を表しているようでも、同一主体の文として表現する例(29)では、シテオリは用いにくいのである。

（28）太郎が試験管で｛遊んでいて／遊んでおり｝、先生がそれを**叱った**。
（29）太郎は試験管で｛遊んでいて／？遊んでおり｝、先生に**叱られた**。

[58] ただし「オフィス街を歩いていて地震が**起きたら**、まず頭を守らなければならない」のように、シテイテが連用的な従属形式にかかっていく場合は自然になる。この理由については詳しく考察できていない。

(c) シテイテと定形動詞の意味的特徴と二つの出来事間の関係

シテイテと定形動詞の意味を観察すると、シテイテのみが用いられる場合、①シテイテが継続的な動作（動作継続）を、②定形動詞が意志的に制御できない出来事を表すという傾向が見られた。

(30) 廊下を｛歩いていて／？歩いており｝、広瀬は自分を呼ぶ声を**聞いた**。(魔性の 008、前掲例 1)
(31) ツカちゃんは、理科の授業中、実験用の机に備え付けの水道で｛遊んでいて／？遊んでおり｝山本先生に**叱られた**。(エイジ 005)

得られた用例の範囲ではほとんど見られなかったが、例 (32) (33) のようにシテイテが継続的な結果状態（結果継続）を表す場合もあり得る。

(32) ある者は天井に｛隠れていて／？隠れており｝、下から闇雲に撃たれた自動小銃の弾にあたり、血だるまになって転げおちた。(赤い月 018)
(33) 私は公園のベンチに｛座っていて／？座っており｝にわか雨に**あった**。

奥田 (1989) が言うように動詞の中止形の継続相相当形式が「状況」として働くとすれば、シテイテが表すのは＜状況としての継続的動作（結果状態）＞であり、定形動詞はそこから生じる意志的に制御できない出来事を表す。例 (20) (22) (23) (25) (26) のような例は＜感情・心理が生じる状況としての継続的認識活動＞と下位分類できる。

収集された例には、例 (31) のように二つの出来事に明確な因果関係があり、シテイテが「原因」を表すと言える場合もあるが、例 (34) のように明確な因果関係がない場合を含めて考えると、シテイテが表す状況を「原因」として一般化するのは適切ではない。

(34) ツカちゃんは校庭で｛遊んでいて／？遊んでおり｝、突然山本先生に**叱られた**。

このことは、直接の因果関係がある例 (31) のシテイテは「遊んでいた｛ので／ため（に）／せいで｝」などで言い換えてもよいのに対し、次の例 (34) は言い換えられない（言い換えると直接的な因果関係が生じてしまう）ことでもわかる。関係を変えないかたちで強いて言い換えるなら「遊んでいたら」「遊んでいる時に」といった表現になるだろう。シテイテのみが用いられる文のうち、「遊んでいた｛ので／ため（に）／せいで｝」で言い換えられない（または言い換えると意味関係が変わってしまう）場合は 79 例、言い換えてもよい場合は 9 例であった。実例では、例 (35) のようにシテイテが表す状況が出来事の生じる前提や契機となってはいるものの、定形動詞が表す出来事が、状況と直接の因果関係のない、偶発的なものとして提示されていることが多い。

(35) そして突然、この春のことだ、ぼくは街を歩いていて、不意になんの理由もなく、怯えた子供らの一群から石礫を**投げられた**。ぼくがなぜ子供らを脅したのかはわからない。ともかく恐怖心からひどく攻撃的になった子供らの一群の投げた拳ほどの礫が、ぼくの右眼にあたった。(空の怪 005)

なお、定形動詞が意志的に制御できる出来事を表す場合も少数見られた。シテイテが主たる出来事を実現するための意志的な動作の継続を表す点で、これまでの例とは異なる。ただし得られた例はシテイテが「待っていて（待ち受けていて)」の場合のみであった。

(36) 加藤の留守中に二階へあがると、しまに叱られるから、義郎は加藤が帰るのを｛待っていて／？待っており｝二階へ**やって来る**のだった。(孤高の 052)

また、いわゆる逆接関係の場合もシテオリを使用しにくい。この場合も「継続的な動作（結果状態）の中から、偶発的な出来事が生じる」という意味関係になく、定形動詞が（37）意志的な出来事の場合、(38）継続相の場合、(39）否定形式の場合がありうる点で、異なったタイプの文である。なお、実際に得られた用例は例（37）(38）のように「知っていて（わかっていて）のような動詞に限定されている。

(37) おまけに、食欲がないのを｛知っていて／？知っており｝好物の金目鯛の煮付けを**供したりする**。(インザ 001)
(38) 於継は青洲の手が離れると、すぐ何事もなかったように静かな眠りを続けていた。｛知っていて／？知っており｝**眠っている**のだ。(華岡青 036)
(39) 平日のオフィス街を｛歩いていて／？歩いており｝、私はなぜか誰とも**会わなかった**。

8.5.2. シテイテとシテオリの両形式が用いられる場合

以下、シテイテとシテオリの両形式が用いられる場合を、定形動詞のアスペクトと主体の同一性の観点から、①定形動詞が継続相の場合、②定形動詞が完成相で異主体の場合、③定形動詞が完成相で同一主体の場合の三つに整理する。

①定形動詞が継続相である場合

第一に、定形動詞が継続相である場合を確認する。すでに確認したように、二つの継続的な出来事が全面的同時の時間的関係のもとに並べられている（前掲例 12、13 も同様)。

(40) 店から奥の間へ上がるところに男が立っていて、こちらを**見ていた**。(きつね 015)
(41) 理一はブランデーをのんでおり、ほかの者はウイスキーの水割りを**のんでいた**。(冬の旅 063)

②定形動詞が完成相で異主体である場合

第二に、定形動詞が完成相で異主体である場合を確認する。シテイテ（シテオリ）が表すある主体における継続的な出来事と、他の主体によって生起する出来事が定形動詞で表される（前掲例 14、15 も同様）。

（42）菊は黒い羽織を着ていて、それがよく似合うと信夫は**思った**。（塩狩峠 007）
（43）門の中に紺の制服をきた一人の中年の男が立っており、修一郎は鉄の棒と棒のあいだから面会用紙を男に**手渡した**。（冬の旅 056）

③定形動詞が完成相で同一主体である場合

第三に、定形動詞が完成相で同一主体の場合にも、両方の形式が用いられる場合がある。ただしシテオリの用例では、異主体に比べて同一主体の例はあまり見られなかった（この点については 8.6.1 節で触れる）。

（44）小島は風呂敷包みを持っていて、いまの男からおまえに差入れだ、と**云った**。（さぶ 020）
（45）おのぶはそのようすを、うっとりしたような眼で見ていて、粋なもんじゃないのと**云った**。（さぶ 046）
（46）どこで聞きつけたのか、新聞関係者も来ており、星にむけてカメラのシャッターを**切った**。（人民は 030）
（47）彼女は、二十糎もあるような長いシガレット・ホルダーで煙草を吸っており、時々、太郎に**しなだれかかった**。（太郎物 081）

これらは定形動詞が完成相で同一主体という点ではシテイテのみが用いられる場合と共通しているが、第一に、主語をシテイテ（シテオリ）より後に置くことができない点で異なる。

（45’）？そのようすを、うっとりしたような眼で見ていて、おのぶは粋なもんじゃないのと**云った**。
（47’）？長いシガレット・ホルダーで煙草を吸っており、彼女は太郎に**しなだれかかった**。

第二に、この場合のシテイテ（シテオリ）のアスペクト的意味は動作継続に限らず、例（44）（46）のように結果継続を表す場合も多く見られる。また、定形動詞は意志的に制御できる出来事を表している。そして重要なことに、シテイテのみが用いられる場合のように、主たる出来事が偶発的に発生する状況を表しているわけではない。シテイテ（シテオリ）が主たる出来事をとりまく状況的な出来事を表しているとしても、例（45）（47）のように単に随伴する同時・継続的な動作か、例（44）（46）のように主たる出来事の前提となる、主体における結果状態（存在）として提示されている。

8.6. 考察

以下、これまでの整理をもとにシテイテとシテオリの意味・機能を考察する。その際、二つ

の動詞述語の関係（並列的か従属的か）や、シテイテの文の成分としての機能（状況語的か修飾語的か）といった点に注目する。また部分的にではあるがシテやシとの関係も考察する。

8.6.1. 並列性と従属性

シテイテとシテオリの両形式が用いられるのは、①定形動詞が継続相、②定形動詞が完成相で異主体、③定形動詞が完成相で同一主体、かつ定形動詞が意志的に制御できる出来事を表す場合である（8.5.2）。これらの特徴として、①と②の場合の、＜並列性＞の高さ、すなわち＜従属性＞の低さがある。定形動詞が継続相で二つの出来事が全面的同時関係にある（c）は、定形動詞が完成相で二つの出来事が部分的同時関係にある（c'）よりも並列的であり、異主体の（d）は同一主体の（d'）よりも並列的である。

（c）彼が窓際に｛立っていて／立っており｝、こちらに手を**振っていた**。［継続相］
（c'）彼が窓際に｛立っていて／立っており｝、こちらに手を**振った**。　［完成相］
（d）花子が試合を｛見ていて／見ており｝、彼は手を**振った**。　［異主体］
（d'）花子が試合を｛見ていて／見ており｝、彼に手を**振った**。　［同一主体］

ここで、シテイテ・シテオリが継続相、後続する述語が運動動詞の肯定形式である場合について、定形動詞のアスペクトと主体の同一性という構文的特徴からみた量的分布を確認する【表 4】[59]。

【表 4　シテイテ・シテオリが用いられる文の特徴】

	定形動詞のアスペクト		主体の同一性	
シテイテ	完成相	483（63.3%）	同一主体	471（58.7%）
	継続相	280（36.7%）	異主体	331（41.3%）
シテオリ	完成相	93（44.8%）	同一主体	76（30.6%）
	継続相	127（55.2%）	異主体	172（69.4%）

シテオリは、（c）のように定形動詞が継続相である文や、（d）のように異主体の文で使用される割合がシテイテより高い。一方、（d'）のように定形動詞が完成相で同一主体の文での使用頻度は低い。従って、使用が限定的なシテオリの特性として見れば、シテオリは主に並列的関係の表現に用いられる形式と言える。

一方、シテイテにはシテオリと同様に用いられる並列的な場合に加えて、定形動詞が完成相で同一主体、かつ定形動詞が意志的に制御できない偶発的な出来事を表すという、シテオリが用いられない場合がある（8.5.1）。この場合のシテイテは、両形式が用いられる並列性が高い場合に対して、相対的に従属性が高いと言える。以下、この従属性の具体的なあり方について、シテイテにおける状況語的意味・機能から説明する。

8.6.2. シテイテの状況語的意味・機能

シテイテのみが用いられる文では、シテイテは、ある一つの主体において偶発的な出来事が生じる状況としての継続的な出来事を表す。また主語はシテイテよりも後に置くことできる。

[59] 両形式が用いられる地の文の場合である。

これらの点で、「述語と主語（補語、修飾語）からなる事象全体をとりまく外的状況を表す（工藤 2002：111)」という状況語的意味・機能を持つと言えそうである。このことを、シテイテのみが用いられる文の構文的特徴から具体的に確認する。

第一に、定形動詞が完成相であり、二つの出来事が部分的同時関係にある点（8.5.1（a））について述べる。工藤（1995）は次のように、完成相と継続相の、テクストの時間の流れにおける機能の異なりを指摘している。

> シタの連続は基本的に、時間の流れにそって、運動＝出来事が次々に展開していくままに提示しながら、＜ものがたり＞の筋を前進させていく。一方、シテイタ＜継続性＞は、ものがたりの時間の流れを中断させて、しばしそこに留まり、同時的な＝共存している出来事を導入する。　（同：111-112）

このことは、同じアスペクト的意味が連鎖する場合には、動詞の中止形でも直ちに認められる。（e）は完成相の連鎖による継起関係、（f）は継続相の連鎖による同時関係である。

（e）風が**吹いた**。雪が**舞った**。　／風が吹いて、雪が**舞った**。
（f）風が**吹いていた**。雪が**舞っていた**。／風が吹いていて、雪が**舞っていた**。

しかしシテイテのみが用いられる文では、一文中で異なったアスペクト形式が組み合わさっており、時間的関係の構成において、それぞれの動詞に機能分担がある。物語を前進させる完成相の定形動詞に対して、継続相のシテイテは、それと共存し、主たる出来事の背景となる出来事を表す。このことから、主たる出来事の「とりまき」としての状況語的意味・機能は、部分的同時性という時間構造に支えられたものであると言える。

第二に、主体の同一性（8.5.1）について述べる。「彼は畑を耕していて、雨に**あった**」のような場合、シテイテが表す状況としての出来事と、定形動詞が表す偶発的な出来事は、一人の主体の意志で行われるわけではない。この意味では二つの動詞は別々の出来事を表していると言える。重要であるのは、にも関わらず、二つの出来事が同一の主体に属すものとして提示されるという点である（例 27 と 27’も参照)。このことは、シテイテが「主語が一つで述語が二つ」という構造の文において、副次的な文の成分として組み込まれる傾向を示していると考えられる。

8.6.3.　シテイテの第二中止形としてのあり方

上記のように、シテイテのみが用いられる文では、シテイテには定形動詞と並列的な述語らしさも、主語が一つで述語が二つという構造の文における副次的で従属的な成分としての意味・機能が見てとれる。この意味でのシテイテの従属性は、同じ第二中止形であるシテと共通する性質と言えるかもしれない。奥田（1989）ですでに指摘されているように、シテは主語が一つで述語が二つの文（奥田の用語では「ふたまた述語文」）において修飾語化が進み、（g）

（h）のように定形動詞が表す出来事の側面の特徴づけという意味機能を果たす場合がある[60]。この時のシテはシに言い換えられない。

（g）彼は｛泣いて／？泣き｝**謝った**。
（h）彼は｛歩いて／？歩き｝学校に**行った**。

このように、第一中止形（シテオリ・シ）で言い換えられない場合があるという点では、シテイテとシテは第二中止形として共通している。しかし、これをもって直ちにシテイテとシテが共通の文法的性質を持つとは言いがたい。なぜなら、（g）（h）のように修飾語的に機能するシテを、シテイテに言い換えることはできないからである。

（g’）*彼は泣いていて**謝った**。
（h’）*彼は歩いていて学校に**行った**。

このことは、シテイテが、継続相というアスペクト性を持った述語として、出来事間の同時的関係を構成するという意味・機能から説明できる（8.4 節）。シテイテのみが用いられる場合、シテイテが表す出来事は、（i）（j）のように継続的なアスペクト的意味を持つ点で一つの出来事としての独立性が高い。（g）（h）のように主たる出来事の側面を特徴づける修飾語的な成分として定形動詞（述語）が表す出来事と一体となっているのではない。

（i）彼は新聞を｛読んでいて／？読んでおり｝、ふと 9 年前のことを**思い出した**。
（j）家の前の道を｛歩いていて／？歩いており｝、私は黒い財布を**拾った**。

（g）（h）の「泣いて」「歩いて」は、定形動詞が表す出来事と「同時」的でないとは言えないにしても、独立したアスペクト性によって出来事間の時間的関係の構成には関与しているわけではないため、シテイテに言い換えることができないのである。

以上をまとめると、シテオリはもっぱら並列的関係の表現に用いられる形式であるのに対し、シテイテは、シテオリと同様の並列的関係にも、従属的関係の表現にも用いられる形式である。つまり、シテイテとシテオリは、意味・機能上の相補的関係にあるわけではない。そして、シテイテとシテは、第一中止形が用いられない従属的関係の表現に用いられる第二中止形であるという点では共通していても、状況語的なシテイテとは、修飾語的なシテでは、その副次的な意味・機能のあり方が異なる。

8.6.4. シテ（シ）との総合的な比較に向けて

[60] 述語から修飾語への機能変容が進めば、動詞が従属する要素をとらず形態の変化をしなくなってシテの副詞化（品詞の転成）が起こることは、高橋（2003）でも指摘されている。

現時点ではシテ（シ）およびシテイテ（シテオリ）との総合的な比較は今後の課題である。ここでは見通しとして、これらの関係を体系的に考察するうえで重要と思われる、次のような事実を指摘しておく。

まず（k）のようにシテイテ（シテオリ）をシテ（シ）にすると、出来事の時間的関係が異なる場合がある。これは基本的に定形動詞が完成相で二つの出来事が部分的同時の場合である。このときシテ（シ）は完成相相当の形式として継起性を表すと言える。

（k）彼が縁側に｛座っていて／座っており｝、私に手を**振った**。［部分的同時］
　　彼が縁側に｛座って／座り｝、私に手を**振った**。　　［継起］

一方で、(1）のようにシテイテ（シテオリ）をシテ（シ）にしても出来事の時間的関係が異ならない場合もある。これは基本的に定形動詞が継続相で二つの出来事が全面的同時の場合である。このときシテ（シ）は完成相として継起性を表すとは言いがたい。

（1）彼が縁側に｛座っていて／座っており｝、私に手を**振っていた**。［全面的同時］
　　彼が縁側に｛座って／座り｝、私に手を**振っていた**。

本章のシテイテ（シテオリ）の分析では定形動詞のアスペクトとの関係を重視したが、これらの事実は、シテ（シ）のアスペクト性と意味・機能、そしてその変容を考察するためには、定形動詞のアスペクトとの相関に加え、シテイテ（シテオリ）との相関、すなわち動詞の中止形におけるアスペクト体系のあり方を考える必要性を示しているように思われる。

第 4 部　結論

第 9 章　分析のまとめと今後の課題

本章では、第 4〜8 章での分析の結果について総合的な考察を加え（9.1）、今後の課題と展望を述べる（9.2）。

9.1.　総合的な考察

以下、各章での分析の結果を総合し、分析の一般的観点に沿うかたちでまとめを述べる。

9.1.1.　時間的関係について

本研究では、動詞の中止形における時間的関係のあり方を中心に分析を加えた。重要であるのは、二つの出来事間の関係の分析のためには、中止形と定形動詞の二つの動詞のアスペクト的側面を考慮し、定形動詞との相関をふまえたかたちで中止形のアスペクト的特性を記述することが必要である点である。

①定形動詞のアスペクトについて

本研究の記述では、主要な述語である定形動詞のアスペクト的意味との相関のもとで、動詞の中止形が表す副次的な出来事の意味のあり方が決まるという事実が、以下のようなかたちで具体的に確認できた。

まず、シテの場合、定形動詞が完成相であるということが、シテが表す動作の先行性、つまり二つの出来事の継起性が明示されるための条件となっている。定形動詞が継続相である場合は、定形動詞が表す主たる出来事に対して、シテは、客体や主体の変化結果としての状態の同時性（主体動作客体変化動詞、主体変化動詞）や、主体の動作の同時性（主体動作動詞）を表す。

次に、シテイテの場合、定形動詞が継続相であるか完成相であるかによって、二つの出来事が全面的同時の関係にあるか、部分的同時の関係にあるかが表し分けられる。シテオリに比してシテイテのみが用いられる文には、二つの出来事が部分的同時の関係にあるという条件があった。

シテとシテイテのいずれの場合も、動詞の中止形の側のみを観察することでは時間的関係を十分にとらえきることができない。定形動詞のアスペクトが中止形における時間的関係の分析の必須の基準であるという事実は、これまでの先行研究では明らかにされていなかった点である。

②中止形のアスペクトについて

本研究では、文末述語（スル・シタ、シテイル・シテイタ）におけるアスペクトのあり方を参考にして、シテに対してシテイテというアスペクト形式があることに注目した。このよ

うな観点は、これまでのシテあるいはシテイテのみを対象とした記述に見られないものである。このことによって、シテとシテイテの特性を記述するのみならず、従属的な述語形式である動詞の中止形におけるアスペクト体系が、部分的にではあるが明らかになった。

まず、シテイテは、継続相というアスペクト的意味によって他の述語が表す出来事との同時性を構成するという点で、文末述語の継続相の形式（シテイル・シテイタ）と並行的な機能を持つ。定形動詞のアスペクトが継続相であるか完成相であるかで時間的関係のバリエーションは生じるが、シテイテは相対的に独立したアスペクト形式として同時性の表現を担っていると言える。ただし、定形動詞が継続相であればシテイテをシテに言い換えてよい場合があるため、シテイテが完全に独立したアスペクト形式であるというわけではない。

次に、シテには、主体の動作の先行性を表すことで、二つの出来事の継起性を構成する場合がある。この場合には、文末述語の完成相の形式（スル・シタ）と同等の、完成相相当の形式としての機能を持つと言ってよいかもしれない。

しかし、シテがスル・シタと全く同等に、独立のアスペクト形式として継起性の表現を担うのではない。シテが動作の先行性を明確に表すためには、「定形動詞のアスペクトが完成相である」という条件が必要だからである。さらに重要なことに、定形動詞が完成相であってもシテが表す動作の先行性が認めにくい場合がある。シテの使用に完成相とは言えない使用がある点で、シテとシテイテにおいて、文末述語のアスペクト（スル・シタ対シテイル・シテイタ）と同様の対立関係があるとは言えない。

強調しておきたいのは、シテが表す出来事は、主たる出来事との単なる同時性や継起性の中にあるのではないという点である。主体動作客体変化動詞と主体変化動詞の場合、定形動詞のアスペクトによる違いに関わらず、客体や主体の変化結果としての状態が主たる出来事の成立と同時的に存在している。定形動詞が完成相である場合には、シテが表す動作の先行性と結果状態の同時性という、複合的な時間的関係が認められる。定形動詞が継続相の場合も、先行する動作の側面を背景化させてもっぱら結果状態の同時性を表すが、これも主体動作客体変化動詞や主体変化動詞が本来表す、動作と変化の二つの側面のうち動作の側面を切り捨てている点で、複雑な構造である。シテが主体動作動詞である場合に、主体の動作に先行性が認められる場合も、単に出来事の継起性を表しているのではない。動作の効力が、定形動詞が表す主たる出来事の際に存在することが必要であるからである。

総じて、時間的関係を「継起」「同時」のいずれかに振り分けてしまうのは、一面的・切断的な把握であろう。シテが表す結果状態や動作の「同時」と、継続相相当形式のシテイテが表す「同時」とは、文末述語におけるアスペクト対立の、中止形における変容をとらえるためにも、その共通点と相違点をとらえることが今後必要になると思われる。

最後に、アスペクトが、複数の出来事間の時間的関係（継起性、同時性）を構成するというテクスト的機能は、これまで主に文末述語の分析で確認されてきた。本研究は、二つの文の二つの述語の関係ではなく、一つの文の二つの述語の関係を問うものであるが、時間的関係をとらえるうえでは、こうしたテクスト的視点による分析が必要かつ有効である。

9.1.2. 役割的関係について

以下、主に二つの出来事の役割的関係に関して、特に本研究の分析にとって重要である、動詞のタイプおよび二つの出来事における意志性の観点についてまとめる。

①動詞のタイプについて

シテについて、アスペクト性を考慮した動詞分類に沿って分析することで、以下の点が明らかになった。

まず、主体動作客体変化動詞および主体変化動詞は、主体の動作のみならず客体や主体の変化もとらえた動詞であることから、シテの場合においては、変化結果としての状態と主体の動作の複合性がとらえられる。さらに、シテが表す変化結果としての状態の、主たる出来事との同時存在が、これらの動詞に共通する特徴であることが明らかになった。そして、主体の動作の側面が、定形動詞のアスペクトや結果状態の意図的準備性といった条件によって前面化することを連続的な分類によって示した。

主体が意志的に働きかけることで客体に変化をもたらす主体動作客体変化動詞においては、変化結果としての状態の意図的準備性から、主体の動作の先行性をとらえることができる。基本的に、主体が意志的な動作によって主体自身に変化をもたらす姿勢変化動詞、位置変化動詞、装着動詞といった主体変化動詞の下位タイプにおいても同様の事実が認められた。しかし、姿勢変化動詞には、主たる出来事のために意図的に準備されるのではない、付随的な主体の結果状態を表す場合があり、その場合には主体の動作の先行性がとらえにくいこと、かつ、結果状態が意図的に準備される場合とは再帰構造を介して連続的な関係にあることがわかった。

さらに、主体動作客体変化動詞および主体変化動詞に関する事実を確認することによって、主体動作動詞との性質の異なりを確認することが可能となった。主体動作動詞は、客体や主体の変化の側面をとらえていないことから、シテにおいても、基本的には主体の動作の側面のみが主たる出来事と関係する。従って、動作によって結果状態を準備するか否かという観点では、シテが表す動作の先行性が認められない。と言って、シテが主体動作動詞であるすべての場合に、動作の先行性が認められないのではなく、結果状態より間接的な、動作の効力がある場合には、先行性が認められた。この動作の効力に関しては、主たる出来事の成立のために準備されるという点では、主体動作客体変化動詞や主体変化動詞における変化結果としての状態と共通している。

以上の点は、動詞タイプごとの分析によって段階的に明らかになった点であり、従来のように「継起」か「同時（付帯状態）」かという時間的関係によってシテの使用を振り分ける分析方法では記述できなかった事実である。

なお、第 4〜7 章のシテの分析では、中止形の側の動詞のタイプを主に考慮したが、定形動詞が表す出来事（または動詞）のタイプを詳しく見ることで、出来事間の関係をより綿密に記述できることも示唆された。例えば、シテが所持動詞の場合の記述では、「彼は荷物を持って、

家まで**帰った**」のように定形動詞が移動性の動作を表す動詞である場合には、シテが表す動作の先行性が、定形動詞のアスペクトに関わらず認めにくいことが分かった。このことは、「太郎は荷物を引きずって、家まで**帰った**」のような、主体動作動詞の記述においても認められた点である。定形動詞のタイプを特定することによって、特有の意味関係におけるふるまいが見られることが明らかになった。今後、奥田（1983a）などのとる連語論的な手法、すなわち主要な要素と、主要な要素に従属し、それを具体化する要素との組み合わさり方のタイプの構造化を、動詞と動詞の関係において推し進めることが必要になるかもしれない。

②二つの出来事における意志性について

分析を通じて、二つの出来事間の関係をとらえるためには、動作や変化が意志的に行なわれるものかどうかを考慮する必要があることがわかった。

第 4～7 章のシテの分析においては、ひとりの主体（ヒト）の意志によって統一された二つの意志的な出来事間の関係を中心に見た。そこでは、シテが表す動作の先行性をとらえるうえで、「主たる出来事のために、シテが表す動作によってもたらされる変化結果としての状態や効果を、主たる出来事に先行して準備しておく必要があるか否か」を考慮する必要があった。

そのうえで、定形動詞やシテが表す出来事が非意志的である場合に、時間的関係や役割的関係に特徴的なふるまいが見られることを確認した。第一に、定形動詞が表す主たる出来事が非意志的なものである場合、シテが表す動作の結果状態（効力）を、主たる出来事の成立のために意図的に準備するという関係は生じない。第二に、シテが表す出来事が非意志的な場合、姿勢変化動詞や主体動作動詞の場合を中心に、主体の心理・生理といった内面の表現としての身体の様態（結果状態、動作）をシテが表す。いずれの場合でも、主たる出来事の成立のために変化結果としての状態がもたらされるわけではないことから、主体の動作の先行性は前面化しない。

第 8 章におけるシテイテの分析でも、定形動詞が表す出来事の意志性を考えることが有効であった。シテオリに比してシテイテのみが用いられるタイプの文において、シテイテが表す継続的な出来事が、主たる出来事が発生する状況として働くことを明らかにしたが、その主たる出来事は非意志的（偶発的）に起こるものであるということが重要な意味特徴である。

総じて、本研究の出来事間の時間的関係の分析には、意志的側面が関わっている。出来事の時間的前後関係のみによる把握ではない。この点は、今後、本研究では扱えなかったタイプの構造の文や動詞のタイプを分析する際にも考慮することが必要であると思われる。

9.1.3. 動詞の中止形の機能について

動詞の中止形における述語らしさを本質的に問うことは今後の課題である。ここでは、二つの出来事の分析を通じて明らかになった、中止形の副次的な意味・機能についてまとめておく。

①状況語的な機能について

従来、動詞の中止形（シテ）における狭い意味での副詞化（修飾語化）の問題が注目されることが多かった。本研究では、姿勢変化動詞やシテイテの分析を通じて、動詞の中止形における副次的な機能のあり方としての状況語らしさを指摘した。

シテの場合もシテイテの場合も、状況語的機能が認められる場合には、動詞の中止形が、一つの相対的に独立した出来事を表現しているという点で、述語らしさを保っていると言える。それを支えているのは出来事の時間的側面である。

シテが姿勢変化動詞である場合には、「縁側に座って、手紙を**読む**」のようにくっつき先のニ格名詞をとることによって、主たる出来事の際の姿勢のみならず場所を表すという点で、状況語的な機能を持つことが明らかになった。これは「縁側に出て、手紙を**読む**」のような位置変化動詞の場合も同様である。

この時、定形動詞が完成相であり、「主体がある場所に存在している」という結果状態を主たる出来事のために意図的に準備するという関係において、動作の先行性は明らかである。ニ格名詞を取らずに「座って、手紙を**読む**」といった場合にも動作の先行性は認められるが、このように主たる出来事の際の姿勢のみを表す場合は、「顔をしかめて、手紙を**読む**」のように、動作の先行性をともなわない主体の身体部分の付随的な結果状態へと連続している。この場合には、シテには修飾語的意味・機能が認められるようになる。

シテイテの場合には、「私は道を歩いていて、財布を**拾った**」のように、シテイテが継続的な出来事を表しつつ、定形動詞が表す偶発的な出来事の発生する状況を表すという独特の機能が、シテオリとの比較によって明らかになった。この場合は、シテイテが一個の継続的な出来事（動作）を表すという点で、一つの述語らしさが保たれていると言える（ただし、「道を歩いていて、私は財布を**拾った**」のように主語がシテイテよりもあとに来てよいという構文的特徴は、シテイテが主語と述語の結びつきの外側のより副次的な成分に移行しつつあることを示しているかもしれない）。

②修飾語的機能について

動詞の中止形における修飾語的意味・機能については、主に姿勢変化動詞の場合に認められた。特に、シテが主体の内的側面の現れとしての身体部分の様態を表す「彼は肩を落として、道を**歩いた**」のような場合に、シテが主体の身体の具体的な様態の表現から、より抽象的な側面の表現性を持つことによって、主たる出来事の内的（心理的側面）を詳しくするというかたちでの修飾語らしさが認められた。これと同様に、シテが主体動作動詞で、主体の身体部分における動作を表す「彼は肩を震わせて、道を**歩いた**」のような場合にも、内的側面の現れとしての身体部分の描写が、主たる出来事の側面を詳しくするのに用いられている。定形動詞のアスペクトに関わらず、シテが表す動作の先行性が認めにくいことから、一個の独立した動作を表現するという意味での動詞述語らしさは薄れていると言える。そして少なくとも上記のような場合には、シテが、出来事の主体であるヒトの身体部分についての

副次的な出来事（動作・結果状態）を差し出すかたちで、主たる出来事との間に分担が生じていると言える。

現時点で分析した動詞のタイプの使用について横断的にシテの修飾語的意味・機能のあり方を明らかにすることはできていないが、今後、二つの出来事間における同時的な時間的関係を、一つの出来事の異なる側面の分析的関係としてとらえ直してみることが、その他のタイプの動詞による場合を記述するためにも有効であることを示しているように思われる。例えば、主体動作動詞の分析で触れた「火を叩いて**消した**」のような場合には、二つの出来事が同時的な時間的関係の中にあるというとらえ方も可能であるが、むしろ、定形動詞が表す「火を消す」という客体への働きかけに対して、シテが、その実現の方法となる動作を側面的に表している。このような場合の、二つの動詞が表す出来事の内的な構造を明らかにするためには、上述のように、分析の次の段階として、シテだけでなく定形動詞についても動詞のタイプを考慮し、二つの動詞のくみあわせの構造化を推し進めることの必要性が認められる。

9.2. 今後の課題と展望

以下、研究の方向全体にかかる今後の課題と展望を述べる。

9.2.1. 時間的関係について

第一に、二つの出来事の時間的関係を決める条件・要素の総合的記述が必要である。定形動詞のアスペクトは、二つの出来事の時間的関係の分析のために重視すべき要素であるが、複数の出来事間の時間的関係が定形動詞のアスペクトのみによって決まるわけではない。例えば、「彼は家に帰って封筒を開け、写真を**取り出した**」のように同一文中に中止形を含めた従属的な動詞述語が三つ以上並ぶ場合には、中止形に後続する動詞述語のみならず、先行する従属的な動詞述語との相関も複数の出来事の時間的関係に影響するだろう。その場合、出来事全体の時間的構成に対する定形動詞の重要性は相対的に低くなるかもしれない。ただし、中止形が後続する述語にかかっていくことが義務的であることから、定形動詞とのミニマルな相関に注目することが段階的アプローチとして必要であることを強調しておきたい。

第二に、中止形におけるアスペクト体系の総合的記述が必要である。シテイテの使用においては、定形動詞が継続相である場合に、「太郎が椅子に｛座っていて／座って｝、本を**読んでいた**」のように、シテイテをシテにしてもよい場合がある。このことは、一見、シテイテも、完全に独立したアスペクト形式ではなく、定形動詞との相関のもとで規定される形式であることを示している。しかし逆に、シテの使用において、定形動詞が継続相である場合に「彼は新聞紙を｛広げて／？広げていて｝、**読んでいた**」のように、シテをシテイテに置き換えられない場合もある。このような基本的事実を正確に記述することが、今後中止形におけるアスペクト体系を明らかにするために必要である。

9.2.2. 役割的関係について

第一に、今後、本研究が対象としていない動詞のタイプを対象に含めて分析を行なう必要がある。特に、主体変化動詞のうち、「温まる、折れる、浮かぶ、落ちる」などの、モノの非意志的な変化を表す動詞や、「揺れる、吹く、輝く」などの現象としてのモノの動きを表す動詞については、意志に基づかない出来事間の関係をとらえるにあたって重要である。

例えば、小説の地の文における「花びらが落ちて、雨で**濡れていた**」のような文は、「花びらが落ちて、雨で**濡れた**」のように定形動詞を完成相にすると、二つの出来事の継起性（シテが表す動作の先行性）が出てくる。しかし、このような場合を、ヒトの意志的な変化を表す動詞の場合と同様に扱ってよいかは、これらの文の、小説というテクストタイプにおける使用頻度や表現上の機能を考慮したうえで位置づける必要がある。こうしたモノの描写は、小説の中で登場人物として物語の前面で描写されるヒトの動作や変化とは違って、文全体が表す出来事が背景として機能することも多い。小説の地の文において、「花びらが落ちて、雨で**濡れた**」のような定形動詞が完成相の文が継起性を表現するとすれば、その使用の特性を考慮した、テクスト的な分析が必要になるだろう。

また、動詞のタイプについて、主体動作客体変化動詞、主体変化動詞、主体動作動詞の三分類は、互いに重なり合う部分もあり、切断的な分析では記述しきれなかった特性もある。本研究が扱えなかったタイプの動詞の分析をふまえ、これまで分析した動詞の各タイプの分析と往復を行ない、全体を体系的に記述する必要がある。

第二に、出来事の意志性の側面をいっそう詳しく考慮することが、本研究が対象としていない構造の文も含めて、二つの出来事間の関係の全体をとらえるにあたって必要になると思われる。本研究では二つの出来事の主体が異なる文は対象としていないが、同一主体の文の分析を参考に、出来事間の関係をタイプ化することも可能であると思われる。例えば、「太郎は餅を丸めて、花子はそれを箱に**並べた**」のような異主体の文では、同一主体の「太郎は餅を丸めて、箱に**並べた**」のような文と同様、シテが表す副次的な出来事が、定形動詞が表す主たる出来事の実現にあたって必要な結果状態を意図的に準備するという観点から出来事間の関係を記述することができる。二つの動作の継起性（順序）も明確であろう。これに対し、「太郎は餅をついて、花子は小豆を**煮た**」のような異主体の文では、上の例とは違って、シテが表す出来事が、定形動詞が表す出来事にとって意図的に準備されるものであるかどうかという観点からは関係をとらえにくい。むしろ、他の文や文脈で表現されるより大きな目的を実現するために、二つの出来事の組み合わせ全体がその準備として効いているという見方もできるだろう。

第三に、客体の同一性の観点から、シテが用いられる文の単文化、あるいは文における出来事の一体性といった問題をとらえる必要がある。本研究では、シテが主体動作客体変化動詞である場合に、シテと定形動詞が表す出来事（動作）の客体が同一か否か、すなわち客体の同一性の観点を分析に取り入れた。これは記述が手薄であった主体動作客体変化動詞の特徴とバリエーションをとらえるために必要であった。また、主体動作客体変化動詞のみならず、姿勢変化動詞の再帰構造や装着・所持動詞、主体動作動詞に属す他動詞にも客体が同一

の場合が見られたことから、客体の同一性は、シテが他動詞である場合の共通の構文的特徴をとらえたものであると言える。主体の同一性については、従来の記述でも、動詞の中止形が表す出来事の主たる出来事への従属度や、複数の出来事の一体性を論じるためにたびたび言及されてきた。それと同様に、客体が同一性を、複数の出来事の一体性をとらえるための基準とすることも可能であると思われる。また、客体が同一である場合に、客体を表す名詞を、主要な述語である定形動詞ではなく、定形動詞より前にあって副次的な述語である中止形が従えるということは、単なる省略現象ではなく、中止形の動詞（述語）らしさを示す構文的性質として積極的に記述できるかもしれない。いずれも、最も他動詞らしい他動詞である主体動作客体動詞の場合の記述が起点とした、一層詳しい分析が必要となると考えられる。

9.2.3. 動詞の中止形の機能について

第一に、述語らしさについて、今後正面から考察を加える必要がある。

その際の一つの有効な視点になりうるのは、奥田（1989：32）のいう「動詞の、さまざまな要素をひきずってあるくという、構文論的な能力」である。動詞が名詞や副詞などの従属的要素を従えることは、動詞らしさとともに、動詞の述語らしさをとらえることにもつながるように思われる。例えば動詞による「正座して**聞く**」と名詞による「正座で**聞く**」は修飾語的意味・機能上は似通っているように見えるが、前者では「きっちり正座して**聞く**」と言えるのに対して、後者は同じ意味で「きっちり正座で**聞く**」と言えない（つまり「きっちり」によって「正座で」を修飾することはできない）。動詞の中止形と同様の意味・機能を果たすように見える名詞デ格との比較は、このような点を明らかにするために有効になると思われる。こうした事実の分析から、動詞の中止形のより述語らしい特徴を明確にできるかもしれない。このことは、基本的にヲ格名詞をともなって用いられる主体動作客体変化動詞や装着・所持動詞の文の成分としての機能をとらえるうえでも必要であると思われる。

第二に、状況語的機能について全面的に明らかにするには、すでに述べたように、動詞の中止形が、述語らしさを保ちつつ状況語的機能を示しうることをふまえたうえで、原因・結果の関係や、異主体の文も対象に含めた詳細な分析が必要であろう。

第三に、修飾語的意味・機能について、本研究の結果をふまえて一層詳しく把握するためには、動詞の中止形のアスペクト的性質について、一個の動詞述語らしさを示す基準として正面から検討することが、その理論的裏付けも含めて今後の課題である。

総じて、動詞の中止形の副次的な意味・機能の分化を総合的にとらえるためには、動詞が本来持つ述語的機能と、副次的な状況語的機能と修飾語的機能が連続する、あるいは重ねて実現される場合があることに留意する必要があるように思われる。

最後に、本研究では対象外とした場合について本研究の結果をもとに丹念に記述していくことが目下の課題となるが、最終的には、「文を言い切るか、言い切らないか」という動詞の述語としての機能が文にとってどう影響するのか、翻って、すなわち文の本質とは何かを問

うことが目標となる。従って、すでに多くの記述が行なわれている「終止」の構文的機能を持つ諸形式についても、「中止」のあり方を問う上で、再度その特性をとらえなおす必要があるだろう。このことは、本研究でもその一端を示したように、中止形について考えることが、一文の範囲を越えて、文と文の関係、さらにはテクスト全体の構造を視野に入れるべきものであることを意味しているように思われる。

【用例出典】

［第 4～7 章の用例の出典］

①冒頭から 150 例の範囲で地の文のすべての形式の中止形の用例を収集し、かつ同じ範囲の地の文以外の用例を収集した小説作品（30 作品）

（1）浅田次郎（2000）『霞町物語』講談社文庫（短編集）より、（1996）「霞町物語」「夕暮れ隧道」
（2）青山真治（2002）『ユリイカ EUREKA』角川文庫（単行本は 2000 年角川書店）
（3）井上靖（1989）『夏草冬濤（上）』新潮文庫（単行本は 1964 年新潮社）
（4）梅崎春生（1951）『桜島・日の果て』新潮文庫（短編集）より、（1946）「桜島」
（5）遠藤周作（1996）『深い河』講談社文庫（単行本は 1993 年講談社）
（6）小川洋子（1994）『妊娠カレンダー』文春文庫（短編集）より、（1992）「妊娠カレンダー」
（7）奥田英朗（2008）『空中ブランコ』文春文庫（短編集）より、（2003）「空中ブランコ」
（8）小野不由美（2007）『黒祠の島』新潮文庫（単行本は 2001 年祥伝社ノン・ノベル）
（9）角田光代（2004）『対岸の彼女』文春文庫（単行本は 2004 年文芸春秋）
（10）菊村到（2005）『硫黄島』角川文庫（短編集）より、（1957）「硫黄島」
（11）桜庭一樹（2007）『私の男』文春文庫（単行本は 2004 年は文藝春秋）
（12）重松清（2003）『ビタミン F』新潮文庫（短編集）より、（2000）「はずれくじ」
（13）高村薫（2006）『照柿（上）』講談社文庫（単行本は 1994 年講談社）
（14）筒井康隆（1975）『家族八景』新潮文庫（単行本は 1972 年新潮社）
（15）津村節子（2000）『智恵子飛ぶ』講談社文庫（単行本は 1997 年講談社）
（16）なかにし礼（2003）『赤い月（上）』新潮文庫（単行本は 2001 年新潮社）
（17）新田次郎（1971）『八甲田山死の彷徨』新潮文庫（単行本は 1971 年新潮社）
（18）花村萬月（2004）『眠り猫』新潮文庫（単行本は 1990 年徳間書店）
（19）東野圭吾（2003）『予知夢』文春文庫（短編集）より、（1998）「夢想る」、（1999）「騒霊ぐ」
（20）松本清張（1965）『或る「小倉日記」伝』新潮文庫（短編集）より、（1952）「或る「小倉日記」伝」
（21）三浦綾子（1982）『泥流地帯』新潮文庫（単行本は 1977 年新潮社）
（22）三浦しをん（2009）『まほろ駅前多田便利軒』文春文庫（単行本は 2006 年文芸春秋）
（23）三浦哲郎（1989）『白夜を旅する人々』新潮文庫（単行本は 1984 年新潮社）
（24）三島由紀夫（1968）『花ざかりの森・憂国』新潮文庫（短編集）より、（1956）「橋づくし」
（25）水上勉（1976）『櫻守』新潮文庫（中編集）より、「櫻守」（1969）
（26）宮部みゆき（1994）『魔術はささやく』新潮文庫（単行本は 1989 年新潮社）
（27）宮本輝（1989）『優駿（上）』新潮文庫（単行本は 1986 年新潮社）
（28）村上春樹（2007）『東京奇譚集』新潮文庫（短編集）より、（2005）「ハナレイ・ベイ」
（29）横山秀夫（2006）『クライマーズ・ハイ』文春文庫（単行本は 2003 年文芸春秋）
（30）吉村昭（1975）『高熱隧道』新潮文庫（単行本は 1967 年新潮社）

②定形動詞が継続相である用例を全体から収集した小説作品（26 作品）

このうち（2）（7）（11）（14）（15）（18）（20）（22）（24）の 9 冊は①でも収集に用いた。

（1）浅田次郎（2000）『霞町物語』講談社文庫（短編集）より、（1996）「霞町物語」「夕暮れ隧道」「青い火花」「グッバイ・Dr.ハリー」、（1997）「雛の花」「遺影」、（1998）「すいばれ」「卒業写真」

（2）井上靖（1989）『夏草冬濤（上）』新潮文庫（単行本は 1964 年新潮社）

（3）井上靖（1989）『夏草冬濤（下）』新潮文庫（単行本は 1964 年新潮社）

（4）井伏鱒二（1970）『黒い雨』新潮文庫（単行本は 1966 年新潮社）

（5）梅崎春生（1951）『桜島・日の果て』新潮文庫（短編集）より、（1947）「桜島」「日の果て」「崖」「蜆」

（6）遠藤周作（1968）『留学』新潮社（単行本は 1965 年文藝春秋新社）

（7）遠藤周作（1996）『深い河』講談社文庫（単行本は 1993 年講談社）

（8）川端康成（1954）『舞姫』新潮文庫（単行本は 1951 年朝日新聞社）

（9）川端康成（1957）『山の音』新潮文庫（単行本は 1954 年筑摩書房）

（10）桐野夏生（1996）『顔に降りかかる雨』講談社文庫（単行本は 1993 年講談社）

（11）桜庭一樹（2007）『私の男』文春文庫（単行本は 2004 年は文藝春秋）

（12）椎名誠（1989）『岳物語』集英社文庫（単行本は 1985 年集英社）

（13）檀一雄（1950）『リツ子・その愛　その死』新潮文庫（単行本は 1950 年作品社）

（14）なかにし礼（2003）『赤い月（上）』新潮文庫（単行本は 2001 年新潮社）

（15）花村萬月（2004）『眠り猫』新潮文庫（単行本は 1990 年徳間書店）

（16）花村萬月（2004）『猫の息子　―眠り猫Ⅱ―』新潮文庫（単行本は 1994 年トクマ・ノベルズ）

（17）林芙美子（1953）『浮雲』新潮文庫（単行本は 1951 年六興出版）

（18）三浦綾子（1982）『泥流地帯』新潮文庫（単行本は 1977 年新潮社）

（19）三浦綾子（1982）『続・泥流地帯』新潮文庫（単行本は 1979 年新潮社）

（20）三浦しをん（2009）『まほろ駅前多田便利軒』文春文庫（単行本は 2006 年文芸春秋）

（21）三浦哲郎（1989）『白夜を旅する人々』新潮文庫（単行本は 1984 年新潮社）

（22）三島由紀夫（1970）『真夏の死』新潮文庫（短編集）より、（1946）「煙草」、（1947）「春子」、（1951）「離宮の松」、（1952）「クロスワード・パズル」「真夏の死」

（23）宮本輝（1989）『優駿（上）』新潮文庫（単行本は 1986 年新潮社）

（24）向田邦子（1983）『あ・うん』文春文庫（単行本は 1981 年文芸春秋）

（25）村上春樹（1997）『ねじまき鳥クロニクル　第 1 部　泥棒かささぎ編』新潮文庫（単行本は 1994 年新潮社）

（26）村上春樹（2007）『東京奇譚集』新潮文庫（短編集）より、（2005）「どこであれそれが見つかりそうな場所で」「日々移動する腎臓のかたちをした石」「品川猿」

③定形動詞が完成相である用例を一部から収集した作品（14 冊）

すべて②で収集に用いた作品である。

(1) 井上靖（1989）『夏草冬濤（上）』新潮文庫（単行本は 1964 年新潮社）
(2) 井上靖（1989）『夏草冬濤（下）』新潮文庫（単行本は 1964 年新潮社）
(3) 井伏鱒二（1970）『黒い雨』新潮文庫（単行本は 1966 年新潮社）
(4) 川端康成（1957）『山の音』新潮文庫（単行本は 1954 年筑摩書房）
(5) 桐野夏生（1996）『顔に降りかかる雨』講談社文庫（単行本は 1993 年講談社）
(6) 桜庭一樹（2007）『私の男』文春文庫（単行本は 2004 年は文藝春秋）
(7) なかにし礼（2003）『赤い月（上）』新潮文庫（単行本は 2001 年新潮社）
(8) 林芙美子（1953）『浮雲』新潮文庫（単行本は 1951 年六興出版）
(9) 三浦綾子（1982）『泥流地帯』新潮文庫（単行本は 1977 年新潮社）
(10) 三浦しをん（2009）『まほろ駅前多田便利軒』文春文庫（単行本は 2006 年文芸春秋）
(11) 三浦哲郎（1989）『白夜を旅する人々』新潮文庫（単行本は 1984 年新潮社）
(12) 宮本輝（1989）『優駿（上）』新潮文庫（単行本は 1986 年新潮社）
(13) 向田邦子（1983）『あ・うん』文春文庫（単行本は 1981 年文芸春秋）
(14) 村上春樹（1997）『ねじまき鳥クロニクル　第 1 部　泥棒かささぎ編』新潮文庫（単行本は 1994 年新潮社）

［第 8 章の用例の出典］

①電子コーパス「CD-ROM 版　新潮文庫の 100 冊」収集を行なった作品（翻訳と戦中・戦前に発表された作品を除く 35 作品）

〔小説〕

(1) 赤川次郎（1984）『女社長に乾杯！（上・下）』
(2) 阿川弘之（1965）『山本五十六』
(3) 安倍公房（1963）『砂の女』
(4) 有吉佐和子（1966）『華岡青洲の妻』
(5) 石川達三（1968）『青春の蹉跌』
(6) 池波正太郎（1973）『剣客商売』
(7) 井上ひさし（1970）『ブンとフン』
(8) 井上靖（1953）『あすなろ物語』
(9) 井伏鱒二（1965）『黒い雨』
(10) 大江健三郎（1957）『死者の奢り』『他人の足』、(1958)『飼育』『人間の羊』『戦いの今日』『不意の唖』
(11) 大岡昇平（1948）『野火』
(12) 開高健（1957）『パニック』『巨人と玩具』『裸の王様』、(1959)『流亡記』

(13) 北杜夫 (1962)『楡家の人々』
(14) 沢木耕太郎 (1980)『一瞬の夏』
(15) 椎名誠 (1987)『新橋烏森口青春篇』
(16) 塩野七生 (1983)『コンスタンティノープルの陥落』
(17) 司馬遼太郎 (1971)『国盗り物語』
(18) 曾野綾子 (1973)『太郎物語　高校編／大学編』
(19) 立原正秋 (1968)『冬の旅』
(20) 筒井康隆 (1977)『エディプスの恋人』
(21) 壷井栄 (1952)『二十四の瞳』
(22) 新田次郎 (1973)『孤高の人』
(23) 福永武彦 (1954)『草の花』
(24) 星新一 (1977)『人民は弱し官吏は強し』
(25) 松本清張 (1958)『点と線』
(26) 三浦綾子 (1968)『塩狩峠』
(27) 三浦哲郎 (1960)『忍ぶ川』、(1961)『初夜』、『恥の譜』『驢馬』、(1962)『帰郷』
(28) 三島由紀夫 (1956)『金閣寺』
(29) 水上勉 (1961)『雁の寺』、(1963)『越前竹人形』
(30) 村上春樹 (1985)『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』
(31) 山本周五郎 (1963)『さぶ』
(32) 吉行淳之介 (1963)『砂の上の植物群』『樹々は緑か』
(33) 吉村昭 (1971)『戦艦武蔵』

〔エッセー〕
(34) 五木寛之 (1968)『風に吹かれて』
(35) 藤原正彦 (1977)『若き数学者のアメリカ』

②手作業による収集を行なった作品 (32 作品)

(1) 浅田次郎 (1999)『地下鉄に乗って』講談社文庫 (単行本は 1997 徳間文庫)
(2) 石田衣良 (2005)『4TEEN』新潮文庫 (単行本は 2003 新潮社)
(3) 石野径一郎 (1977)『ひめゆりの塔』講談社文庫 (単行本は 1950 山雅房)
(4) 伊集院静 (1997)『機関車先生』講談社文庫 (単行本は 1994 講談社)
(5) 小川洋子 (2005)『博士の愛した数式』新潮文庫 (単行本は 2003 新潮社)
(6) 大江健三郎 (1972)『空の怪物アグイー』新潮文庫 (短編集) より、(1964)「空の怪物アグイー」
(7) 奥泉光 (2003)『ノヴァーリスの引用』集英社文庫 (単行本は 1993 新潮社)
(8) 奥田英朗 (2006)『イン・ザ・プール』文春文庫 (単行本は 2002 文藝春秋)

(9) 小野不由美（1991)『魔性の子』新潮文庫

(10) 恩田陸（2001)『六番目の小夜子』新潮文庫（単行本は 1998 新潮社)

(11) 海堂尊（2007)『チーム・バチスタの栄光（上)』宝島社文庫（単行本は 2006 宝島社)

(12) 金城一紀（2008)『対話篇』新潮文庫（単行本は 2003 年新潮社)

(13) 貴志祐介（1998)『黒い家』角川ホラー文庫（単行本は 1997 角川書店)

(14) 京極夏彦（1998)『文庫版　姑獲鳥の夏』講談社文庫（単行本は 1994 講談社ノベルス)

(15) 黒崎視音（2005)『交戦規則　ROE』徳間文庫（単行本は 2005 年徳間書店)

(16) 重松清（2004)『エイジ』新潮文庫（単行本は 1999 朝日新聞社)

(17) 城山三郎（1984)『硫黄島に死す』新潮文庫（単行本は 1968『硫黄島に死す』光文社)

(18) 鈴木光司（1997)『仄暗い水の底から』角川ホラー文庫（単行本は 1996 角川書店)

(19) 瀬戸内寂聴（1966)『夏の終わり』新潮文庫（単行本は 1963 新潮社)

(20) 高野和明（2004)『13 階段』講談社文庫（単行本は 2001 講談社)

(21) なかにし礼（2003)『赤い月（上）（下)』新潮文庫（単行本は 2001 新潮社)

(22) 梨木香歩（2001)『西の魔女が死んだ』新潮文庫（単行本は 1996 小学館)

(23) 花村萬月（2005)『なで肩の狐』新潮文庫（単行本は 1991 年徳間書店)

(24) 帚木蓬生（1997)『閉鎖病棟』新潮文庫（単行本は 1994 新潮社)

(25) 坂東真砂子（1996)『死国』角川文庫（単行本は 1993 マガジンハウス)

(26) 東野圭吾（2008)『容疑者 x の献身』文春文庫（単行本は 2005 文藝春秋)

(27) 福井晴敏（2010)『ユニコーンの日（上）機動戦士ガンダム UC①』角川文庫（単行本は 2007 角川書店)

(28) 万城目学（2009)『鴨川ホルモー』角川書店（単行本は 2006 産業編集センター)

(29) 宮部みゆき（1993)『レベル 7』新潮文庫（1990 新潮社)

(30) 森見登美彦（2009)『きつねのはなし』新潮文庫（単行本は 2006 新潮社)

(31) 横山秀夫（2006)『クライマーズ・ハイ』文春文庫（単行本は 2003 文藝春秋)

(32) 吉本ばなな（1992)『TUGUMI』中公文庫（単行本は 1989 中央公論社)

【参考文献】

天野みどり（1987a）「日本語文における＜再帰性＞について―構文論的概念としての有効性の再検討」『日本語と日本文学』7，pp. 1-9，筑波大学国語国文学会.

――――――（1987b）「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151，pp. 1-14，国語学会.

荒正子（1983）「から格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会（編）『日本語文法・連語論（資料編）』pp. 397-425，むぎ書房.

新井裕子（2005）〈研究ノート〉「「シテイテ」の用法について」『東京外国語大学日本研究教育年報』9，pp. 65-80，東京外国語大学日本課程.

稲村すみ代（1995）「再帰構文について」『東京外国語大学日本語学科年報』16，pp. 55-80，東京外国語大学日本語学科.

井上和子（1983）「第Ⅰ部　第1章　第8節　文の接続」井上和子（編）『講座　現代の言語1　日本語の基本構造』pp. 127-151，三省堂.

内丸裕佳子（2006）「動詞のテ形を伴う節の統語構造について―付加構造と等位構造との対立を中心に」『日本語の研究』2-1，pp. 1-15，日本語学会.

遠藤裕子（1982）「接続助詞「て」の用法と意味」『音声・言語の研究』2，pp. 51-63，東京外国語大学音声学研究室.

黄文溥（2009）「明治期の口語の小説における動詞の連用中止形の文体的特徴に関する一考察」『日本言語文化研究』13，pp. 1-18，龍谷大学.

大鹿薫久（1986）「「て」接続考」『叙説』12，pp. 219-228，奈良女子大学文学部國語國文学研究室.

大槻文彦（1890）『語法指南』（北原保雄，古田東朔編『日本語文法研究書大成』勉誠社.

――――――（1897）『廣日本文典』大槻家蔵版.

沖森卓也・山本真吾・木村義之・木村一（編）（2015）『品詞別　学校文法講座　第三巻　動詞・形容詞・形容動詞』明治書院.

奥田靖雄（1975）「連用，終止，連体…」奥田靖雄（1984）『ことばの研究・序説』pp. 53-66，むぎ書房（初出時は「布村政雄」名による）.

――――――（1977）「アスペクトの研究をめぐって―金田一的段階」奥田靖雄（1984）『ことばの研究・序説』pp. 85-104，むぎ書房.

――――――（1983a）「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会（編）『日本語文法・連語論（資料編）』pp. 21-149，むぎ書房.

――――――（1983b）「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会（編）『日本語文法・連語論（資料編）』pp. 281-323，むぎ書房.

――――――（1983c）「で格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会（編）『日本語文法・連語論（資料編）』pp. 325-338，むぎ書房.

――――――（1984）『ことばの研究・序説』むぎ書房.

――――――（1989）「なかどめ―動詞の第二なかどめのばあい」言語学研究会（編）『ことばの科学2』pp. 11-47，

むぎ書房.
————（1992）「動詞論」奥田靖雄（著）奥田靖雄著作集刊行委員会（編）（2015）『奥田靖雄著作集 3　言語学編 2』pp. 5-114，むぎ書房.
————（1993）「動詞の終止形」奥田靖雄（著）奥田靖雄著作集刊行委員会（編）（2015）『奥田靖雄著作集 3　言語学編 2』pp. 115-146，むぎ書房.
生越直樹（1988）「連用形とテ形について」『横浜国大国語研究』6，pp. 62-71，横浜国立大学国語国文学会.
郭珍京（2003）「動詞の中止形「～し形」と「～して形」の従属性の違い―共存する場合の意味関係から」『表現研究』78，pp. 48-55，表現学会.
笠井久美子（1988）「日本語の再帰動詞について」『日本語教育論集：日本語教育長期専門研修報告』pp. 53-67，国立国語研究所日本語教育センター.
加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.
加藤陽子（1995）「テ形節分類の一試案―従属度を基準として」『日本語教育論集　世界の日本語教育』5，pp. 209-224，国際交流基金.
片山きよみ（2005）「日本語他動詞の再帰的用法について」『ありあけ（熊本大学言語学論集）』5，pp. 325-369，熊本大学文学部言語学研究室.
川野靖子（2000）「主体変化を表す他動詞文の分析」『筑波日本語研究』5，pp. 39-52，筑波大学大学院博士課程人文社会系日本語学研究室.
菊池朗（1991）「日本語の二次述部」安井稔博士古稀記念論文編集委員会（編）『現代英語学の歩み』pp. 212-220，開拓社.
北原保雄（編）（1982）『日本語文法論術語索引』有精堂出版.
金水敏（1996）「「おる」の機能の歴史的考察」山口明穂教授還暦記念会（編）『山口明穂教授還暦記念国語学論集』pp. 108-132，明治書院.
———（2006）『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房.
工藤真由美（1982）「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4，pp. 51-88，武蔵大学人文学会.
————（1987）「現代日本語のアスペクトについて」『教育国語』91，pp. 2-21，むぎ書房.
————（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現』ひつじ書房.
————（2000）「否定の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法 2　時・否定と取り立て』pp. 93-150，岩波書店.
————（2002）「日本語の文の成分」『現代日本語講座　第 5 巻　文法』pp. 101-119，明治書院.
————（2004）「ムードとテンス・アスペクトの相関性をめぐって」『阪大日本語研究』16，pp. 1-17，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
————（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房.
久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店.
———（1983）『新日本文法研究』大修館書店.
言語学研究会（編）（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房.
言語学研究会・構文論グループ（1990）「なかどめ―動詞の第一なかどめのばあい」pp. 163-179，言語学研究

会（編）『ことばの科学 3』むぎ書房.
呉幸栄（2012）「再帰的な動作をあらわす動詞と名詞とのくみあわせ―着衣動作と脱衣動作をあらわす動詞を中心に」『国際教育』5，pp. 57-65，千葉大学国際教育センター.
近藤泰弘（2007）「平安時代語の接続助詞「て」の機能」『國學院雑誌』108-11，pp. 174-183，國學院大學綜合企画部.
――――（2012）「平安時代語の接続助詞「て」の様相」『国語と国文学』89-2，pp. 49-60，明治書院.
蔡季汝（2007）「再帰使役文について」『明道日本語教育』1，pp. 91-120，明道大学.
坂井菜緒（2000）「動詞の中止形と後続する動詞との時間的関係」『武蔵野女子大学文学部紀要』1，pp. 73-85，武蔵野女子大学文学部紀要編集委員会.
――――（2002）「動詞の中止形と後続する動詞との時間的関係 2」『武蔵野女子大学文学部紀要』3，pp. 71-78，武蔵野女子大学文学部紀要編集委員会.
坂梨隆三（1977）「居られるという言い方について」松村明教授還暦記念会（編）『松村明教授還暦記念　国語学と国語史』pp. 547-576，明治書院.
佐久間鼎（1966）『現代日本語の表現と語法』（増補版）厚生閣.
佐藤武義・前田富祺（編集代表）（2014）『日本語大事典』朝倉書店.
ジョージ・クタッシュ（1983）「「内接節」と「外接節」―複文構成の二つの類型「シテ」形接続を例として」『日本語学』12（2-10），pp. 90-96，明治書院.
新川忠（1990）「なかどめ―動詞の第一なかどめと第二なかどめとの共存のばあい」『ことばの科学 4』pp. 159-171，むぎ書房.
鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房.
――――（1996）『形態論・序説』むぎ書房.
全成龍（1997）「動詞のなかどめ「～して」の機能と意味」『日本文学研究』36，pp. 167-177，大東文化大学日本文学会.
――――（2001）「動詞のなかどめ「～し」と「～して」の違いについて」『国文学　解釈と鑑賞』66-7，pp. 170-174，至文堂.
高橋太郎（1975）「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103，pp. 1-17，国語学会.
――――（1983）「構造と機能と意味―動詞の中止形（～シテ）とその転成をめぐって」『日本語学』2-12，pp. 13-21，明治書院.
――――（1985）「現代日本語のヴォイスについて」『日本語学』4-4，pp. 4-23，明治書院.
――――（2003）『動詞九章』ひつじ書房.
高橋太郎他（2005）『日本語の文法』ひつじ書房.
田川拓海（2012）「分散形態論を用いた動詞活用の研究に向けて―連用形の分布における形態統語論的問題」三原健一・仁田義雄（編）『活用論の前線』pp. 191-216，くろしお出版.
橘豊（1983）「連用形中止法」『日本語学』2-9，pp. 52-60，明治書院.
張麟声（1998）「原因・理由を表す『して』の使用実態について―『ので』との比較を通して」『日本語教育』96，pp. 121-131，日本語教育学会.

津留崎由紀子（1999）「名詞述語の中止形デの機能」『人間文化論叢』2，pp.109-119，お茶の水女子大学大学院人間文化研究科.
――――――――（2000）「ナ形容詞のデ中止形の構文的機能」『人間文化論叢』3，pp.181-191，お茶の水女子大学大学院人間文化研究科.
――――――――（2003）「形容詞の中止形を用いた複文における先行句節と後続句節の関係」『日本語科学』13，pp.7-32，国書刊行会.
寺村秀夫（1981）『日本語教育指導参考書5　日本語の文法（下）』国立国語研究所（大蔵省印刷局）.
――――（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
――――（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版.
トルヒナ・アンナ（2014）「いわゆる「再帰構文」とその限界―動詞のテイル形が結果残存を表すときとは」『日本語文法』14-1，pp.20-36，日本語文法学会.
中島尚樹（1981）「「シテ」形接続とその構造」『日本文学誌要』25，pp.58-72，法政大学国文学会.
中野はるみ（1997）「「シテ形接続」をめぐって―付帯状態のシテ節」『別府大学紀要』39，pp.67-85，別府大学.
――――――（1998）「主節とシテ節の意味的関係」『別府大学紀要』40，pp.141-142，別府大学.
中俣尚己（2015）『日本語並列表現の体系』ひつじ書房.
成田徹男（1983）「動詞の「て」形の副詞的用法―「様態動詞」を中心に」渡辺実（編）『副用語の研究』pp.137-158，明治書院.
仁田義雄（1982）「再帰動詞・再帰用法―Lexico-Syntaxの姿勢から」『日本語教育』47，pp.79-90，日本語教育学会.
――――（1995）「シテ形接続をめぐって」仁田義雄編『複文の研究（上）』pp.87-126，くろしお出版.
日本語記述文法研究会（編）（2010）『現代日本語文法1　第1部総論　第2部形態論　総索引』くろしお出版.
日本語文法学会（編）（2014）『日本語文法事典』大修館書店.
半藤英明（2015）「第1章　学校文法における活用と音便」沖森卓也・山本真吾・木村義之・木村一（編）『品詞別　学校文法講座　第三巻　動詞・形容詞・形容動詞』pp.1-30，明治書院.
益岡隆志（2014）「日本語の中立形接続とテ形接続の競合と共存」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦（編）『日本語複文構文の研究』pp.521-542，ひつじ書房.
松田剛史（1984）「「ト、テ、タラ」について」『大谷女子大国文』14，大谷女子大学国文学会.
――――（1985）「「て」、連用形、「と」の分布」『大谷女子大国文』15，大谷女子大学国文学会.
三上章（1970）『文法小論集』くろしお出版.
―――（1972a）『現代語法序説―シンタクスの試み』くろしお出版（初出は1953刀江書院）.
―――（1972b）『現代語法新説』くろしお出版（初出は1955刀江書院）.
南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店.
――――（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
三原健一（2010）「連用形の本質」『日本語・日本文化研究』20，pp.1-9，大阪大学日本語日本文化教育センター.

————（2011）「テ形節の意味類型」『日本語・日本文化研究』21，pp. 1-12，大阪大学日本語日本文化教育センター.
————（2013）「テ形の統語構造」『日本語・日本文化研究』23，pp. 1-15，大阪大学日本語日本文化教育センター.
三宅知宏（1995）「～ナガラと～タママ～とテ―付帯状態の表現」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』pp. 441-450，くろしお出版.
宮島達夫（1965）「いくつかの文法的類義表現について」国立国語研究所『国立国語研究所論集　2　ことばの研究　第 2 集』pp. 75-106，秀英出版.
————（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版.
————（1992）「1 拍語形の不安定性」宮島達夫（1994）『語彙論研究』pp. 137-144，むぎ書房.
————（1994）『語彙論研究』むぎ書房.
宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』くろしお出版.
村木新次郎（1986）「ヴォイスの輪郭」『国文学解釈と鑑賞』52-5，pp. 64-73，至文堂.
————（1991）「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」仁田義雄（編）『日本語のヴォイスと他動性』pp. 1-30，くろしお出版.
————（2006）「「-ながら」の諸用法」益岡隆志・野田尚史・森本卓郎（編）『日本語文法の新地平 3　複文・談話編』pp. 1-23，くろしお出版.
望月通子（1990）「条件づけをめぐって―「理由」の「シテ」と「カラ」」『日本学報』9，pp. 33-51，大阪大学文学部日本学研究室.
森田耕平（2015）「動詞の第二中止形が表す意味―アスペクトと動詞のタイプに注目して」『阪大日本語研究』27，pp. 83-108，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
————（2016）「動詞中止形の継続相の意味・機能―シテイテとシテオリとの比較による分析」『日本語の研究』12-1，pp. 18-34，日本語学会.
————（2016）「動詞の第二中止形の意味と機能―姿勢変化動詞の分析」『阪大日本語研究』27，pp. 23-51，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
森田良行（1989）「～て」『基礎日本語辞典』pp. 752-756，角川書店.
李善姫（2009）『日本語の移動動詞の研究』東京外国大学大学院総合国際学研究科博士論文.
由揚（2014）「原因・理由を表す「テ」形節・「タメ（ニ）」節・「ノデ」節の使用制約―前・後件の「緊密性」という観点から」『文学史研究』54，pp. 44-54，大阪市立大学国語国文学研究室.
吉岡郷甫（1910）『改訂日本口語法』大日本図書株式会社.
吉田妙子（2012）『日本語動詞テ形のアスペクト』晃洋書房.
吉永尚（1997）「付帯状況を表すテ形動詞と意味分類」『日本語教育』95，pp. 73-84，日本語教育学会.
———（2008）『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院.
———（2012）「テ形節の意味と統語」三原健一・仁田義雄（編）『活用論の前線』くろしお出版.
渡辺義夫（1983）「カラ格名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会（編）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房.

Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon (eds.) 2006. *Serial Verb Constructions: A cross-linguistic typology*. Oxford: Oxford University Press.

Bjarke Frellesvig, Masayoshi Shibatani and John Charles Smith (eds.) 2007. *Current Issues in the History and structure of Japanese*. Tokyo, Japan: Kurosio Publishers.

Haspelmath, M.and König, E. (eds.) 1995. *Converbs in Cross-Linguistic Perspective: Structure and Meaning of Adverbial Verb Forms——adverbial participles, gerunds*. Mouton de Gruyter.

Kortman, B. 1991. *Free Adjuncts and Absolutes in English: Problems of control and interpretation*. London and New York: Routledge.

Kortman, B. 1995. "Adverbial participal clauses in English", in: Haspelmath, M. and König, E. (eds.)

Shibatani, Masayoshi. 2007. "Grammaticalization of motion verbs", In Bjarke, Masayoshi Shibatani, and John Charles Smith (eds.)

Shibatani, Masayoshi. 2009. "On the form of complex predicates: Toward demystifying serial verbs" In Johannes Helmbrecht, et al. (eds.) *Form and Function in Language Research*. Berlin: Mouton de Gruyter.

謝辞

本研究を進めるにあたっては、長きにわたり多くの方にお世話になりました。ここで御礼申し上げたいと思います。

田野村忠温先生には、博士後期課程に入ってから指導教官としてご指導を賜ることになりましたが、本研究に取り組み始めた頃から、常に温かい雰囲気のもとでご指導頂きました。繰り返し助言を頂いた「初めて本研究のテーマに接する読み手に対して、研究の魅力をいかに丁寧に伝えるか」という点については、最後まで悩んだところではありましたが、今後の研究活動にあたっても、読み手・聞き手の理解を考えることの大切さを学びました。

学部・博士前期課程の指導教官の工藤真由美先生には、中止形というテーマとの出会いへ導いて頂いたことにまず深く感謝申し上げたいと思います。また「連語論」の演習で、実例を収集して観察することの大切さ、相互関係にある要素間の結びつきをとらえることの難しさと面白さを学んだことが、本研究の根本にあると考えております。本当にありがとうございました。

また、副指導教官の渋谷勝己先生には、学部卒業論文執筆の時から現在まで、記述の内容から形式に至るまで貴重なご意見を頂きました。深く感謝致します。

甲南大学の吉村（八亀）裕美先生、大阪府立大学の山東功先生には、用例の見方や、中止形研究の位置づけ、また研究者としての姿勢など、常に貴重なアドバイスを賜りました。また神戸大学の齊藤美穂先生、朴秀娟先生には学部の頃からゼミ等でいつも議論に付き合って頂き、考えを深めることができました。日本語学講座の先輩でもある皆様の温かいサポートがなければ執筆を続けていくことは決してできませんでした。ここにお礼を申し上げます。

最後に、現在所属する神戸大学国際教育総合センターの河合成雄先生、朴鍾祐先生には、本務の傍ら博士後期課程に在籍することを快くお許しいただきましたことを、ここに心より感謝申し上げます。

森田　耕平